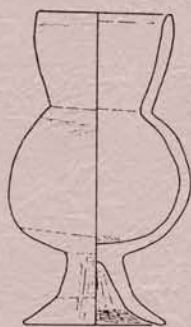


近畿自動車道(久居～勢和)

埋蔵文化財発掘調査報告

第 3 分 冊 1

ビハノ谷遺跡
中尾遺跡
東峡遺跡・女牛谷古墳群



1991・3

三重県教育委員会
三重県埋蔵文化財センター



中尾遺跡全景（北上空から）



東峽遺跡・女牛谷古墳群全景（南上空から）

序

近畿自動車道関・伊勢線第8次区間（久居～勢和）建設予定地内にかかる現地発掘調査は昭和59年度から開始し、同63年度上半期に終了いたしました。遺跡の所在地は北から久居市、一志町、嬉野町、松阪市、多気町、勢和村の2市3町1村の行政区域にまたがります。遺跡件数にして計41遺跡、面積にして約15万㎡が試掘調査、あるいは本調査の対象となったわけです。

遺跡の種類としては、集落跡、墓跡、生産跡等多岐にわたり、また時代的にも旧石器時代から中近世（鎌倉・室町・江戸時代）に至るまでの各種各様の遺跡が発掘調査されました。その成果の一端は年度毎に刊行してきました発掘調査概報に紹介してきたところではありますが、昭和63年度からは現地調査と並行して本格的な整理・報告書作成業務も開始してきました。そして、昭和63年度には59・60年度に発掘調査した橿田川流域に所在する花ノ木遺跡、牧瓦窯跡群他8遺跡の報告（第1分冊）を刊行いたし、翌平成元年度には松阪市西部山麓や扇状地に所在する藪ノ下遺跡他10遺跡の報告書（第2分冊）を続けて刊行したところでもあります。

さて、今回の調査報告書（第3分冊）は主に昭和62・63年度に現地発掘調査を実施した14遺跡の調査成果の報告で、またこれらの遺跡は久居市、一志町、嬉野町に所在する遺跡であります。時代的には多岐にわたりますが、特に縄文時代の土器を多量に出土した嬉野町所在の堀之内遺跡は資料的にも注目され、併せて当遺跡は奈良・平安・鎌倉時代にも大集落が営まれていたことがわかり、調査規模、期間ともに大きくなりました。

中村川兩岸の段丘、台地には悉く大きな発掘トレンチが入れられた形となり、天保遺跡・天保古墳群等、その地域に根ざした貴重な文化遺産が日の目を見ることになりました。そして、巨視的にはいわゆる一志郡内の歴史と文化を解明するにあたっての多くの重要な所見と成果を得たことは消極的ではありながら記録保存の一つの大きな役割とでも言えましょう。

それはさておき、現地調査は言うに及ばず、整理・報告書作成業務にたいしても、日本道路公団をはじめとして多方面の方々から暖かいご援助とご協力をいただきました。いちいちお名前は記しませんが、文末ながらここに深く感謝申し上げます。

平成3年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 中 林 昭 一

例 言

1. 本書は平成2年度に三重県教育委員会が、日本道路公団名古屋建設局から委託を受けて実施した近畿自動車道関・伊勢線第8次区間（久居～勢和）建設予定地内にかかる埋蔵文化財発掘調査（整理・報告書作成業務）のうち、ビハノ谷遺跡、中尾遺跡、東峽遺跡・女牛谷古墳群の発掘調査報告書（第3分冊1）である。
2. 調査（整理・報告書作成業務）にかかる費用は、日本道路公団の全額負担による。

3. 調査（整理・報告書作成業務）体制は下記のとおりである。

・調査主体 三重県教育委員会

・調査担当 三重県埋蔵文化財センター調査第2課第1係

次長兼調査第2課課長 山澤義貴

主査 新田 洋・主事 河北秀実

主事 増田安生・主事 齋藤直樹

技師 大川勝宏・主事 伊藤裕偉

主事 角谷泰弘（伊勢市教育委員会から派遣）

主事 稲本賢治（多気町教育委員会から派遣）

主事 前川嘉宏（玉城町教育委員会から派遣）

管理指導課 主事 小坂宜広・主事 江尻 健

川崎正幸（臨時調査員）・反町瑩子

采野妙子・谷久保美知代・吉村道子

山分孝子・白石みよ子・乾ひとみ

竹内由美・上村かおり・中山学・反町有子（室内整理員）

森田幸伸（皇學館大学学生）

近藤大典（皇學館大学学生）

4. 本書作成にかかる各整理は上記体制で行い、報文の執筆分担については目次、及び各文末にも明記した。調査当時、発掘調査担当者であった野田修久氏（現多気郡明和町上御糸小学校教諭）には、報文執筆の一部をお願いした。中尾遺跡出土石器の実測は、田中智子氏によるものである。

遺物整理、報文執筆にあたっては、下記の方々からご指導・助言を賜った。記して謝意を表する。

（順不同、敬称略）

奥 義次（県立松阪高等学校教諭）

磯部 克（県立津西高等学校教諭）

5. 本書掲載の3遺跡については既に刊行の『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』（三重県教育委員会・1988.3）『同Ⅴ』（同・1989.3）にその調査概要は公表をしているが、本書をもって最終的な報告書とする。

6. 本書に収録した各遺跡の記録類、出土遺物は三重県埋蔵文化財センターで保管している。

7. 本書に使用した遺構表示略記号は下記のとおりである。また遺構実測図作成にあたっては国土調査法による第Ⅵ座標系を基準とし、図面上の方位は座標北を用いた。

S B 竪穴住居、掘立柱建物

S D 溝、堀

S R 道路

S K 土坑

S X 墓、その他性格不明遺構

8. スキャニングによるデータ取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

目 次

序		
例 言		
目 次		
図 版 目 次		
挿 図 目 次		
表 目 次		
I. 前 言	（河北 秀実） …	1
II. 位置と歴史的環境	（増田 安生） …	9
III. ビハノ谷遺跡	（小坂 宜広） …	13
IV. 中尾遺跡	（河北 秀実） …	29
V. 東峡遺跡・女牛谷古墳群	（前川 嘉宏・野田 修久） …	39

図 版 目 次

ビハノ谷遺跡		10号墳……………	64	
P L 1	A 地区全景……………	25	P L 5 調査区南尾根……………	65
	S B 11……………	25	P L 6 調査区南尾根遠景……………	66
P L 2	B 地区全景……………	26	S X 4……………	66
	S B 6……………	26	P L 7 5号墳・S X 4……………	67
P L 3	S K 10……………	27	5号墳・6号墳……………	67
	出土遺物……………	27	P L 8 5号墳・6号墳・S D 13・S R 14・S R 15……………	68
P L 4	出土遺物……………	28	6号墳・S R 14……………	68
中 尾 遺 跡		P L 9 S X 12……………	69	
P L 1	調査前風景……………	35	S X 5……………	69
	発掘区全景……………	35	P L 10 S X 6……………	70
P L 2	発掘区西半……………	36	7号墳周囲……………	70
	S B 1……………	36	P L 11 7号墳……………	71
P L 3	S B 2……………	37	S X 4 主体部・8号墳……………	71
	S B 3……………	37	P L 12 S X 4・8号墳……………	72
P L 4	出土遺物……………	38	S X 4・S X 8……………	72
東峽遺跡・女牛谷古墳群		P L 13 4号墳……………	73	
P L 1	調査区遠景……………	61	S X 9……………	73
	調査区全景……………	61	P L 14 9号墳・S X 9……………	74
P L 2	調査区西尾根遺構全景……………	62	9号墳……………	74
	調査区西尾根……………	62	P L 15 調査区全景……………	75
P L 3	S X 1・S X 2・10号墳……………	63	P L 16 出土遺物……………	76
	S X 2……………	63	P L 17 出土遺物……………	77
P L 4	S X 3……………	64	P L 18 出土遺物……………	78

挿 図 目 次

前 言		第9図 S B 1 実測図……………	17	
第1図	発掘調査遺跡位置図……………	5	第10図 S B 2 実測図……………	17
第2図	本書所収遺跡位置図……………	8	第11図 S B 6～8 実測図……………	18
位置と歴史的		第12図 S K 10 実測図……………	19	
第3図	遺跡分布図……………	11	第13図 S B 11～14 実測図……………	19
ビハノ谷遺跡		第14図 A・B 地区出土遺物実測図……………	23	
第4図	遺跡地形図……………	13	第15図 B 地区出土遺物実測図……………	23
第5図	調査区位置図……………	14	第16図 B 地区出土石鏃実測図……………	24
第6図	調査区地区割図……………	14	第17図 B 地区出土縄文土器実測図……………	24
第7図	A 地区遺構平面図……………	15	中 尾 遺 跡	
第8図	B 地区遺構平面図……………	16	第18図 遺跡地形図……………	29

第19図	発掘区位置図……………	30	第29図	S X 1 ～ S X 3 ・ 10号墳測量図……………	47
第20図	発掘区土層断面図……………	30	第30図	S X 12・ S R 14・ S R 15・ 6号墳測量図…	48
第21図	発掘区平面図・掘立柱建物実測図……	31	第31図	S X 11・ S D 13・ S R 15・ 5号墳測量図…	49
第22図	遺物実測図……………	33	第32図	7号墳・ 8号墳・ S X 10測量図……………	50
東峡遺跡・女牛谷古墳群					
第23図	周囲の主な関連遺跡位置図……………	40	第33図	S X 4 ～ S X 7 測量図……………	51
第24図	遺跡地形図……………	41	第34図	S X 8 ・ 4号墳測量図……………	52
第25図	自動車道路線範囲と遺構配置図……………	42	第35図	S X 9 ・ 9号墳測量図……………	53
第26図	調査区西尾根遺構配置図……………	44	第36図	S X 2 ・ S X 9 ・ S X 4 主体部・ 7号墳 主体部実測図……………	55
第27図	調査区東尾根・南尾根遺構配置図……	45	第37図	出土遺物実測図……………	56
第28図	調査区南尾根遺構配置図……………	46	第38図	出土遺物実測図……………	57

表 目 次

前 言		東峡遺跡・女牛谷古墳群			
第1表	遺構実測図・遺物実測図整理番号 一覧表……………	3	第5表	東峡遺跡・女牛谷古墳群の遺構一覧…	39
第2-1表	発掘調査遺跡一覧表……………	6	第6表	東峡遺跡・女牛谷古墳群出土遺物 一覧(1)……………	58
第2-2表	発掘調査遺跡一覧表……………	7	第7表	東峡遺跡・女牛谷古墳群出土遺物 一覧(2)……………	59
位置と歴史的環境					
第3表	周辺の遺跡一覧……………	11			
中 尾 遺 跡					
第4表	出土遺物観察表……………	32			

I. 前 言

1. 調査に至る経過

近畿自動車道関・伊勢線は三重県鈴鹿郡関町を起点とし、伊勢市楠部町までの全長約68kmの自動車専用道路である。

近畿自動車道関・伊勢線のうち、関～久居間（第5次区間）約21kmは昭和50年10月に既に供用されている。今回の建設計画はその延長である久居～伊勢間約47kmの区間で、昭和47年に基本計画が決定されている。

このうち全長26.1kmの久居～勢和間は、第8次区間として昭和53年に整備計画決定と施工命令が出された。そして昭和54年4月には路線発表がなされ、同59年3月には幅杭の設置が開始された。

これに先立ち県教育委員会文化課は昭和50年に久居～松阪間の埋蔵文化財分布調査を、昭和53年には松阪～勢和間の埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果、計画地内に埋蔵文化財が34箇所、面積にして計約108,500㎡所在することが確認された。昭和54年8月には計画地内の埋蔵文化財所在状況を日本道路公団あてに提示し、以後日本道路公団、県土木部道路建設課、県教育委員会文化課の3者で文化財の保護とその取り扱いについて本格的な協議を開始するに至った。

現地の発掘調査は昭和59年9月に日本道路公団と三重県教育委員会の間で発掘調査委託契約を締結し、同年12月から多気町および勢和村地内の遺跡で第1次調査（試掘調査）を開始した。結果的には久居～勢和間（第8次区間）の調査は昭和63年までの5年間を費やし、最終的な遺跡数は41遺跡、総調査対象面積は151,715㎡となった。

さて第3分冊に掲載する遺跡は、昭和61年度から同63年度にかけて調査された久居市、一志町、嬉野町にまたがる15遺跡である。

昭和61年度には、小戸木遺跡、堀之内遺跡、中尾遺跡、東峽遺跡（ビハノ谷古墳群）、女牛谷古墳群の第1次調査（試掘調査）が行われた。

昭和62年度には、前年度に第1次調査を行った堀之内遺跡、中尾遺跡、東峽遺跡、女牛谷古墳群の第2次調査（本調査）と、戸木遺跡、鳥居本遺跡、焼野遺跡、天保遺跡、天保古墳群の第1次調査（試掘調査）と第2次調査（本調査）、さらに小戸木遺跡の2回目の試掘調査及び庄村遺跡、焼野古墳、天花寺古墳群の第1次調査を行った。調査面積は約9万㎡におよび、特に天花寺古墳群から女牛谷古墳群までは調査遺跡が数珠状に連続しており、南北延長4kmにわたる大トレンチを入れることになった。

昭和63年度は、前年度からの継続調査としては、鳥居本遺跡の南半部、天保古墳群、堀之内遺跡C地区下層の本調査が行われ、合わせて西野・北広遺跡の第1次調査（試掘調査）と西野7号墳およびビハノ谷遺跡の第2次調査（本調査）が行われた。

学問的にも、近世の遺構・遺物が大量に出土した戸木遺跡、弥生時代の竪穴住居と方形周溝墓を検出した鳥居本遺跡、雲珠、杏葉などの馬具が出土した天保古墳群、古墳～平安時代にかけての集落を検出し、さらに下層で縄文時代中期から晩期の土器が大量に出土した堀之内遺跡等、各遺跡で大きな成果を得ることができた。

調査にあたっては、日本道路公団松阪工事事務所、県土木部近畿道対策室、久居市、一志町、嬉野町の各関係機関、地元自治会をはじめ、関係各位より格別の御協力と御配慮をいただいた。また三重県住宅供給公社、三重県土地開発公社からはひとかたならぬお力添えがあった。以上、文末ながら深く感謝の意を表したい。

2. 調査および整理の方法

1. 現地調査の方法

近畿自動車道関・伊勢線第8次区間（久居～勢和）にかかる遺跡発掘調査は、時代的には、先土器時代から中世に及び、遺跡の種類においても集落跡、古墳、瓦窯跡、中世墓、中世城館など多種多様のものがあった。そのために統一的な調査方法をとることはできなかったが、原則的な方法を以下に記す。

地区割

計画路線は松阪市大河内町の国道166号線以南は南東へ曲がるが、以北ではほぼ南北方向をとる。そのため4m方眼で設定する地区杭は、各遺跡毎に適切な道路センター杭2点を結ぶ延長線方向に、北から南へ数字を、これと直交する方向で西から東へアルファベットを与え、各グリッドの北西の杭をグリッドの名称とした。

遺構カード

遺構カードは原則として4m×4mのグリッド毎に作成する。略図は遺構検出後、掘り下げまでに記入することとし、遺構の重複関係等はこれに明示しておく。

遺構番号はピットについては各グリッドごとに通し番号を付すこととし、堅穴住居・溝・土坑等は遺跡ごとの通し番号とする。

写真撮影

遺構等の写真撮影は原則として6cm×9cm版（モノクロネガ、カラーリバーサル）、及び35mm版（モノクロネガ、カラーリバーサル）による。このほか全景・特殊遺構等の影響は4×5インチ版（モノクロネガ、カラーリバーサル）もあわせて使用する。また35mmデータカメラ（カラーネガ）でも同一カットの撮影をするほか、作業進捗状況にあわせて日誌としての撮影も行った。

使用したカメラはウイスタSP（6×9cm版・4×5インチ版）ニコンFG、FE2（35mm版）である。

遺構実測

道路工事計画に関する杭が国土座標に基づくため、将来予想される隣接地での発掘調査との関係が把握

できるように、遺構実測は国土座標に基づいて行った。遺構実測は遣り方実測を原則とし、空中写真測量も導入した。なお、遺構実測図には各地区杭も表示するようにした。当地域の座標系は第VI系である。

2. 資料整理の方法

遺構実測図等

遺構実測、断面実測等の図面は、航測図面のような特殊なものを除き、原則として50cm×35cmの方眼紙（2mm方眼）を使用し、各々に6桁の番号を付す。番号のうち上2桁は、調査対象遺跡の番号（第1表の一覧表参照）とし、下4桁各遺跡ごとの通し番号とする。これらの図面はA2版の図面ファイルに収納し、図面番号、図面の内容、縮尺等を記入した一覧表を2部作成し、1部を各図面ファイルに貼付、他の1部を綴じ込んで図面台帳とする。なお、各図面ともマイクロ撮影も行い、同様に6桁の通し番号を付した後ファイルへ整理する。

遺物実測図

出土遺物のうち実測可能なものは、原則としてすべて実測する。そして各々の遺物に6桁の通し番号を付す。番号のうち上2桁を調査対象遺跡の番号とし、下4桁を遺物の通し番号とする。これらの図面はA2版ファイルに収納し、各遺物の番号、種類、名称、法量等のデータを記入した一覧表を作成する。また、遺物実測図はマイクロ撮影を行い、データを記入した後ファイルする。このマイクロフィルムから原寸の2分の1に引き伸ばしたものを貼付し、データを記入したA4版の遺物カードを個々の遺物について作成し、遺物台帳として保管する。

また、実測不可能な遺物でも特にピックアップしたのものには6桁の通し番号を与え、一覧表に記載する。なお、6桁の通し番号の与えられた遺物については遺物、及び遺物ラベルにも、その番号を注記する。

遺構写真

モノクロ写真はベタ焼きとともにネガアルバムに貼付整理し、各コマ毎に地区名、遺構名、撮影方向等のデータを記す。

カラースライドは、図面及び遺物と同様の方法により、各コマ毎にファイル枠に6桁の通し番号を付す。そして、地区名、遺構名、撮影方向等のデータを記入した一覧表を作成し、1部をスライドファイルへ添付し、他の1部を台帳として保管する。

遺物写真

モノクロ、カラーとも各遺物に付された6桁の通し番号によって整理を行う。整理は遺構写真と同様である。

拓 本

拓本は、報告書図版等に使用する時はコピーを使用することとし、原本は別に保管する。その際に拓本はA3版の台紙に貼り付け、遺物に付された6桁の通し番号を明記し、これをA3版のクリアファイルへ収納整理し、検索を容易にする。

本報告書に所収の遺跡についての各図面、遺物に付した6桁の通し番号は第1表の通りである。

3. 調査の体制

発掘調査は、三重県教育委員会が主体となり、同事務局文化課文化財第二係が担当した。

以下は、昭和61～63年度の調査体制である。

昭和61年度

文化財第二係

係長 伊藤久嗣 総括
 技師 新田 洋 調整・協議、天神山古墳群ほか
 主事 田中喜久雄 横尾古墳群
 主事 田村陽一 藪ノ下遺跡
 主事 河北秀実 平林古墳群
 主事 宮田勝功 大河内城堀切ほか
 技師 野原宏司 寄谷遺跡ほか
 主事 野田修久 寄谷遺跡ほか
 臨時調査員 青木 尚根
 臨時調査員 谷 伸二
 室内整理員 谷久保美知代
 室内整理員 近藤豊美
 室内整理員 大西友子
 室内整理員 野崎栄子
 室内整理員 山本紀子

昭和62年度

文化財第二係

係長 伊藤久嗣 総括
 技師 新田 洋 調整・協議、焼野遺跡ほか
 主事 山下雅春 戸木遺跡ほか
 主事 田中喜久雄 戸木遺跡
 主事 増田安生 堀之内遺跡ほか
 主事 田村陽一 天保遺跡ほか
 主事 河北秀実 中尾遺跡ほか
 主事 宮田勝功 鳥居本遺跡ほか
 主事 野田修久 天保古墳群ほか
 臨時調査員 木許 守
 室内整理員 谷久保美知代
 室内整理員 近藤豊美
 室内整理員 山本紀子
 室内整理員 大西友子
 室内整理員 野崎栄子
 室内整理員 中谷とも代

遺跡番号	遺 跡 名	遺 構 実 測 図	遺 物 実 測 図
12	中尾遺跡	12-0001~0017	12-0001~0042
13	東峽遺跡	13-0001~0024	13-0001~0038
14	女牛谷古墳群	13-1001~1004 14-0001~0041	14-0039~0049
40	ビハノ谷遺跡	40-0001~0023	40-0001~0070

第1表 遺構実測図・遺物実測図整理番号一覧表

室内整理員 東 千恵子
室内整理員 山際みち子
室内整理員 孝久由希子

昭和63年度

文化財第二係

主幹兼係長 伊藤久嗣 総括
技師 新田 洋 調整・協議、西野7号墳
主事 田中喜久雄
主事 田村陽一 堀之内遺跡
主事 河北秀実 鳥居本遺跡
主事 小坂宜広 ビハノ谷遺跡ほか
主事 山崎恒哉 西野7号墳
主事 野田修久 天保古墳群ほか
室内整理員 谷久保美知代
室内整理員 近藤豊美
室内整理員 大西友子
室内整理員 野崎栄子
室内整理員 脇葉輝美
室内整理員 山際みち子
室内整理員 東千恵子
室内整理員 孝久由希子
室内整理員 小坂規美子

調査指導（昭和61～63年度. 順不同. 敬称略）

八賀 晋（三重大学教授）
広岡公夫（富山大学教授）
三辻利一（奈良教育大学教授）
堅田 直（帝塚山大学教授）
水野正好（奈良大学教授）

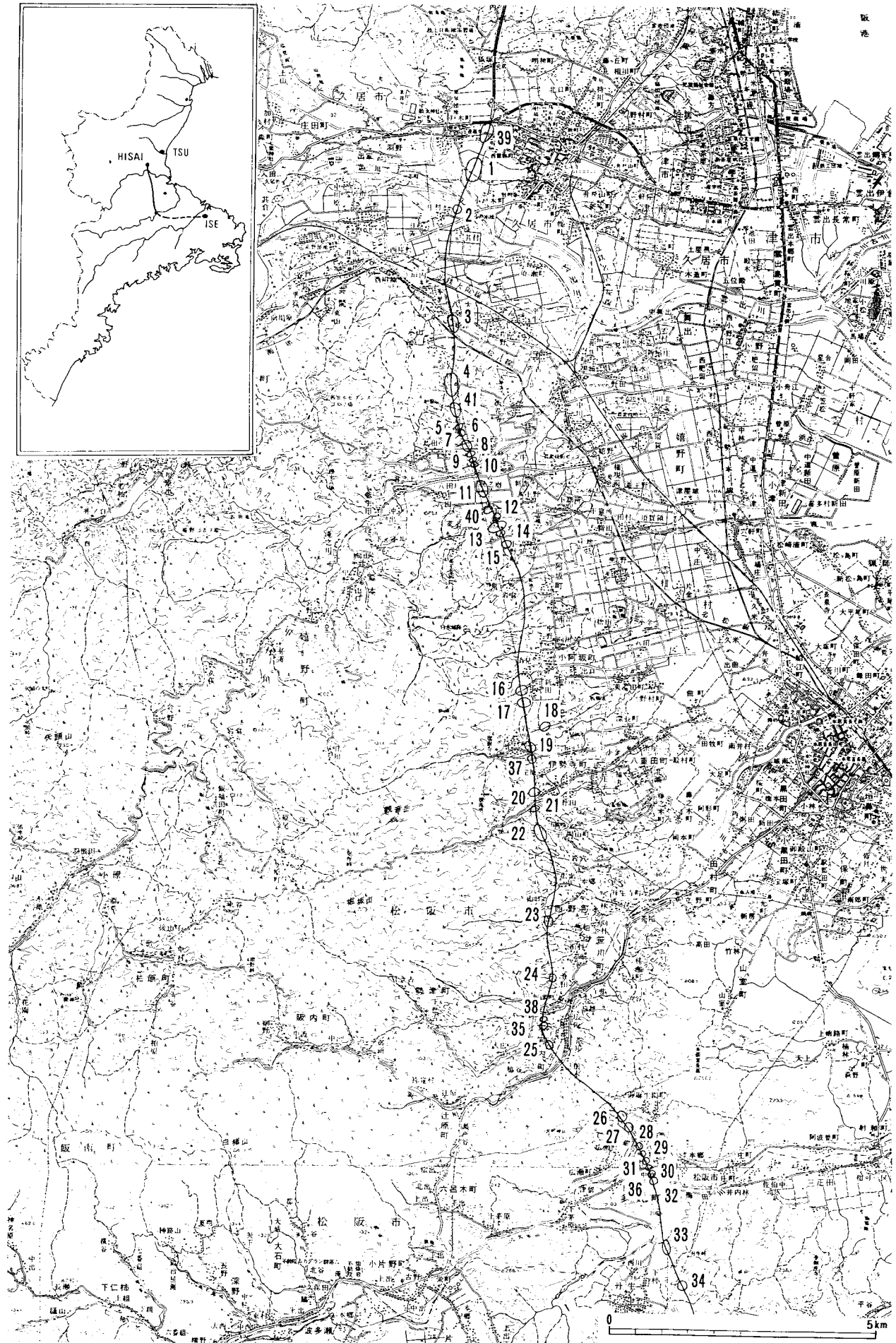
伊藤秋男（南山大学教授）
木下正史（奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮
跡発掘調査部考古第二調査室長）
西村 康（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財
センター発掘技術研究室長）
大脇 潔（奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮
跡発掘調査部主任研究官）
泉 拓良（奈良大学助教授）
西山要一（奈良大学助教授）
植野浩三（奈良大学助手）
千葉 豊（京都大学埋蔵文化財調査研究セン
ター助手）
安孫子昭二（東京都文化課学芸員）
石黒 立人（（財）愛知県埋蔵文化財センター）
小玉 道明（三重県総務部学事文書課主幹）
広瀬 和久（三重県農業技術センター環境調査
研究室室長）
原 正之（三重県農業技術センター研究員）
奥 義次（度会町教育委員会）
磯部 克（三重県立津西高等学校教諭）

発掘調査土木工事部門担当

三重県住宅供給公社・三重県土地開発公社

堀内信吾
稲葉庄衛
浜口安光
田中和美
仲田辰実

（河北秀実）



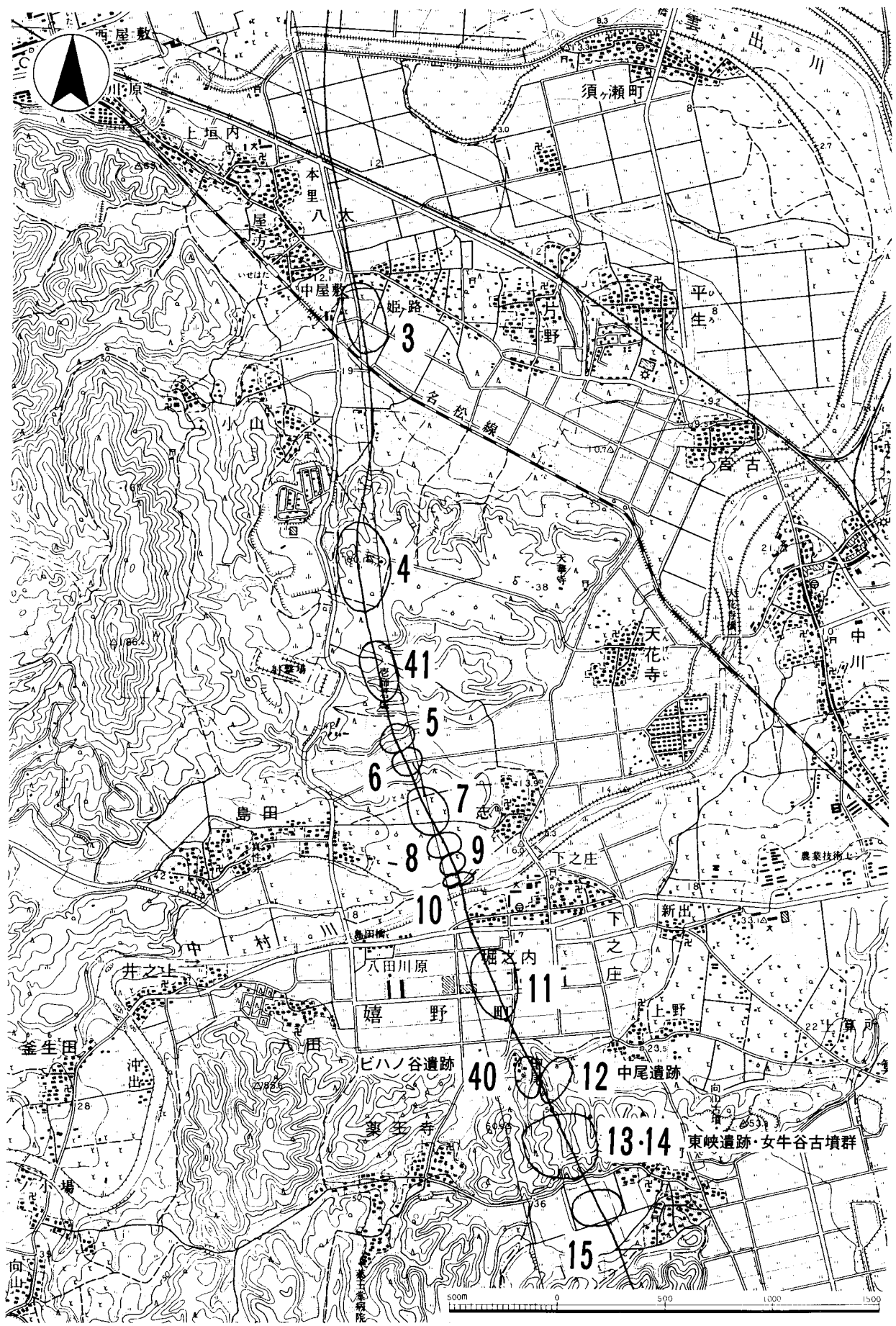
第1図 発掘調査遺跡位置図 (1 : 100, 000)

番号	遺跡名	所在地	調査面積(m ²)		調査期間 (元号は昭和)	担当者	概要		
1	小戸木遺跡	久居市小戸木町	192	計432	62. 3. 3. ~ 3. 5 62. 9. 20 ~ 9. 24	宮田 勝功	遺構・遺物なし(試掘)		
			240			木許 守	〃 (〃)		
2	庄村遺跡	一志町庄村		304	62. 9. 14 ~ 9. 20	新田 洋	遺構なし・遺物微量(試掘)		
3	鳥居本(八反田)遺跡	一志町小山、新沢田	8,900	11,540	62. 9. 24 ~ 9. 62. 3. 7 63. 5. 16 ~ 7. 27	宮田 勝功	弥生中期方形周溝墓等検出		
			2,640			小坂 宜広 河北 秀実	飛鳥時代の井戸検出		
4	西野(天花寺)古墳群	嬉野天花寺		3,400	62.11. 9 ~ 11.31 63. 5. 16 ~ 9.28	新田 洋	(山林伐開)		
						新田 洋 山崎 恒哉	石剣・車輪石片出土、前期の古墳1基		
5	焼野(口山田)古墳	嬉野町鳥田		2,010	62. 7. 11 ~ 9.30	山下 雅春	古墳は細寄せによる盛土と判明、石核出土(試掘)		
6	焼野(口山田)遺跡	嬉野町鳥田		3,500	62. 5. 11 ~ 8.24	宮田 勝功 新田 洋	奈良時代の住居跡など検出		
7	天保(天保B)遺跡A・B区	嬉野町鳥田		7,200	62. 5. 7 ~ 9. 4	田村 陽一	平安時代の竪穴住居など検出		
8	天保(-志西部)遺跡C区	嬉野町鳥田		5,000	62. 5. 18 ~ 6.30	増田 安生	奈良~平安時代の竪穴住居など検出		
9	天保(天保館跡)遺跡D区	嬉野町鳥田		3,800	62. 7. 1 ~ 8.12	増田 安生	〃		
10	天保古墳群 (含、天保遺跡E区)	嬉野町鳥田		5,390	62. 8. 5 ~ 63. 7. 12	田村 陽一 野田 修久	6世紀中ごろの横穴式石室墳など		
11	堀之内遺跡	嬉野町堀之内	A区	14,250	62. 2. 23 ~ 3.13 62. 5. 6 ~ 7.16 62. 7. 23 ~ 10. 1 62. 9. 1 ~ 63. 3. 19 62.10.25 ~ 11.20 63. 5. 18 ~ 8.13 62. 5. 20. 6. 29 ~ 7. 22	新田 洋	(側道部分の調査)		
			〃			2,200	河北 秀実	古墳~平安時代の住居跡など検出	
			〃			2,200	河北 秀実	古墳~平安時代の溝など検出	
			C区			嬉野町薬王寺	5,400	増田 安生	弥生後期竪穴住居、平安の掘立柱建物など検出
			D区			〃	700	木許 守	古式土師器出土、ヤナ状遺構検出
			C区下層			〃	1,900	田村 陽一	縄文中・後・晩期の土器多数出土
12	中尾遺跡	嬉野町薬王寺	93	600	62. 3. 4	河北 秀実	(試掘)		
13	東峽遺跡 (ビハノ谷古墳群)	嬉野町薬王寺・下之庄	1,000	3,000	62. 3. 2 ~ 3.30 62. 5. 19 ~ 8.12	野原 宏司	(山林伐開、表土掘削)		
			12,000			野田 修久 木許 守	弥生土器出土		
14	女牛谷古墳群	松阪市小野町 嬉野町薬王寺・下之庄	4,031	7,171	61.12.15 ~ 62. 2.21 62. 5. 7 ~ 7.11	野原 宏司	(山林伐開、第1次調査)		
			3,140			木許 守 野田 修久 山下 雅春	後期の古墳群		
15	平田遺跡	松阪市小野町		228	61. 2. 18 ~ 2.24	田村 陽一	遺構なし、遺物微量(試掘)		
16	山見(下山見)遺跡	松阪市小阿坂町		224	60.11.12 ~ 11.20	野原 宏司	遺構なし、遺物微量(試掘)		
17	新田遺跡	松阪市小阿坂町	288	4,688	60.11.15 ~ 11.25 60.12.27 ~ 61.3. 25	野原 宏司	(試掘)		
			4,400			野原 宏司	縄文後期土器出土		
18	垣内田古墳群 (垣内田遺跡)	松阪市岩内町	428	6,528	60.11.26 ~ 12.12 60.12.27 ~ 61. 3. 25 61. 6. 30 ~ 7. 30	野原 宏司	(試掘)		
			5,500			吉水 康夫	横穴式石室墳を主体とする古墳群		
			600			野田 修久			
19	藪ノ下(岡崎古墳群)遺跡	松阪市岩内町	1,100	2,500	61. 3. 1 ~ 3.25 61. 6. 30 ~ 10. 3	田村 陽一	(試掘)		
			1,400			田村 陽一	良好な資料となる縄文後期土器多数出土		
20	榎長遺跡	松阪市伊勢寺町	304	2,708	60.10.18 ~ 10.24 60.11.26 ~ 61. 3. 18	田村 陽一	(試掘)		
			2,404			河北 秀実	奈良時代の竪穴住居検出		

第2表 発掘調査遺跡一覧(太ゴチックは本書所収遺跡)

番号	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)		調査期間 (元号は昭和)	担当者	概要
21	平林古墳群	松阪市伊勢寺町		計 4,021	61. 6. 9～10. 3	新田 洋 河北 秀実	石室を主体とする古墳群
22	横尾(西野)墳墓群	松阪市伊勢寺町、岡山町	5,500	8,000	60. 7. 1～61. 2. 27 61. 5. 31～12. 5	田阪 仁 宮田 勝功 田中喜久雄 宮田 勝功	500基におよぶ中世墓群 後期小型円墳(横穴式石室) 2基 後期小型方墳(木棺) 2基
23	さんざい林遺跡	松阪市西野町		176	60.10.25～10.26	田村 陽一	(試掘)
24	坂東(大河内5号)古墳	松阪市笹川町		180	61. 7. 23～ 8.19	野田 修久	中世土器片微量。古墳にあらず (試掘)
25	大河内城堀切	松阪市大河内町		600	62. 1. 5～ 2. 25	宮田 勝功	中世北畠氏の平山城大河内城の 堀切
26	上ノ広(森下池西方)遺跡	松阪市広瀬町	224	1,360	60. 3. 22～60. 3. 31 60. 7. 1～60.10.14	上村 安生 田阪 仁 宮田 勝功 田村 陽一 野原 宏司	(試掘) 先土器末～縄文時代の石器多数 出土
27	大原掘(大原掘南方)遺跡	松阪市広瀬町		114	60.10.28～60.10.31	田村 陽一	遺構、遺物微量 (試掘)
28	花ノ木(山崎)遺跡	多気町牧	52	5,852	59.12.10 60. 1. 28～60. 3. 26	田村 陽一 杉谷 政樹 田阪 仁 杉谷 政樹	(試掘) 弥生時代中期堅穴住居、方 形周溝墓など検出
29	浅間山遺跡	多気町牧	44	1,044	59.12.10 60. 1. 28～60. 2. 23	高見 宜雄 田村 陽一 田阪 仁	(試掘) 土師器細片、天目茶碗片出土
30	浅間山南遺跡	多気町牧		470	60. 3. 25～60. 3. 31	河瀬 信幸 田村 陽一	遺構なし。遺物微量(弥生前 期土器) (試掘)
31	牧瓦窯群 1・2・3号窯 4・5・6・8号窯 7号窯	多気町牧 多気町牧・楸形 多気町楸形	960 1,160 200		60. 7. 1～60.10.31 60.11.30～ 3. 25 61. 6. 9～61. 8. 15	田中喜久雄 河北 秀実 田中喜久雄 野原 宏司	奈良時代の瓦専用窯 1号……………平窯 2～8号……………登窯
32	釈尊寺(中牧)遺跡	多気町楸形	144	1,144	60.11. 1～60.11.12 60.12. 5～61. 2. 28	田村 陽一 田村 陽一	(試掘) 掘立柱建物検出、中世土器出土
33	下村A遺跡	勢和村丹生	88	7,588	59.12. 6～12. 8 60. 1. 28～ 3. 28	増田 安生 杉谷 政樹 吉水 康夫 河瀬 信幸 上村 安生	(試掘) 石鏃・石匙・山茶碗・瓦器片等 出土
34	下村B遺跡	勢和村丹生		44	59.12. 8～12. 9	増田 安生 杉谷 政樹	遺構・遺物なし (試掘)
35	寄谷遺跡 (養徳寺跡)	松阪市矢津町	740	5,440	61. 2. 27～ 3. 25 61. 8. 20～62. 3. 18	田阪 仁 野原 宏司 野田 修久	(試掘) 五輪塔など出土。寺(養徳寺)跡 の伝承に裏づけ。
36	楸形(牧)中世墓群	多気町楸形		520	61. 7. 1～ 9. 6	野原 宏司	石組の中世墓 13基検出
37	天神山古墳群	松阪市伊勢寺町、岩内町		1,750	61. 9. 20～11. 4	新田 洋	横穴式石室墳主体の古墳群
38	楯垣外遺跡	松阪市矢津町		1,676	61.9.1～10.18	野原 宏司 野田 修久	鎌倉時代の掘立柱建物など検出
39	戸木(久保屋敷)遺跡	久居市戸木町		12,000	61. 9. 1～63. 3. 31	山下 雅春 田中喜久雄	中世後半掘立柱建物、井戸、 土塁状遺構など検出
40	ビハノ谷遺跡	嬉野町薬王寺		1,600	63. 4. 11～ 5. 11	小坂 宜広	古墳時代堅穴住居、鎌倉時代 掘立柱建物検出
41	西野遺跡 北広遺跡	嬉野町天花寺 嬉野町天花寺		2,473	63. 7. 12～ 8. 3	野田 修久	古式土師器片出土 (試掘) サスカイト製尖頭器片出土 (試掘)

※調査総面積は151,715㎡、ただし本調査面積に試掘面積が重複する遺跡あり。



第2図 本書所収遺跡位置図(1:25,000)

Ⅱ. 位置と歴史的環境

1. 位置と地形

近鉄中川駅の西約2kmにある天花寺丘陵には西野7号墳が所在し、その標高は40m前後である。天花寺丘陵からはいくつかの小河川が流れ出しており、谷地形と尾根が複雑に入り組んでいる。谷筋にはシルト・砂の互層がみられ、小河川による開析が進み複雑な地形となっている。駒返川もこうした小河川のひとつであり、丘陵の南側を東流する。この駒返川の旧流水路を臨む標高19m前後の低位段丘に焼野遺跡が位置する。その南方には、標高20m～30mで中村川の中位段丘面にあたる島田台地が東方にのび、台地上には天保遺跡・天保古墳群が所在する。

さて、中村川は、矢頭山に源を發しV字谷を刻み

ながら北東方向に流れ、近鉄中川駅の北約1kmのところで雲出川に合流する。この川は、上・中流に河岸段丘を形成し、前述の丘陵の裾から雲出川の合流点まで沖積平野を形成する。堀之内遺跡は、中村川右岸の沖積地に立地し、標高16～17mである。

中村川の南約1kmには、標高50～60mの東西にのびる丘陵があり、松阪市小野町と嬉野町大字薬王寺・下之庄の境界となっている。この丘陵とそこから北に派生する2本の尾根一帯が東挾遺跡と女牛谷古墳群である。2本の尾根のうち東側の尾根の先端部には中尾遺跡が、西側の尾根の先端部近くにはビハノ谷遺跡が立地する。

2. 周辺遺跡の概況

嬉野町西南部の当地域は、各時代にわたり稠密な遺跡の存在が確認されている。以下に調査遺跡も含めて時代別に周辺の遺跡を概説する^①。

(1) 先土器時代

先土器時代ではナイフ型石器が採集された中尾遺跡^②(1)、天保遺跡^③(2)がある。

(2) 縄文時代

縄文時代早期では落とし穴遺構6基を検出した馬ノ瀬遺跡^④(3)や、押型文土器が出土した午前坊遺跡^⑤(4)、釜生田遺跡^⑥(5)、井之廣遺跡^⑦(6)、東野B遺跡^⑧(7)があり、この時期の遺跡は山麓、丘陵に多くみられる。

前期では北白川下層Ⅱ式に属する半載竹管文土器が表面採集された井之上遺跡^⑨(8)がある。

中期では里木Ⅱ式併行期の土器が多数出土した針箱遺跡^⑩(9)、五領ガ台式～勝坂式併行期の土器が出土した中尾遺跡がある。

後期前葉では中津式併行期の土器が出土した午前坊遺跡、焼野遺跡^⑪(10)、井之廣遺跡がある。後期

後葉では、宮滝式併行期の土器が採集された天白遺跡^⑫(11)がある。

晩期では中村川左岸の河岸段丘上の蛇亀橋遺跡(12)、天保遺跡があり、蛇亀橋遺跡では、竪穴住居と甕棺墓^⑬が、天保遺跡では甕棺墓が検出されている。また、釜生田遺跡では竪穴住居が検出されている。下之庄東方遺跡(13)においても石刀、突帯文土器が出土している。

(3) 弥生時代

弥生時代前期では上野垣内遺跡^⑭(14)、庵之門遺跡(15)がある。また下之庄東方遺跡では夜之掘地区で弥生時代前期の溝が検出されており、出土遺物には前期中段階の壺がある。

中期では方形周溝墓19基が検出された下之庄東方遺跡がある。中村川中流右岸の河岸段丘上にある午前坊遺跡では竪穴住居8棟が検出され、石剣、磨製石斧、瓢壺等が出土した。他に上野垣内遺跡、庵之門遺跡、清水川北遺跡(16)、荒野遺跡(17)等がある。

後期では下之庄東方遺跡の小野地区・四反畑地区で方形周溝墓4基、東峽遺跡(18)では2基の方形台状墓が検出されている。他に荒野遺跡、一色垣内遺跡(19)等がある。

(4) 古墳時代

古墳時代前期には上野墳墓群(20)がみられ、これらに続いて同じ丘陵の突端に前方後方墳である向山古墳(21)が築造される。他に前方後方墳には筒野1号墳(22)、鎗山古墳(23)、西山1号墳(24)、庵之門1号墳(25)があり、三重県下でも嬉野町は前方後方墳の集中する地域になっている。下之庄東方遺跡の高畑地区溝7からS字状口縁台付甕、柳坪形壺、元屋敷期の土師器が各種出土している。他に庵之門遺跡、川北清水遺跡がある。

古墳時代後期には嬉野町西部の丘陵上には多数の古墳が築造される。

中村川水系では、滝之川古墳群(26)、釜生田古墳群(27)、天保古墳群(28)、午前坊遺跡1～4号墳がある。その中で、釜生田5号墳、天保1号墳は、6世紀前半の横穴式石室墳である。午前坊遺跡1～4号墳は6世紀末葉～7世紀初頭に位置づけられる。天保古墳群3・6号墳も6世紀末葉～7世紀初頭のものとしてされている。中村川水系における住居跡として確認されている遺跡は、上野垣内遺跡、天保遺跡、下之庄東方遺跡等がある。

天花寺丘陵では西野古墳群(29)、片野池古墳群(30)、馬之瀬古墳群(31)、赤坂古墳群(32)、小谷古墳群(33)がある。西野27号墳は径22mの円墳で、主体部の木棺痕跡の底面から勾玉・鉄製刀子が出土しており、5世紀中頃～後半の造営とされている。西野5号墳は径20mの円墳で、主体部は横穴式石室で奥壁付近から天冠、馬具等が出土しており、6世紀中頃の造営とされている。また清水谷遺跡(34)からも古墳の周溝が検出されており、円筒埴輪が出土している。これらの古墳群は、北を意識する西野古墳群、片野池古墳群と、東を意識する馬之瀬古墳群、赤坂古墳群、小谷古墳群、清水谷古墳群に分けられ、群構成についての詳細な検討が待たれる。

(5) 飛鳥・奈良時代

飛鳥・奈良時代では生産遺跡としては、鴟尾を2個体出土した辻垣内瓦窯跡群(35)や天花寺瓦窯跡

(36)等がある。発掘調査された寺院跡には天花寺廃寺(37)、上野廃寺(38)がある。天花寺廃寺は、法起寺式の伽藍配置が確認されており、藤原宮式の瓦や埴輪が出土している。上野廃寺は大谷川河川改修に伴い発掘調査され、土壇状遺溝、溝、掘立柱建物等が検出されており、白鳳時代から奈良時代の瓦が出土している。未調査の寺院跡には中谷遺跡(廃寺)(39)、一志廃寺(40)、嬉野廃寺(41)等がある。集落遺跡としては東野B遺跡、平生遺跡(42)、焼野遺跡、中尾遺跡、堀之内遺跡(43)、下之庄遺跡(44)、下之庄東方遺跡、堀田遺跡(45)、天保遺跡、上野垣内遺跡等があげられる。当地域には一志郡家があり、宮古あるいは一志がその推定地である。また嬉野町を中心とする雲出川下流域には条里制が施行されており、現在も条里地名が残っている。この時代の当地域は律令制度下に整備された伊勢神宮・齋宮と都との住還の要路伊勢街道が通り、上記のような寺院造営を成し得る経済基盤が成立したといえよう。

(6) 平安時代

平安時代も前代に引き続き寺院の勢力は継続する。例えば天花寺廃寺の講堂と思われる建物からは、ロクロ土師器が多数出土しており、寺の廃絶は平安時代末から鎌倉時代前半と考えられている。発掘調査された遺跡の多くは集落跡である。平生遺跡では後期～末期の掘立柱建物、柵列、溝等が検出され灰釉陶器・緑釉陶器等が出土している。下之庄遺跡では掘立柱建物、長方形土坑が検出され黒色土器・土師器等が出土している。下之庄東方遺跡では初期の掘立柱建物、柵列が検出され、緑釉陶器・黒色土器等が出土している。御殿山・上野遺跡(46)では初期の掘立柱建物、溝、土坑等が検出されている。上野垣内遺跡では掘立柱建物、溝等が検出され、灰釉陶器・土師器等が出土している。午前坊遺跡では末期の掘立柱建物等が検出され、土師器、山茶碗等が出土している。東野遺跡(47)では末期の遺溝が検出され、山茶碗、土師器等が出土している。

(7) 鎌倉時代

鎌倉時代には平安時代後・末期の遺跡がそのまま継続するものが多い。井戸、土坑等が検出、山茶碗、土師器が出土した平生遺跡、掘立柱建物、土坑等が

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	中尾遺跡	2	天保遺跡	3	馬ノ瀬遺跡	4	午前坊遺跡	5	釜生田遺跡
6	井之廣遺跡	7	東野B遺跡	8	井之上遺跡	9	針箱遺跡	10	焼野遺跡
11	天白遺跡	12	蛇亀橋遺跡	13	下之庄東方遺跡	14	上野垣内遺跡	15	庵之門遺跡
16	清水川北遺跡	17	荒野遺跡	18	東峽遺跡	19	一色垣内遺跡	20	上野墳墓群
21	向山古墳	22	筒野1号墳	23	鑄山古墳	24	西山1号墳	25	庵之門1号墳
26	滝之川古墳群	27	釜生田古墳群	28	天保古墳群	29	西野古墳群	30	片野池古墳群
31	馬之瀬古墳群	32	赤坂古墳群	33	小谷古墳群	34	清水谷遺跡	35	辻垣内瓦窯跡群
36	天花寺瓦窯跡	37	天花寺廃寺	38	上野廃寺	39	中谷遺跡(廃寺)	40	一志廃寺
41	嬉野廃寺	42	平生遺跡	43	堀之内遺跡	44	下之庄遺跡	45	堀田遺跡
46	御殿場・上野遺跡	47	東野遺跡	48	天花寺城跡	49	釜生田城跡	50	八田城跡

第3表 周辺の遺跡一覧



第3図 遺跡分布図 (1 : 50,000)

検出され、山茶碗、山皿が出土した下之庄東方遺跡、掘立柱建物が検出され、山茶碗、土師器等が出土した午前坊遺跡、掘立柱建物等が検出され、山茶碗・土師器が出土した東野遺跡・東野B遺跡が該当する。

(8) 室町時代

当該期まで継続する遺跡には土坑を検出した午前坊遺跡、掘立柱建物、土坑を検出した東野遺跡・東

野B遺跡等がある。また詳細な時期は不明であるが中世城館には天花寺城跡^⑮、釜生田城跡(49)八田城跡(50)等がある。

(9) 江戸時代

江戸時代の発掘調査された遺跡には針箱遺跡があり井戸2基と石敷遺溝が検出され肥前産鉛釉皿等が出土している。

(増田 安生)

【註】

- ① 遺跡の概況については主として次の文献を参考にした『嬉野町遺跡地図』嬉野町教育委員会 1989
- ② a. 『嬉野町の遺跡』皇学館大学考古学研究会 1989
b. 本書掲載
- ③ a. 『近畿自動車道(久居～勢和間)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』三重県教育委員会 1988
b. 田村陽・「天保遺跡A・B地区」『近畿自動車道(久居～勢和)埋蔵文化財発掘調査報告 第3分冊6』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991
- ④ 『三重県埋蔵文化財年報18』三重県教育委員会 1988
- ⑤ 『三重県埋蔵文化財年報16』三重県教育委員会 1986
- ⑥ 『三重県埋蔵文化財年報19』三重県教育委員会 1989
- ⑦ 『三重県埋蔵文化財センター年報1.』三重県埋蔵文化財センター 1990
- ⑧ 註④に同じ
- ⑨ 註②a. に同じ
- ⑩ 『針箱遺跡・下之庄東方遺跡』嬉野町教育委員会・嬉野町遺跡調査会 1987
- ⑪ a. 註③a. に同じ
b. 新田洋「焼野遺跡」『近畿自動車道(久居～勢和)埋蔵文化財発掘調査報告 第3分冊4』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991
- ⑫ 註②a. に同じ
- ⑬ 新田洋「蛇亀橋遺跡」『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1982
- ⑭ a. 『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要Ⅰ 下之庄東方遺跡(高畑地区)』三重県教育委員会 1987
b. 『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要Ⅱ 下之庄東方遺跡(小野・四反畑・夜ノ掘地区)』三重県教育委員会 1988
- ⑮ 田中喜久雄「上野垣内遺跡」『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1980
- ⑯ 本書掲載
- ⑰ 前川嘉宏・野田修久「天保古墳群」『近畿自動車道(久居～勢和)埋蔵文化財発掘調査報告 第3分冊3』、三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991
- ⑱ 註④に同じ
- ⑲ 『三重県埋蔵文化財年報17』三重県教育委員会 1987
- ⑳ 『三重県埋蔵文化財センター年報2.』三重県埋蔵文化財センター 1991
- ㉑ a. 辻富美雄「釜生田辻垣内瓦窯跡群発掘調査報告概報」嬉野町教育委員会 1985
b. 竹内英昭ほか「辻垣内瓦窯群」嬉野町教育委員会 1988
- ㉒ a. 小玉道明・山田猛「天華寺廃寺」『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1980
b. 山田猛「天華寺廃寺」『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1981
- ㉓ 和気清章「嬉野町埋蔵文化財調査概要 平成元年度」嬉野町教育委員会 1990
- ㉔ 吉村利男ほか「平生遺跡発掘調査報告」平生遺跡調査団 1976
- ㉕ 河北秀実「堀之内遺跡A地区」『近畿自動車道(久居～勢和)埋蔵文化財発掘調査報告 第3分冊2』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991
- ㉖ 『三重県埋蔵文化財年報8』三重県教育委員会 1978
- ㉗ 『三重県埋蔵文化財年報9』三重県教育委員会 1979
- ㉘ 註⑤に同じ
- ㉙ 註⑨に同じ
- ㉚ 註⑬に同じ

Ⅲ．一志郡嬉野町薬王寺 ^{たに}ビハノ谷遺跡

1. はじめに

通称「白米城」の名で親しまれている阿坂城跡の北東約2kmに東西にのびる丘陵がある。これは一志郡嬉野町と松阪市との境をなす丘陵で、ビハノ谷遺跡はこの丘陵から北へ派生する支脈の一つの突端部に位置しており、行政区画は一志郡嬉野町薬王寺字ビハノ谷に属する。この支脈と谷をはさんですぐ東隣の支脈は、嬉野町薬王寺と下之庄との字界となっている。また、これらの支脈の北には、中村川

によって形成された沖積平野が広がっている。当遺跡周辺は、極めて密に各時代の遺跡が集中する地域である。

1988（昭和63）年3月23日～31日にかけて第1次調査を行ったところ、ピット等の遺構が検出され、山茶碗、土師器等の遺物が多数出土した。この調査結果に基づき、1600㎡について第2次調査を実施することとなった。調査区域は標高35m前後の東向き



第4図 遺跡地形図（1：5000）

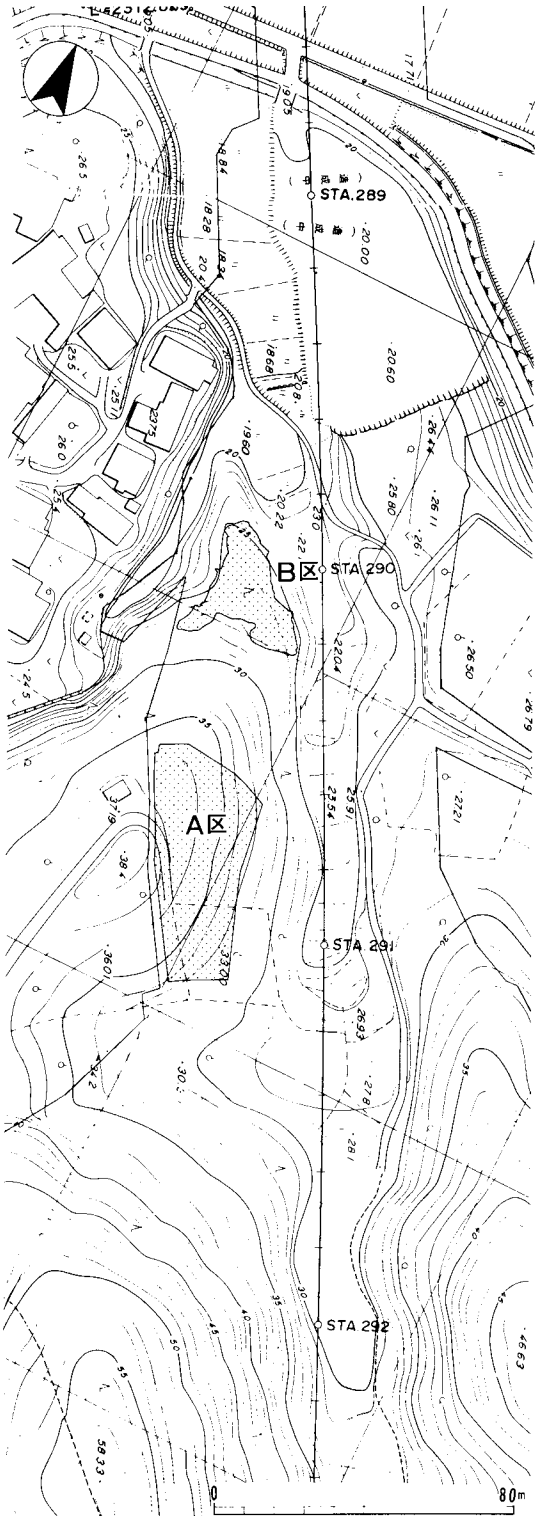
の緩斜面（約1000㎡）とその北の標高25m前後の北向きの緩斜面（約600㎡）の2か所に分かれ、前者をA区、後者をB区と呼ぶこととした。第2次調査は1988年4月11日に開始し、5月31日に終了した。

調査に際しての4m方眼の地区割りについては、原則に従って東西方向にアルファベット（西から東

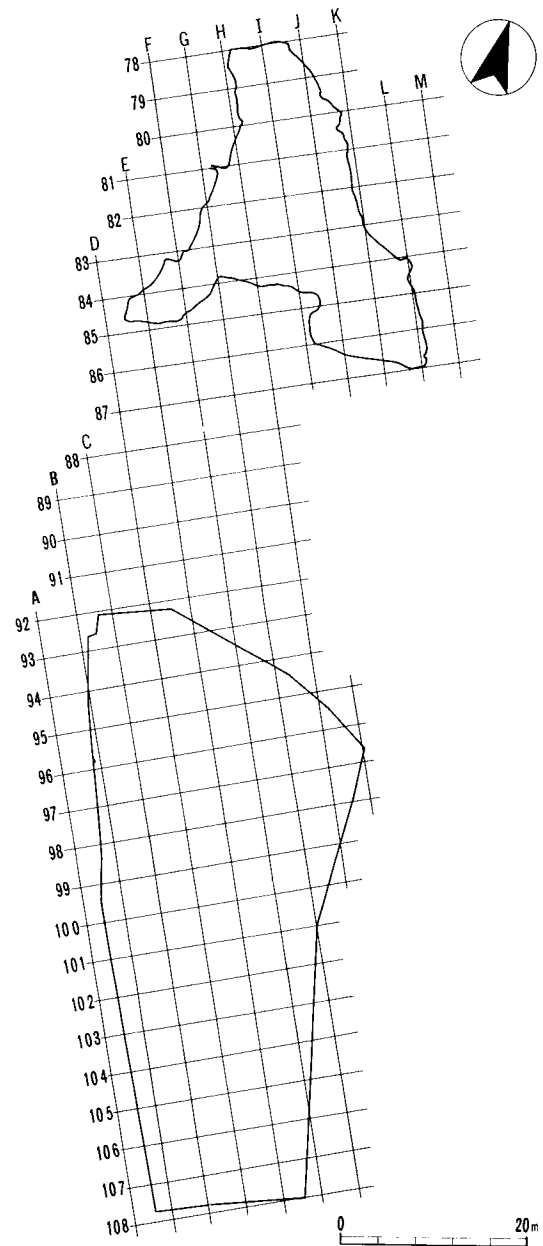
へA, B・・・）、南北方向に数字（北から南へ1, 2・・・）を与え、各グリッドの北西隅の名称をそのグリッド名とした。地区割りの基準にはSTA291+00とSTA290+80の2本の西側幅杭を用い、両者を結んだ線を基準線とした。また、STA290+80の幅杭をA100とし、グリッド命名の基準とした。

2. 遺 構

先に記したように、当遺跡の調査区はA・B2区に分かれている。A区は遺構密度が薄く、古墳時代の竪穴住居2棟の他、溝2条、土坑1基、若干のピツ



第5図 調査区位置図（1：2000）



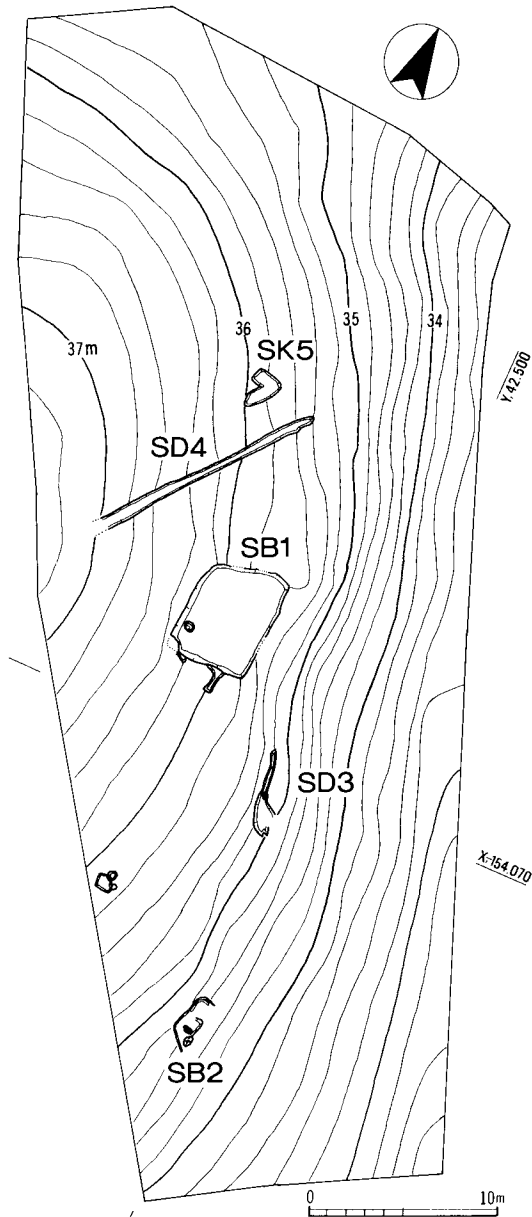
第6図 調査区地区割図（1：800）

トを検出しただけである。一方、B区では掘立柱建物3棟、溝2条、土坑9基、及び多数のピットを検出した。これらの多くは鎌倉時代の前半に属するものと考えられる。

このように、A区とB区では遺構の属する時代が異なるので、以下、区毎に個別の遺構について触れていきたい。なお、両区ともに表土から10cm程で遺構検出面であり、遺物包含層は薄いものであった。

(1) A区

SB1 A区の中央部で検出された竪穴住居跡である。長辺約5.5m×短辺約4.5mのほぼ長方形を呈するが、西側の長辺はやや短い(約5.2m)。長辺の方向はN17°Wであり、等高線の走る方向に概ね沿っ



第7図 A区遺構平面図 (1:400)

ているように思われる。遺構検出面からの深さは最大50m程度で、西側即ち丘陵の頂部側ほど深く残っている。床面は平坦であるが、西端と東端の標高差が30cmほどあり、若干の傾斜が認められる。支柱穴は南西隅近くに痕跡らしいものを1つ検出しただけである。これは直径16cmほどで、やや楕円形気味であり、床面から10cm程度掘り下げた掘形(長径60cm、短径45cmの楕円形)の南西端にあって、床面からの深さは24cmである。焼土は、北辺中央部と北東隅近くの床面に見られた。この住居は、ミカンの木を植えるために最近掘られた9つの穴によって攪乱を受けており、確認し得た事柄は以上である。遺物は、古墳時代後期の土師器と須恵器が多量に出土し、他に、縄文土器が若干混じっている。

SB2 A区の南端付近で検出された竪穴住居跡である。北西辺(約2.2m)とその両端のコーナーを検出したのみで、掘形も最深部でも30cmに達せず、住居の大部分は流失したものである。2つのコーナー付近では排水のための溝らしきものが検出され、また、検出部分と流失部分の境目の中央付近には焼土らしきものが認められた。床面には他にピットや窪みが見られるが、竪穴住居に伴うものかどうかは不明である。北西辺の方向は等高線の走る方向にほぼ沿っているようである。遺物は、古墳時代後期の土師器、須恵器が少量出土しただけである。

SD3 上記の2棟の竪穴住居の間、ややSB1寄りをはほぼ南北に走る溝である。溝の方向は等高線の方向に合っているようである。検出したのは5m弱で、検出面での幅は30cm、深さは西(丘陵頂部)側では10~30cmであるが、東側は数cmと浅い。南2mほどは幅が広がっており、あるいは屈曲して東へ続いていたのかもしれない。遺物は、古墳時代後期の土師器、須恵器が出土している。

SD4 SB1の北約5mの位置にある南西から北東へ流れる溝である。検出したのは約13m分で、幅は40~70cm、検出面からの深さは15~30cmである。出土遺物はない。

SK5 SB1の北約9mにある土坑である。最近のミカン穴に切られているために全体は残っていなかったが、本来の平面形は長径2.2m、短径0.8mほどの楕円形であったと思われる。深さは検出面から

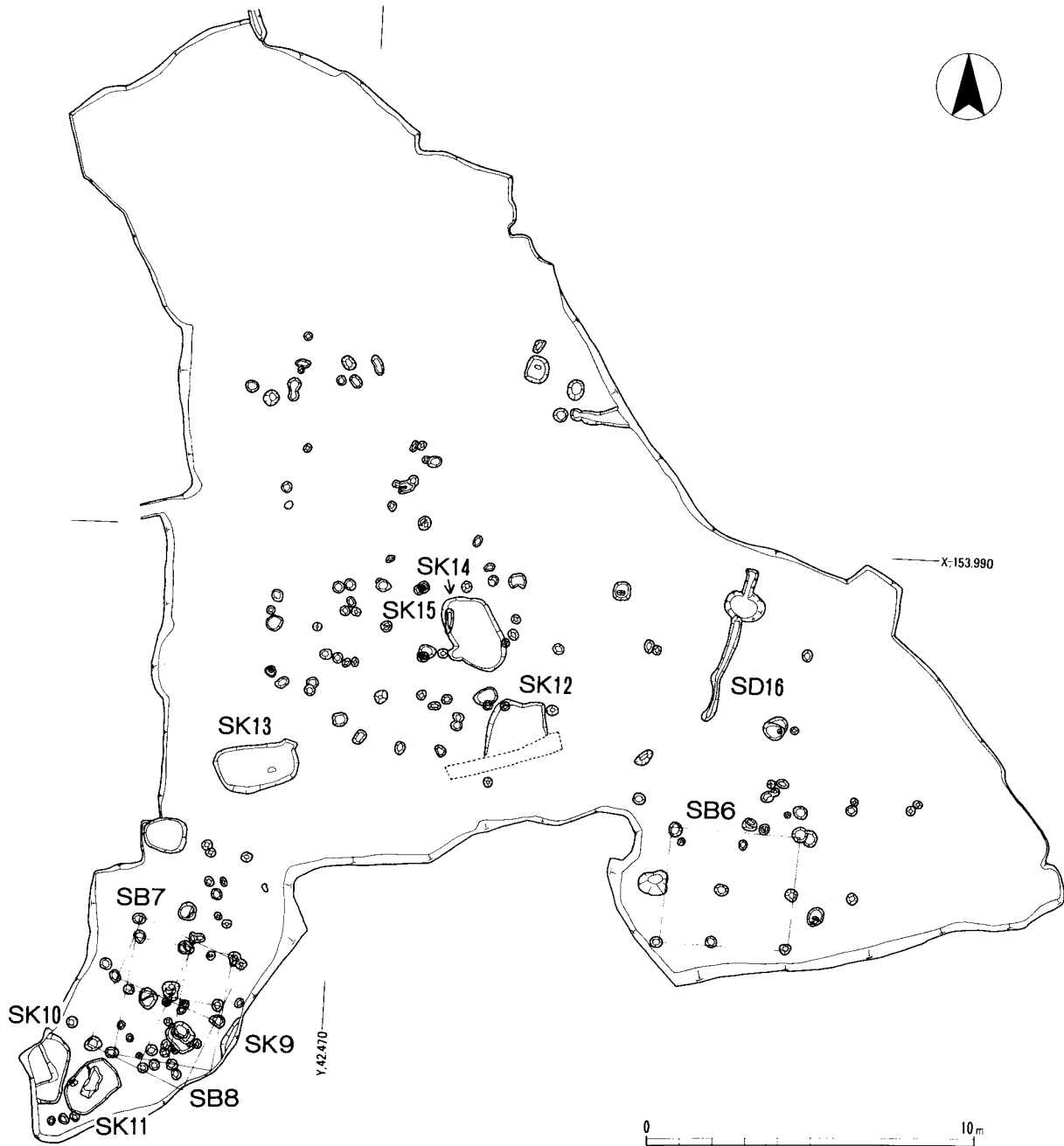
数cmと浅い。出土遺物はない。

(2) B区

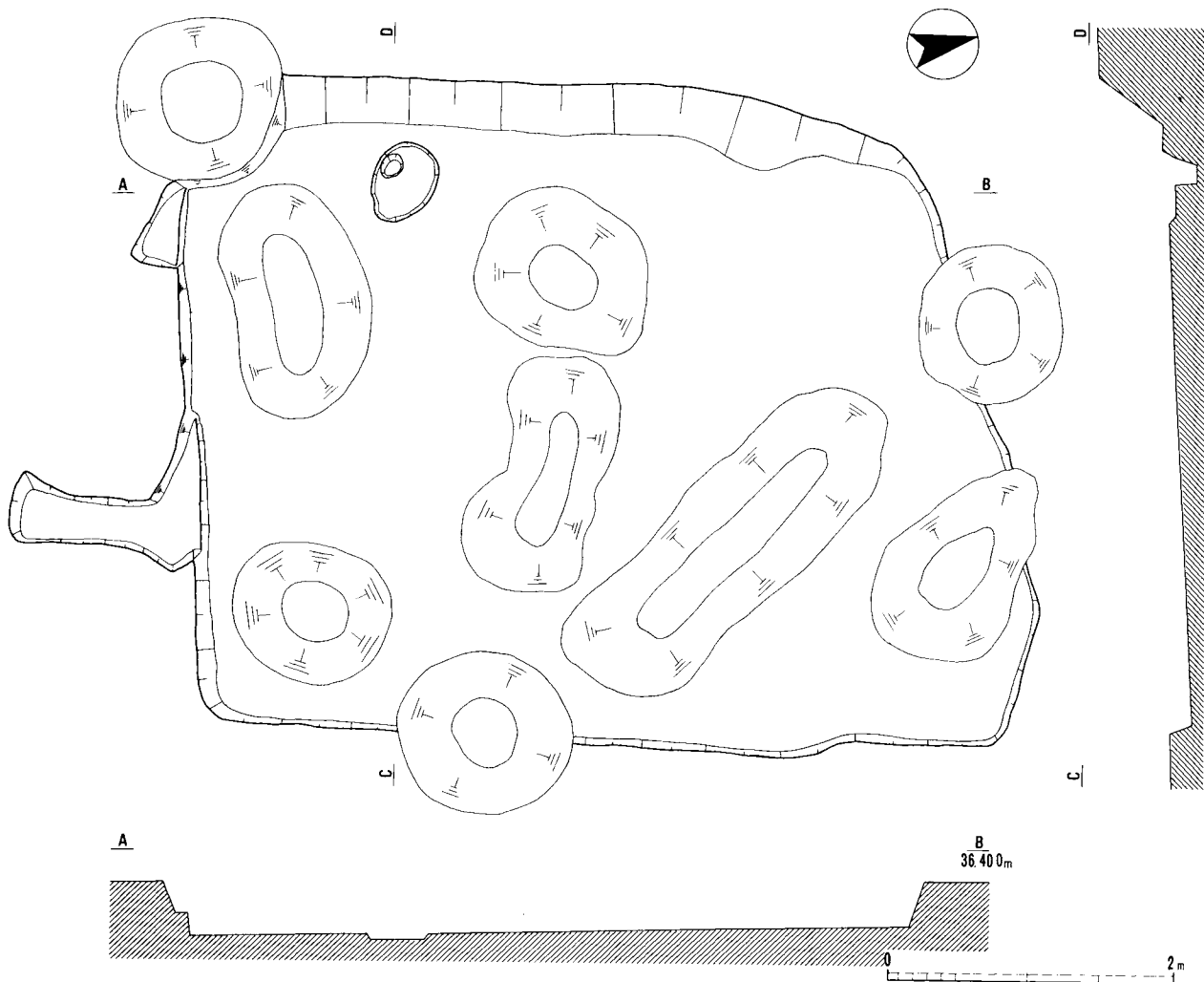
SB6 B区南東隅近くにある2間×2間の掘立柱建物である。柱掘形は直径約30~45cmのほぼ円形で、検出面からの深さは約10~40cmである。根石を伴う柱穴はない。棟方向はE3°Sである。桁行は3.9mで、その柱間は、1.6~2.3mとばらつきが大きい。梁行は3.5mで、柱間は1.6~1.9mである。遺物には鎌倉時代前半の山茶碗や土師器がある。

SB7 B区の南西隅にある2間×2間の掘立柱建物である。柱掘形は直径約30~50cmのほぼ円形で、

検出面からの深さは約10~40cmである。棟方向はN23°Eである。桁行は4.0mで、その柱間は1.8~2.2m、梁行は3.4mで、その柱間は1.7mの等間である。北側の中央及び東端の柱穴と南西隅の柱穴では埋土に炭が混じっていた。また、北西隅・北側中央・東側中央の柱穴には根石がみられた。根石は10~25cm大で、10cm内外の厚みを持っている。出土遺物は土師器片と山茶碗片が若干である。なお、SB7付近には他にもピットが比較的集中し、根石を持つものも少なくないので、建て替えが行われた可能性が高い。



第8図 B区遺構実測図 (1:200)



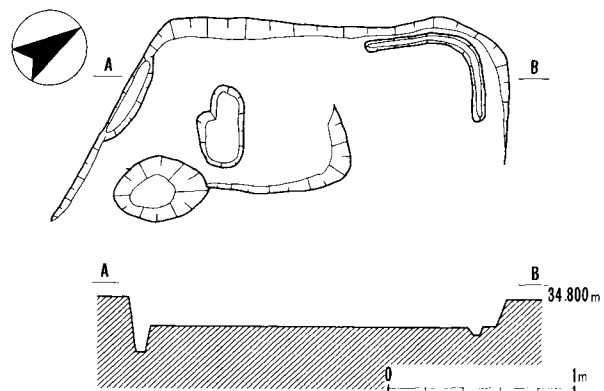
第9図 SB1実測図(1:50)

SB8 SB7とほぼ同位置にある2間×2間の掘立柱建物である。柱掘形は直径約25~40cmのほぼ円形で、検出面からの深さは約10~40cmである。棟方向はN12°Eで、SB7より11°北に振れている。桁行は3.6mで、その柱間は1.7m+1.9m、梁行は3.1mで、その柱間は1.6m+1.5mである。埋土は茶褐色ないし灰褐色の粘質土で、北辺中央の柱穴の埋土には灰が混じっていた。また、北西隅の柱穴には20cm大の根石がみられた。北辺中央の柱穴は直径45cmほどのピットの東半をさらに掘り下げたものであるが、このピットの西半のテラスに15cm大の石がみられた。これも根石であろうか。出土遺物には、土師器片と山茶碗片がある。

SK9 SB7の東約0.6mの調査区壁際に位置する土坑である。南北1.3m、東西0.4mと細長い。東側は調査区外へ若干広がる可能性がある。検出面からの深さは約20cmで、埋土は茶褐色粘質土である。

青磁片と土師器片が出土している。

SK10 SB7の南西約1mの調査区壁際に位置する土坑である。南北2m×東西1m分を検出したが土坑の全体は検出できていない。南東隅に比べて北東隅は丸みを帯びているが、全体の平面形は長方形か正方形になるのではないと思われる。この土坑の中央には壁際から南東方向へ張り出すテラスがあ



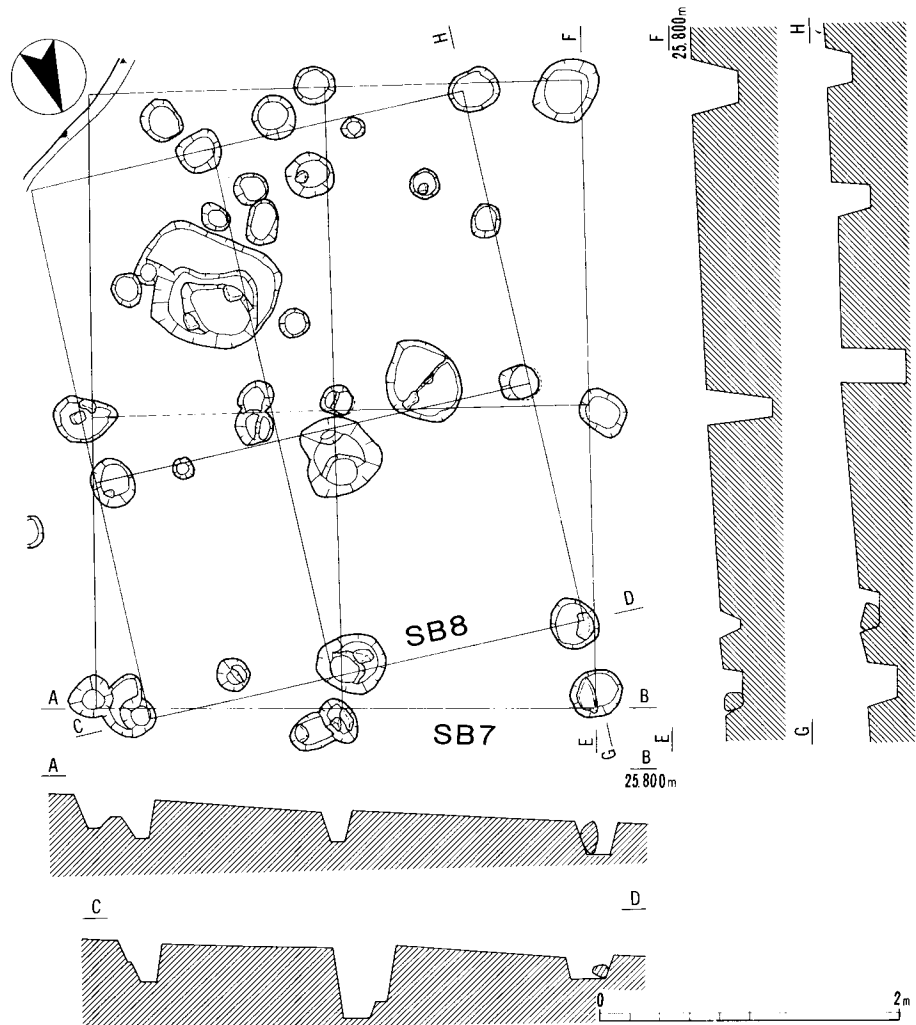
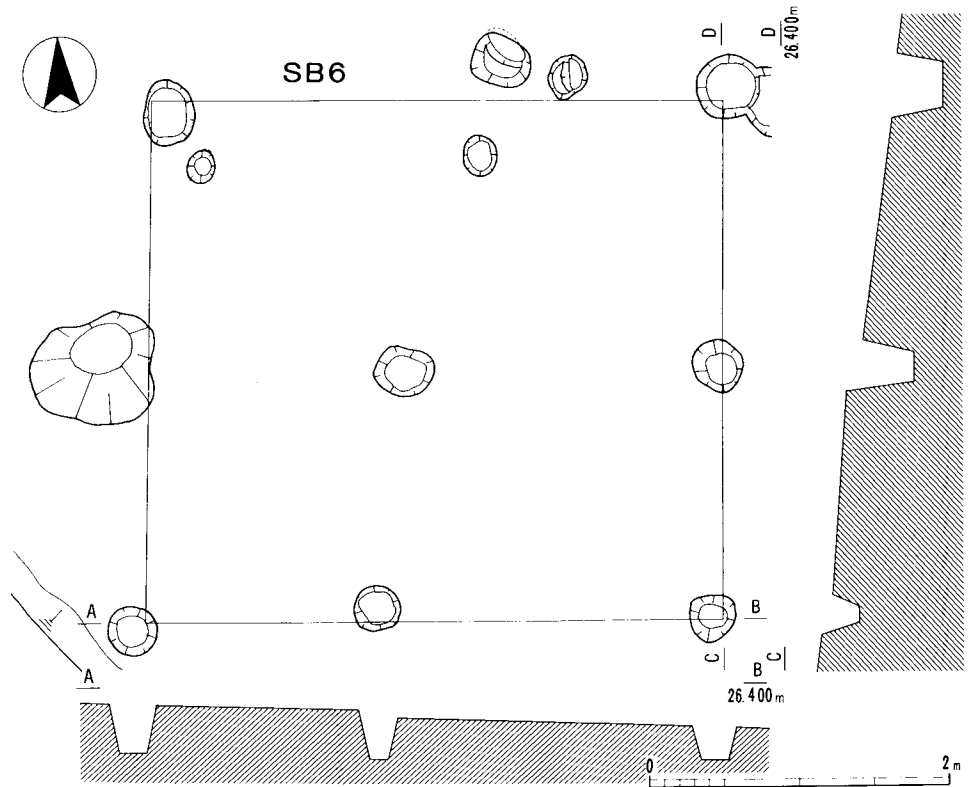
第10図 SB2実測図(1:40)

る。1m×0.5mのほぼ長方形で、南東隅へ向かって若干傾斜している。テラスの南側と東側の底面には大小の石が敷かれており、大きな石のいくつかの上端のレベルはテラスのそれとほぼ揃っているようである。検出面から底面までの深さは北半で約30cm、南半で約25cmである。埋土は茶褐色粘質土で炭が混じる。鎌倉時代前半の山茶碗、土師器片が比較的多数出土している。

S K 11 調査区の南西端に位置する土坑である。

南北1.8m、東西1.2mの楕円形状を呈する。検出面からの深さは約10cmで、中央部の南北0.9m×東西0.4m分がさらに15cmほど下がっている。北壁沿いと南壁近くの底面には計数個の石がみられた。また、西壁沿いの中央やや南寄りに直径約20cm、底面からの深さ約35cmのピットがある。このピットは西側へ向かって若干斜めに掘り込まれている。

S K 12 B区中央南寄りに位置する土坑である。北辺1.5m、西辺1.6m、東辺1mの台形状に検出されているが、南辺は試掘トレンチのため確認できなかった。試掘トレンチの幅が約50cmであるので、全体の平面形は1.6m×1.5mくらいの四辺形になるのではないか。検出面からの深さは約10cm、埋土は暗褐色粘質土

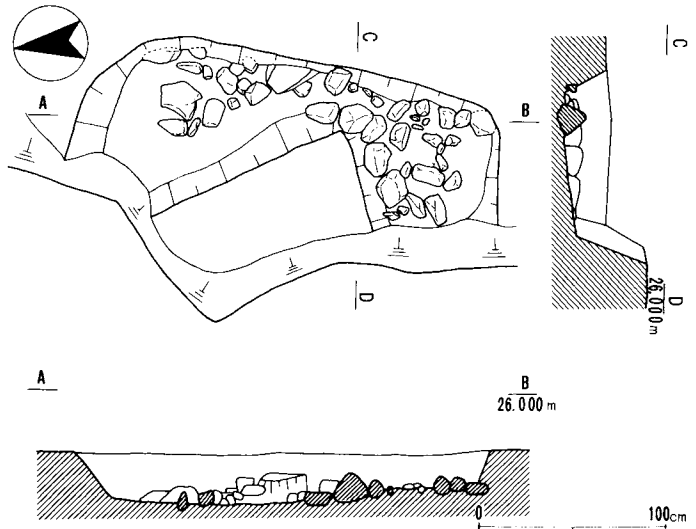


第11図 SB 6～8 実測図 (1 : 50)

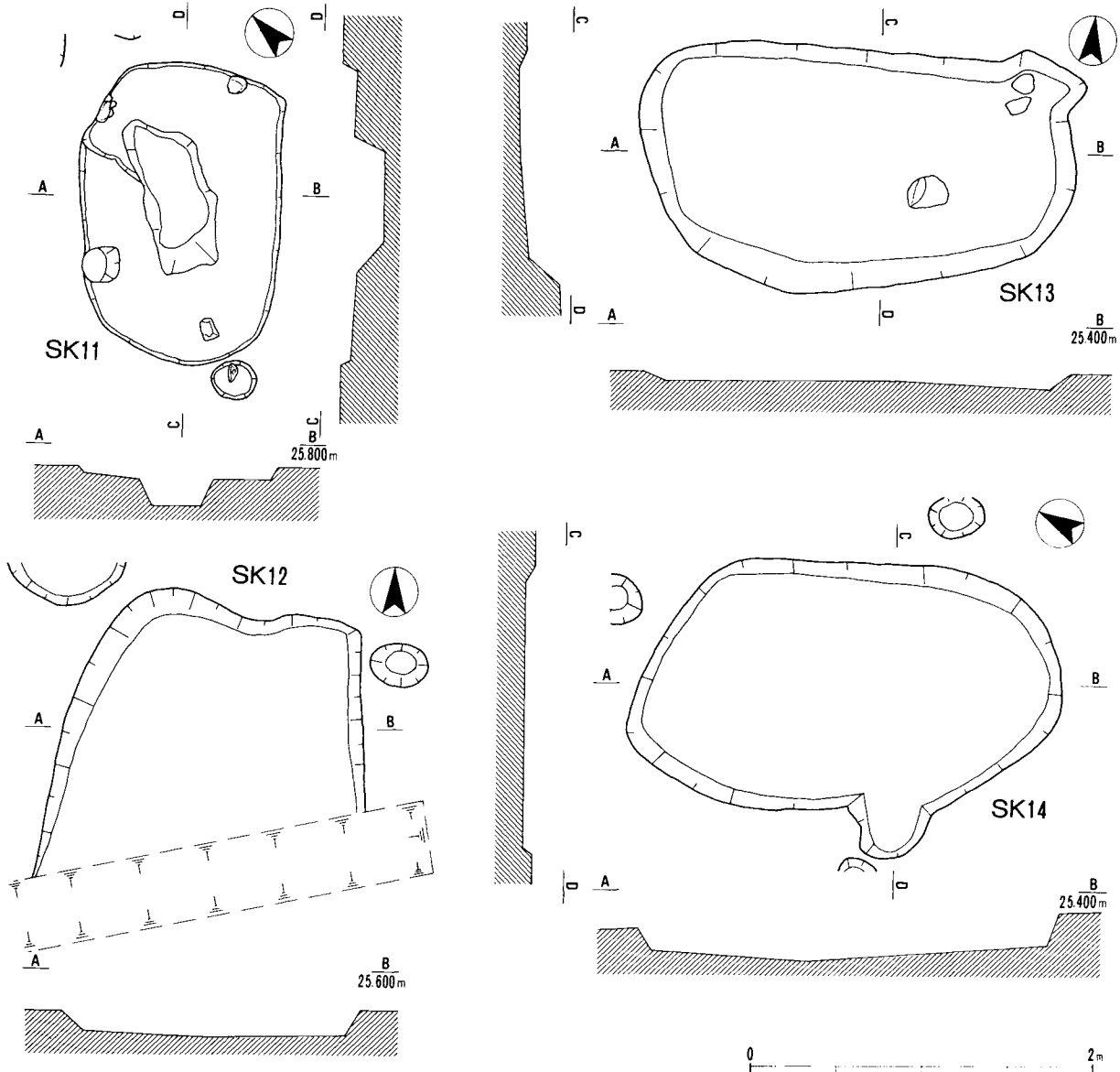
で炭が混じる。出土遺物には、鎌倉時代前半の山茶碗の他、青磁片、土師器片がある。

SK13 SB7・8の北約5mに位置する土坑である。長さ(東西)約2.6m、幅(南北)約1.4mで台形状を呈し、北東隅に小さな張り出しがある。検出面からの深さは5cm前後と浅く、中央やや南東寄りに25cm程の石が、また、張り出し部に15cm程の石が2個あった。埋土は暗褐色粘質土で、炭混じりであった。出土遺物には山茶碗片、土師器片のほか、縄文土器片が1点あった。

SK14 B区中央やや南寄りに位置する土坑である。長さ(南北)約3m、幅約1.4mで楕円形状を呈する。南東部でピットと切り合っており、切り合い関係からそのピットよりも新しい。検出面からの深さ



第12図 SK10実測図(1:40)



第13図 SK11~14実測図(1:40)

は15～20cm、埋土は暗褐色粘質土である。出土遺物には鎌倉時代前半の山茶碗、土師器片の他、縄文土器片、サヌカイトやチャート製の剝片（フレイク）がある。

S K 15 B区のほぼ中央、S K 14の北西隅直下数cmで検出された土坑である。底辺（東西）約20cm、長さ（南北）約80cmの、南を頂点とする細長い二等辺三角形を呈する。検出面からの深さは約10cm、埋土は暗褐色粘質土で炭混じりである。北東隅には10

cm大の石がみられた。出土遺物はサヌカイトのフレイクが1点のみである。

S D 16 S B 6の北約4mに位置する溝である。幅20～30cm、長さ4.6mである（途中0.9m分は松の木による攪乱を受けている）。検出面からの深さは約30cmである。溝の方向はN19° Eであり、S B 7の棟方向に近似している。埋土は暗褐色粘質土、出土遺物には土師器片、サヌカイトやチャート製のフレイク等がある。

3. 遺物

遺物は整理箱に約25箱分出土した。A区では、古墳時代の土師器、須恵器がほとんどで、他に室町時代と考えられる常滑陶器も出土している。B区では、日用雑器である山茶碗、山皿、土師器が主で、これらは鎌倉時代前半のものである。他に縄文土器、石鏃、須恵器、青磁が出土している。以下、個々について触れたい。

(1) A 区

1. 古墳時代の遺物

土師器甕（1～5）（1）と（5）はS B 1、他は包含層からの出土である。いずれも残存度は口縁部付近の1/5未満であり、表面の磨耗が進んでいる。推定口径は（2）と（4）が14cm弱で、（1）は17.2cm、（3）は25.8cmである。口縁部は「く」の字形に外反し、（1）以外は端部が上方に若干つまみ上げられ気味である。調整は磨耗のために不明なものもあるが、口縁部内外面は横ナデが施されているようである。（1）は口縁端部内面に横ナデの後、縦方向のナデが認められる。体部の調整がわかるのは（3）のみで、内外面ともナデである。ただし、内面は板状工具が使用されている。胎土は（1）と（3）で1～3mm程度の砂粒が混じるが、他は緻密である。焼成は断面に焼成不十分の箇所が見られる（3）を除くと概ね良好である。色調は浅黄橙ないし橙色である。

須恵器杯身（8～10）いずれもS B 1から出土した。（8）は約2/3が残存するが、他は口縁部付近のみの破片である。いずれも口縁部の立ち上がりは短かく、内傾しており、（8）は端部が直立す

る。（8）は口径が10.1cm、器高3.4cmで、口縁部～体部の内外面はロクロナデ、底部内面はナデの調整が施され、底部外面はヘラ切り未調整である。（9）も推定口径が9.9cmで、内外面ともロクロナデされている。（10）は推定口径12.5cmとやや大ぶりで、口縁部内外面と体部内面の調整はロクロナデであるが、体部外面はロクロ削りである。胎土はどれも良好で、色調は青灰ないし暗青灰色である。

2. 奈良時代の遺物

土師器皿（6）包含層からの出土で、約1/6が残存し、推定口径17.2cm、同器高2.2cmである。内外面とも口縁部は横ナデ、底部はナデが施されている。胎土・焼成ともに良好で、色調は橙色である。

3. 鎌倉時代の遺物

土師器皿（7）包含層からの出土で約1/3が残存し、推定口径13.7cm、器高3.2cmである。胎土に1mm程度の砂粒を含む。口縁部内外面と体部外面は横ナデ、体部内面はナデの調整が施されている。色調は黄橙色である。A区の他の遺物に比べると時代が下り、B区の遺物と同じ時期に属する。

(2) B 区

1. 縄文時代の遺物

石鏃（43～55）いずれも包含層から出土した。無茎のものばかりであるが、平基のもの（43・44）と凹基のもの（45～55）に大別できる。後者には、抉れの浅いもの（45～48・54）と深いもの（49～53・55）がある。かえりの形状には細長いもの（50・51）、やや幅が広く逆台形状をなすもの（49・53）、逆三角形形状をなすもの（55）などがある。（48）を除く

と側縁は直線的で、左右対称のものが殆どである。平面形は、正三角形か長さが幅の1.5倍以下の二等辺三角形が多いが、(54)のように長さが幅の2倍以上になる身部の長いものもある。(55)も、身部上半が欠損しているが(54)と同様なタイプと思われる・材質は(55)のみチャート、他はサヌカイトである。なお、(45)は片面に一次剝離面を大きく残している。

縄文土器 (56~69) いずれも包含層からの出土である。(56)は口縁付近に細い粘土紐の貼り付けによる斜格子文が施され、その上下には平行沈線がみられる。胎土はやや粗であるが焼成は良好な方である。色調は外面が暗褐色、内面が明褐色である。中期初頭頃のものと思われる。(57~59)は細い沈線と条線がみられる。おそらく沈線で上下を区画し、その中に条線を施したもので、頸部の破片と思われる。中期初頭頃のものであろうか。(60)は低い隆帯と刺突文・沈線を持ち、船元Ⅱ式かと思われる。(61~65)は捺糸紋が施されており、里木Ⅱ式かと思われる。(63)は底部付近の破片と思われる。(66)は堀之内式の渦文かと思われる文様と沈線がみられる。(67)は4本の沈線がみられ、上下2本ずつがそれぞれ平行であるが、上2本はほぼ水平、下2本は若干傾いている。(68)は口縁付近に指で押さえたような刻み目を付けた突帯を持つ。晩期末葉のものと思われる。(69)は沈線で縦に区画された文様帯を持つ破片である。

2. 鎌倉時代の遺物

土師器椀 (11) B区の中央部のピットから出土した。残存度は約1/5で、口径、器高はそれぞれ推定で13.7cm、3.3cmである。口縁部内外面には横ナデが施されている。胎土には1mm程度の砂粒が点在する。焼成は良好、色調は橙色である。体部外面の一部に煤が付着している。

土師器杯 (12) 包含層から出土した。残存度は約1/5で、推定口径11.2cm、器高1.9cmである。口縁部は内弯気味である。口縁部内外面、体部外面に横ナデが施されている。胎土・焼成ともに良好で、色調は橙色である。

土師器皿 (13・14) ともに包含層から出土した。(13)は残存度約1/4で、推定口径11.6cm、同器

高2.0cmである。口縁部は内弯気味に直立し、内外面が横ナデされている。(14)は約1/3が残存し、推定口径11.1cm、同器高2.4cmである。口縁部はやや内湾している。ともに胎土は良好、色調は浅黄橙色である。

土師器皿 (15~18) (17)は包含層から、他は同一のピットから出土した。いずれも口縁部の歪みと体部から底部にかけての指押さえによる凹凸が目立つ。口縁部内外面は横ナデ、底部内面はナデ、外面は指押さえの後ナデられている。口径は6.8~8.3cm、器高は0.9~1.5cmで、胎土、焼成とも良好である。色調は(15)が灰白色、他は淡黄色ないし浅黄橙色である。

土師器鍋 (19・20) ともに包含層から出土した。(19)は推定口径が25.7cm、体部最大径が推定で28.6cmである。頸部はほぼ直立し、口縁部は一旦水平方向よりも下方に屈曲した後、外側上方へ持ち上げられ、端部は折り返されている。頸部から口縁部にかけてはヨコナデされ、口縁端部の折り返し部は強く横ナデされて凹面となっている。(20)は、推定口径が27.9cmで、体部の径は口径より小さいと思われる。口縁端部は折り返されており、口縁部内外面は横ナデされている。色調はいずれも浅黄橙色であるが、(20)の口縁端部付近外面には煤状の付着物がみられる。

山皿 (21~25) いずれも包含層からの出土で、完形若しくはほぼ完形である。口径は7.5~8.2cm、底径は4.3~5.2cm、器高は1.6~2.0cmである。底部が体部に比べて厚く、底部外面には回転糸切り痕が見られる。体部から口縁部にかけては、直線的に外上方に伸びるもの(21~23)と、口縁部が外反するもの(24・25)に分かれる。また、(25)は腰部が丸みを帯びている。口縁端部は(23)の外面が強いロクロナデのために凹面をなしているほかは丸くおさまられている。(25)の底部内面と(22)・(23)の同中央部はロクロナデの後ナデられており、このうち(22)のナデは同一方向に施されている。底部と体部の接続部内面は、(22)を除くと窪んでいる。胎土・焼成は(25)のみ胎土に1~5cm大の砂粒を含む他は良好で、色調は(25)が灰黄色、他は灰白色である。なお、(21)の口縁端部から底部内面に

かけて暗オリーブ色の自然釉が、また、(24)の体部内面の約半分にはオリーブ黒色の自然釉がかかっている。

山茶碗 (26~42) (26)はSK14、(30)・(37)・(38)はSK10、(34)はSK12、(27)・(28)・(33)・(40)・(42)はピットから、他は包含層から出土したもの(試掘時も含む)である。これらの山茶碗は体部~口縁部の形態で3グループに分けられそうである。その1は口縁部がやや外反し、玉縁状の口縁をなすもの(28~30)、その2は体部から口縁部まで直線的であり、口縁端部が丸みを帯びないもの(37・38)、その3は前2者の中に属するもの(31~36)である。第1のグループのうち(28)と(29)は体部が丸みを帯び、高台径が5cm内外と、他のグループの6.2cm以上と比べて小さい。

底部の残るものは、どのグループも貼り付け高台

で、高台の断面形は逆台形状ないし逆三角形を呈し、低く粗雑な仕上がりのものが殆どである。(42)も高台が剝離した痕跡がある。底部外面は、(26)・(34)・(39)が回転糸切り後ロクロナデ、(29)と(42)が回転糸切り後ナデ、他は回転糸切り未調整である。高台の残る12例のうち9例にモミ殻痕がみられる。また、底部内面にロクロナデの後ナデが施されているものが2例(29・32)ある。

胎土は概ね良好であるが、1~5mm大の砂粒を含むものが5例(27・32・35・39・42)ある。焼成はほぼ良好、色調は全て灰白色である。なお、(28)の体部内面、(29)の口縁~体部内面、(32)の体部内面、(37)の口縁端部内外面、(38)の口縁端部外面の一部、(40)の体部内面の一部にそれぞれ自然釉がかかり、その色調には暗オリーブ色、灰白色、灰オリーブ色等がある。

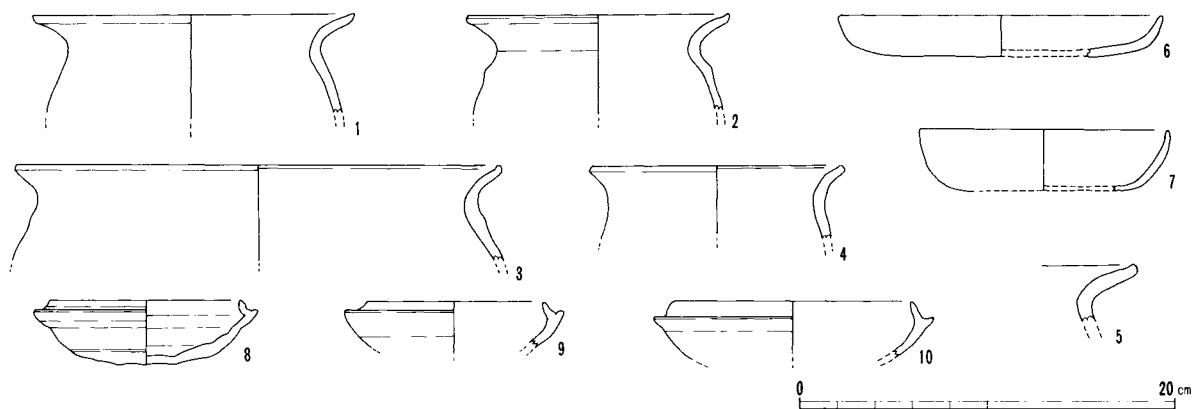
4. 結 語

今回の調査は限られた範囲内におけるものであったが、A区で古墳時代、B区で鎌倉時代の遺構・遺物を確認することができ、また、B区では縄文時代の遺物もみつかった。

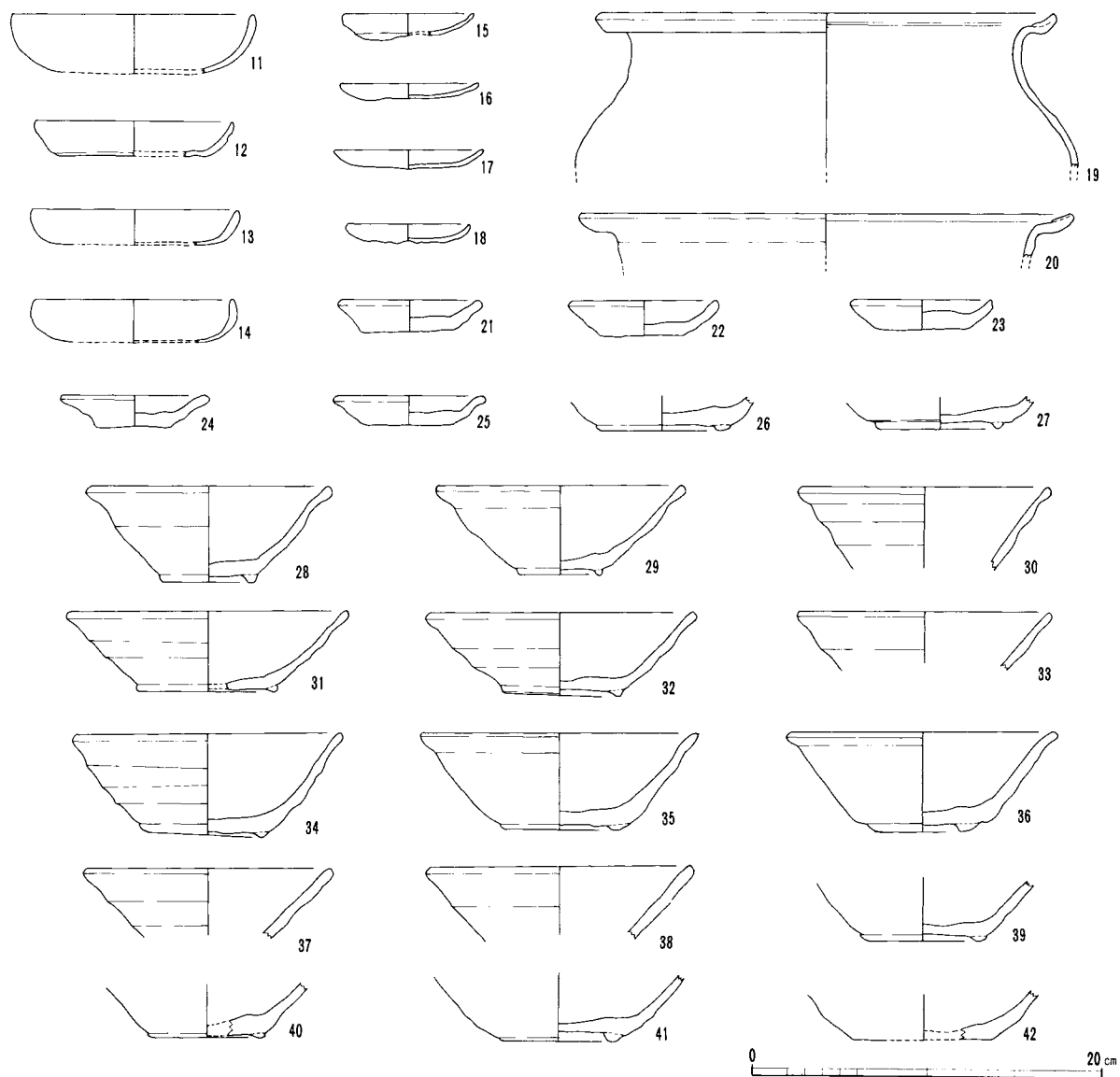
A区は遺構密度が薄い、出土した須恵器、土師器は古墳時代後半に属するもので、SB1から出土した須恵器杯身は陶邑編年^②のTK217号窯の時期に相当するものと思われ7世紀代に入るものと考えられる。検出された翌穴住居は僅かに2棟で、その残存状態は必ずしも良好なものではなかった。調査区に続く西側も平坦ないし緩やかな斜面(西向き)であるので、遺跡のある程度の広がりも想定できるが、それにしても規模の大きな集落ではないと思われる。ただ、本遺跡のすぐ南に位置する女牛谷古墳群の調査で6世紀から7世紀にかけての後期古墳の存在が明らかにされており、それらとの関連は指摘し得るのであろう。

B区はA区より遺構密度が濃く、その殆どがB区の中央以南の傾斜がより緩やかな部分に集中している。それらの遺構や包含層から出土している山茶碗は、藤澤良祐氏の編年^③でいう第Ⅲ段階第6形式(13世紀前葉)にその大半がおさまると考えられ、一部

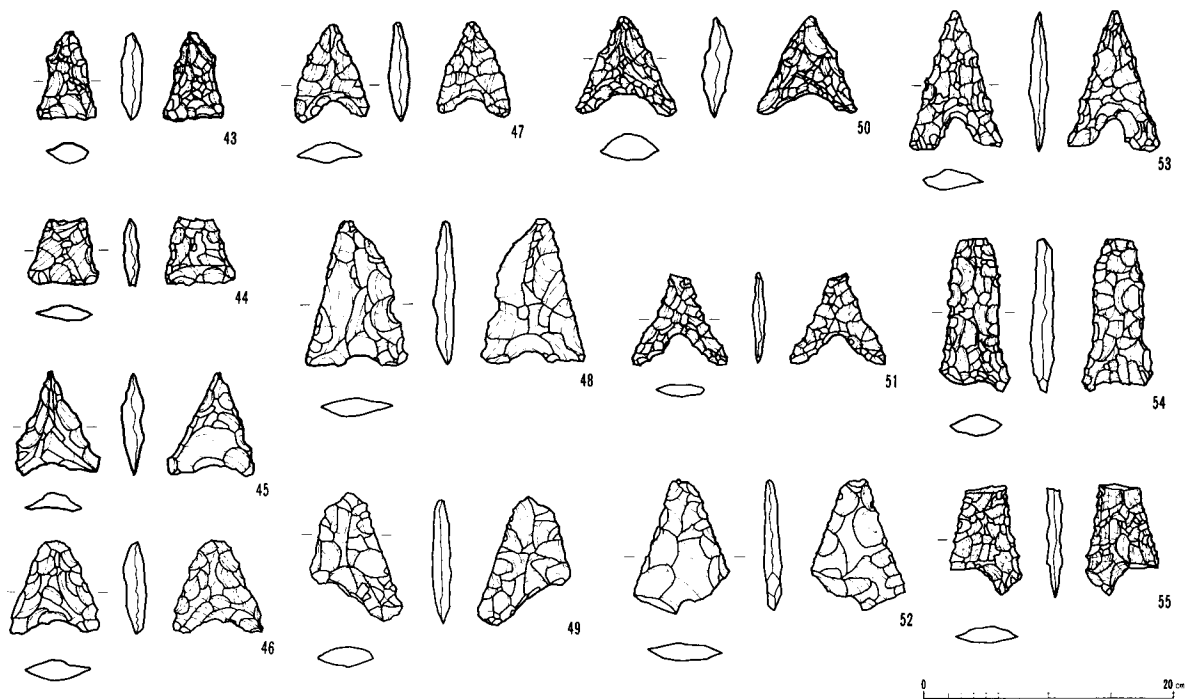
第Ⅱ段階第4型式(12世紀中葉)や第Ⅲ段階7型式(13世紀中葉)に入るかと思われるものがあるものの、概ね鎌倉時代前半の遺物と考えられる。したがって、B区は鎌倉時代前半に営まれたごく小規模な集落跡ということになるが、検出された掘立柱建物の規模が小さく、当時の社会の上層の人々によるものとは思われない。県外の例ばかりになるが、薩摩国島津荘入来院・安芸国沼田荘・備中国新見荘等の荘園の復元的研究の成果^④によれば、平安後期以来の古い領主(開発領主であり荘園寄進の主体であり自らは荘官乃至有力名主となっている)は迫田や谷田を勢力基盤とし、鎌倉時代になって入部してきた地頭は低湿地帯に根拠地を置いたことが鎌倉時代後期の文献史料を手掛かりに明らかにされている。また、新見荘では、1つの谷ごとに1つの旧来の百姓名があった、谷の出口近くの小高い所に名主の屋敷がありこれを中心に垣内が形成されていた、その外側の迫等に名主に従属する作人が居住していた等と考えられている。こうした状況は他地域にも認められるようで、「孤立農家」ないしは「小村、散居制集落」と規定されている。以上の研究成果に拠るならば、B区の集落は散居制集落の一例と考えることができ、



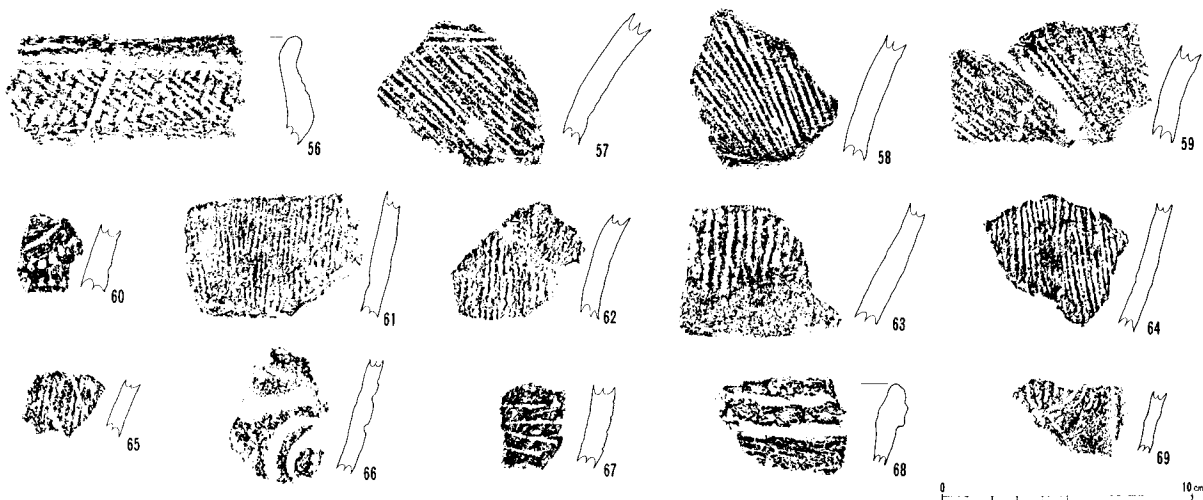
第14图 A区出土遗物实测图 (1:4)



第15图 B区出土土器实测图 (1:4)



第16図 B区出土石鏃実測図（2：3）



第17図 B区出土縄文土器実測図・拓影（1：3）

おそらくは作人クラスが居住していたのではないかと推測される。

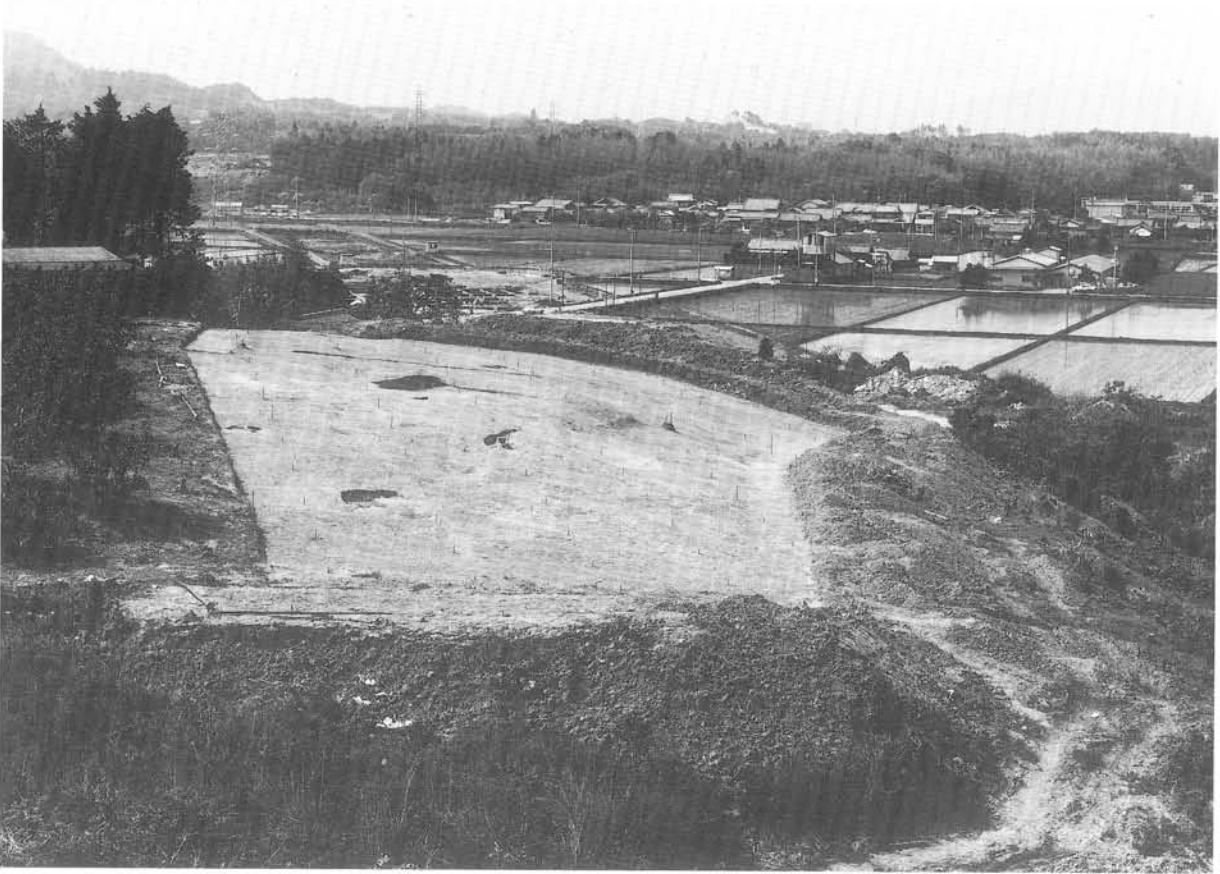
縄文土器及び石鏃・フレイクはB区中央部やや東寄りの一帯から出土した。この辺りは鎌倉時代の遺構検出面より10数cm下まで炭混じりの層が続いていた。しかし、明瞭な縄文時代の遺構は検出されなかつ

註

- ① 遺物の記述に関して、山茶碗については新出洋氏から、石鏃・縄文土器については田村陽一氏から、それぞれ貴重な御教示をいただいた。
- ② 平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群Ⅰ』1966
- ③ 三重県教育委員会『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』1988.3

た。ただし、縄文時代中期頃に当地で人々が活動していたのは事実であり、当遺跡の北方約500mに所在する堀之内遺跡（水田下3mから中期末葉、後期前葉、晚期中葉の3時期の多量の遺物が出土した^⑥）との関連など、視野を広げて検討していく必要がある。（小坂 宜広）

- ④ 「瀬戸古窯跡群Ⅰ」（『瀬戸市民俗資料館研究紀要Ⅰ』）1982
- ⑤ 荘園の復元的研究については、石井進氏「中世の荘園と村」（『日本中世史像の再検討』）に拠った。
- ⑥ 三重県教育委員会『近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ』1989.3



A区全景 (南から)

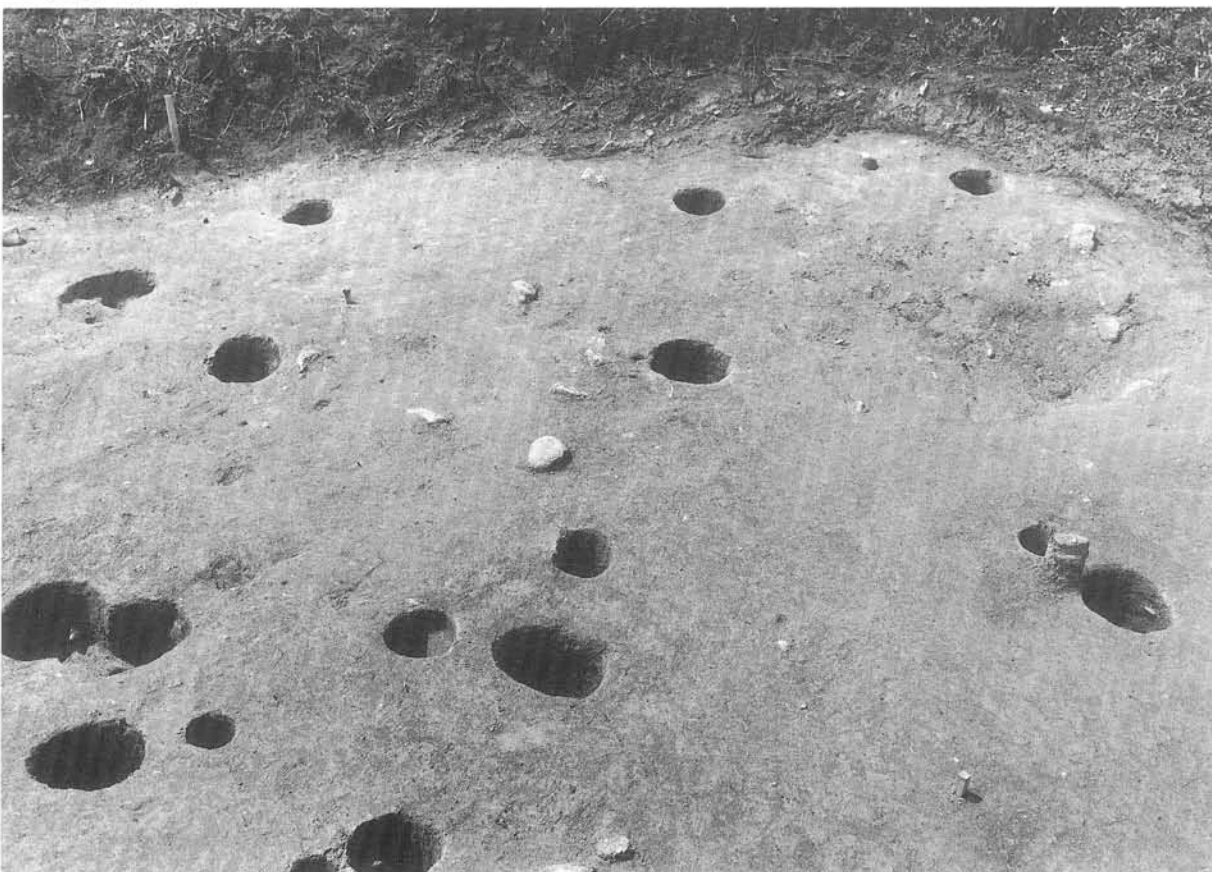


S B 1 (南から)

PL 2



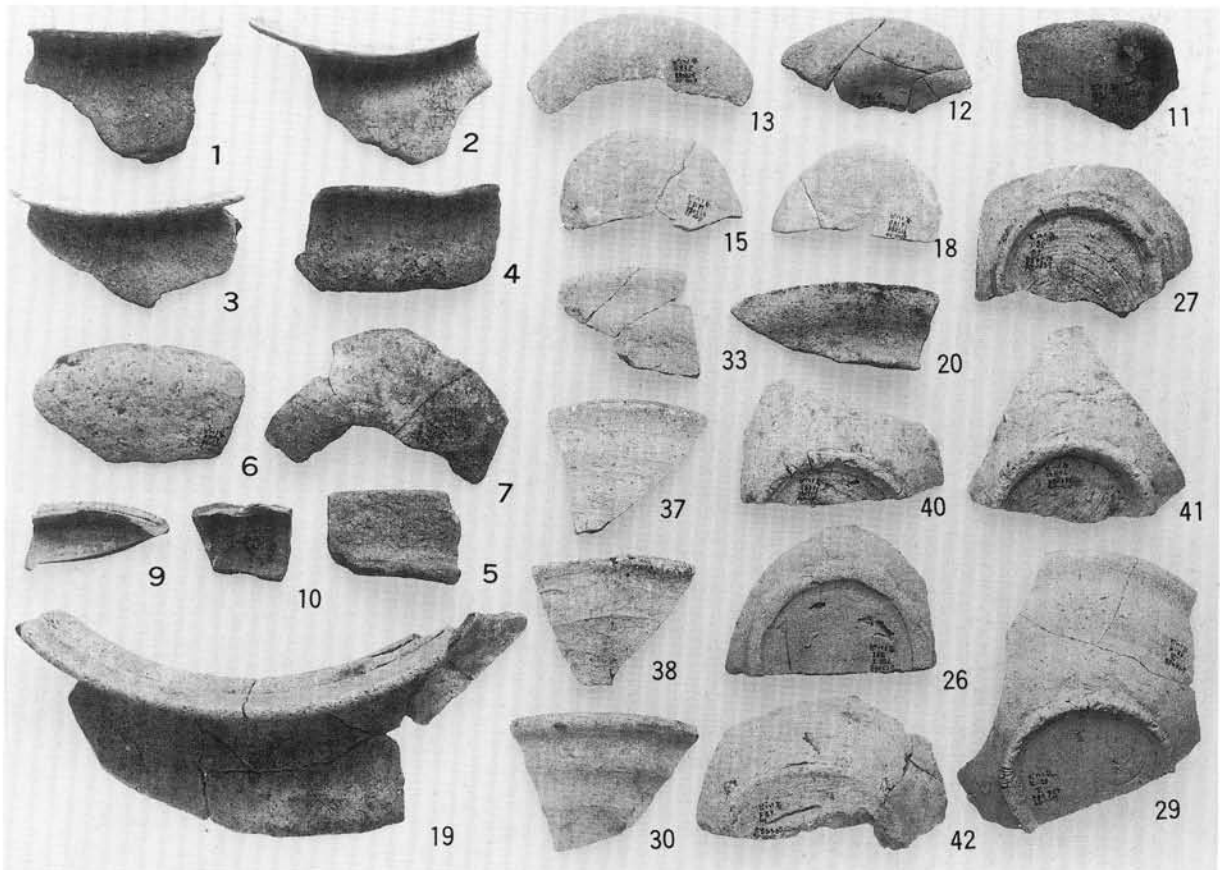
B区全景 (北から)



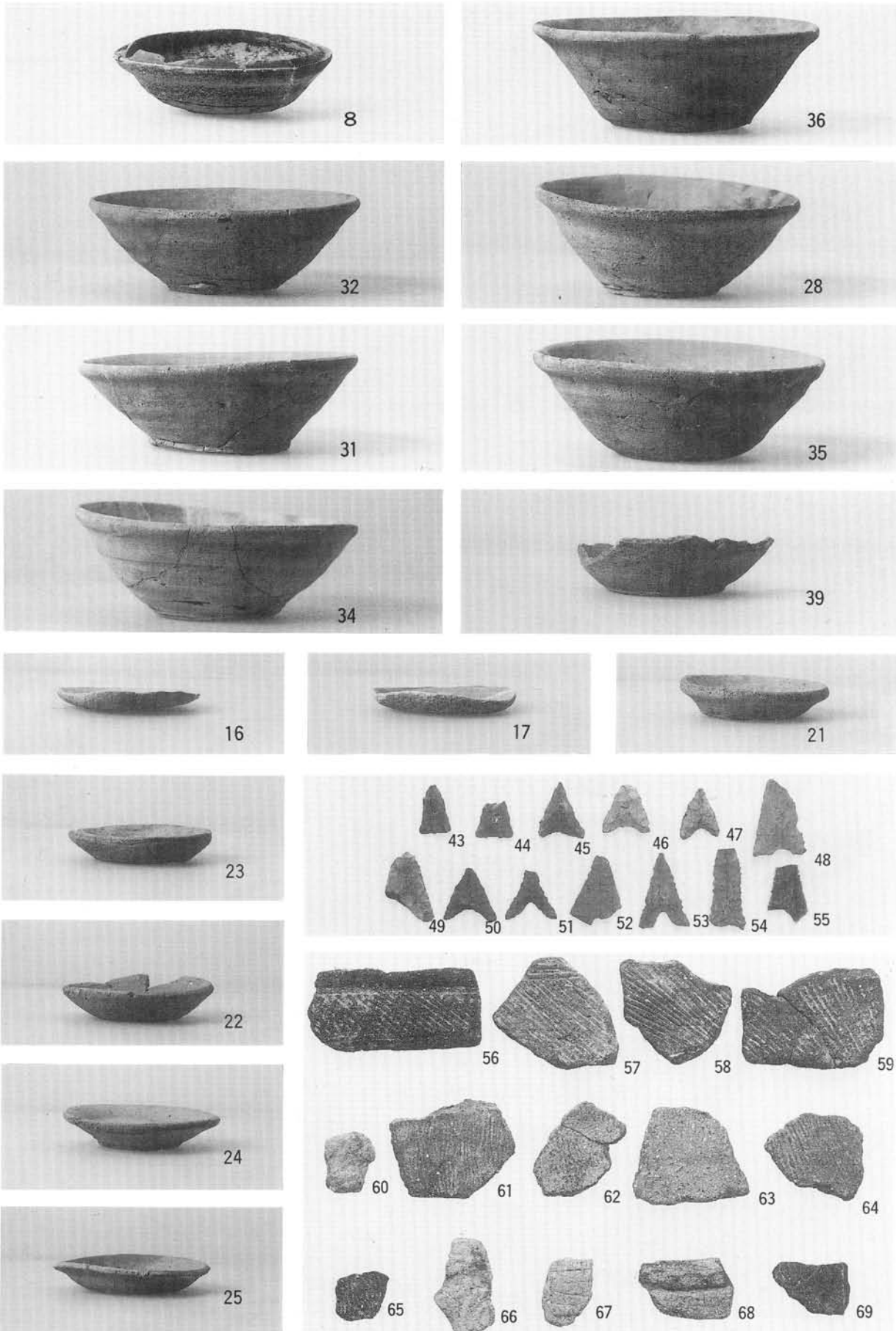
SB 6 (北から)



SK10 (北から)



出土遺物 (1 : 3)



出土遺物（石鏃は1：2，他は1：3）

IV. 一志郡嬉野町 中尾遺跡

1. はじめに

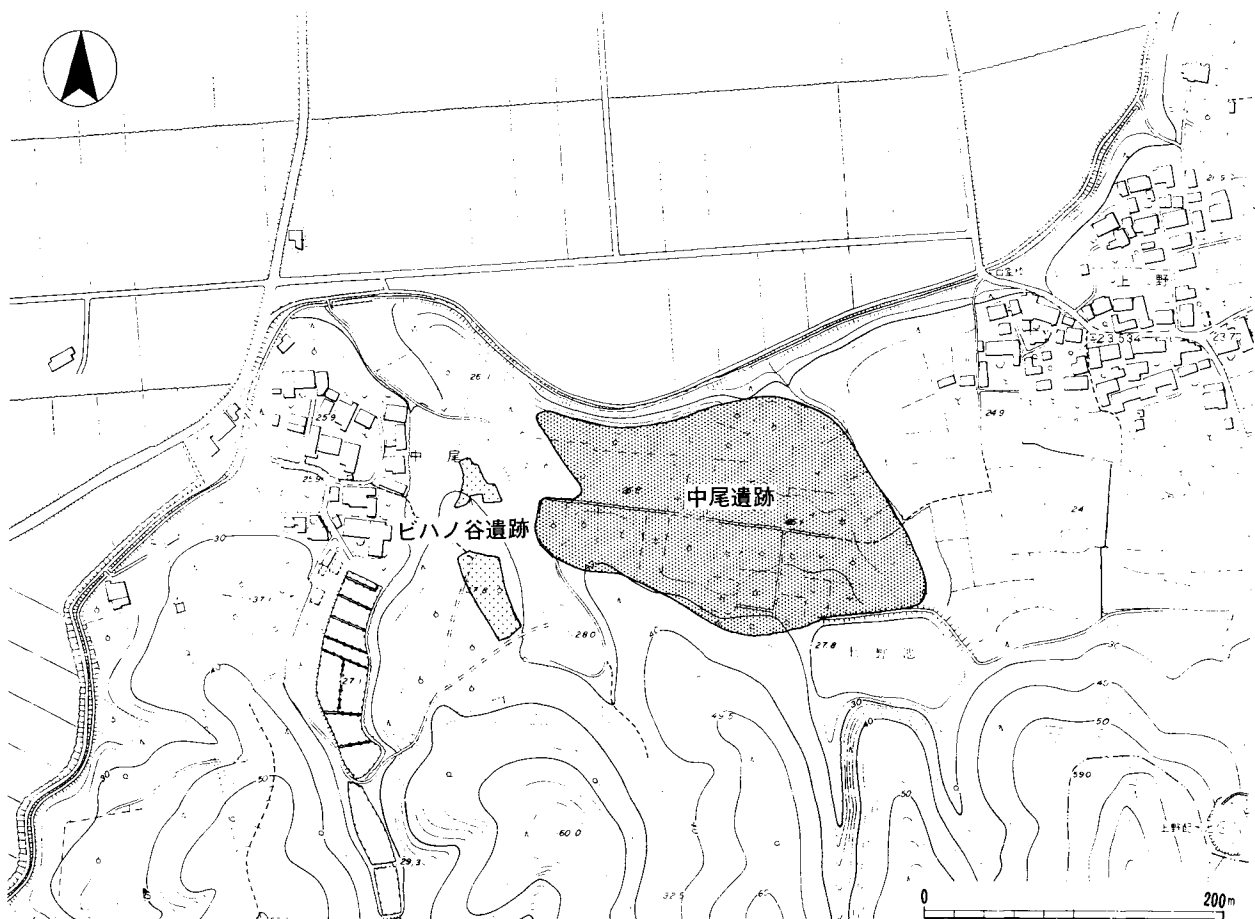
中尾遺跡は、行政区画は、嬉野町大字薬王寺字柿木垣内・大字下之庄字中尾垣内に所在する。東西約500m、南北約200～300mの平坦地全体が遺跡で標高は約26～28m、現況は畑地である。当遺跡は、遺物散布地として知られており、今回の調査期間中にも土師器、須恵器、山茶碗、石硯等が表面採集された。表面採集遺物は、山茶碗等の中世遺物が多く、調査前は中世の集落跡の可能性が高いと考えられていた。西側には小谷を挟んでビハノ谷遺跡^①が近接しており、その距離は30m程である。

第1次調査（試掘調査）は、道路計画路線内に試掘坑を9か所、93㎡設定し、昭和62年3月4日に実施した。その結果、路線内では約500㎡が遺跡範囲

であることが判明し、第2次調査（本調査）は同年5月6日から6月5日まで実施した。

昭和63年には今回調査区の東方では嬉野町教育委員会により、県道丹生寺一志線新設工事に伴う発掘調査^②と、大谷川河川改修に伴う発掘調査^③が行われている。遺構としては竪穴住居、掘立柱建物、井戸、溝、土坑等が検出されており、遺物は古墳・奈良時代および中世の物が出土している。

なお遺跡名については、中尾遺跡として登録されているが、嬉野町教育委員会の発掘調査では中尾東遺跡、嬉野町の遺跡詳細分布調査^④では中尾垣内遺跡としている。今回の報告では混乱を避けるため従来どおりの中尾遺跡として報告する。



第18図 遺跡地形図（1：5000）

2. 層序および遺構

基本的層序は、第Ⅰ層：褐色土7.5YR4/6[㊦](表土)、第Ⅱ層：明褐色粘質土7.5YR5/6(遺物包含層)、第Ⅲ層：砂粒混り黄褐色土2.5Y5/6(地山)である。

遺構は掘立柱建物3棟の他に土坑、ピットを検出した。主な遺構は次のとおりである。

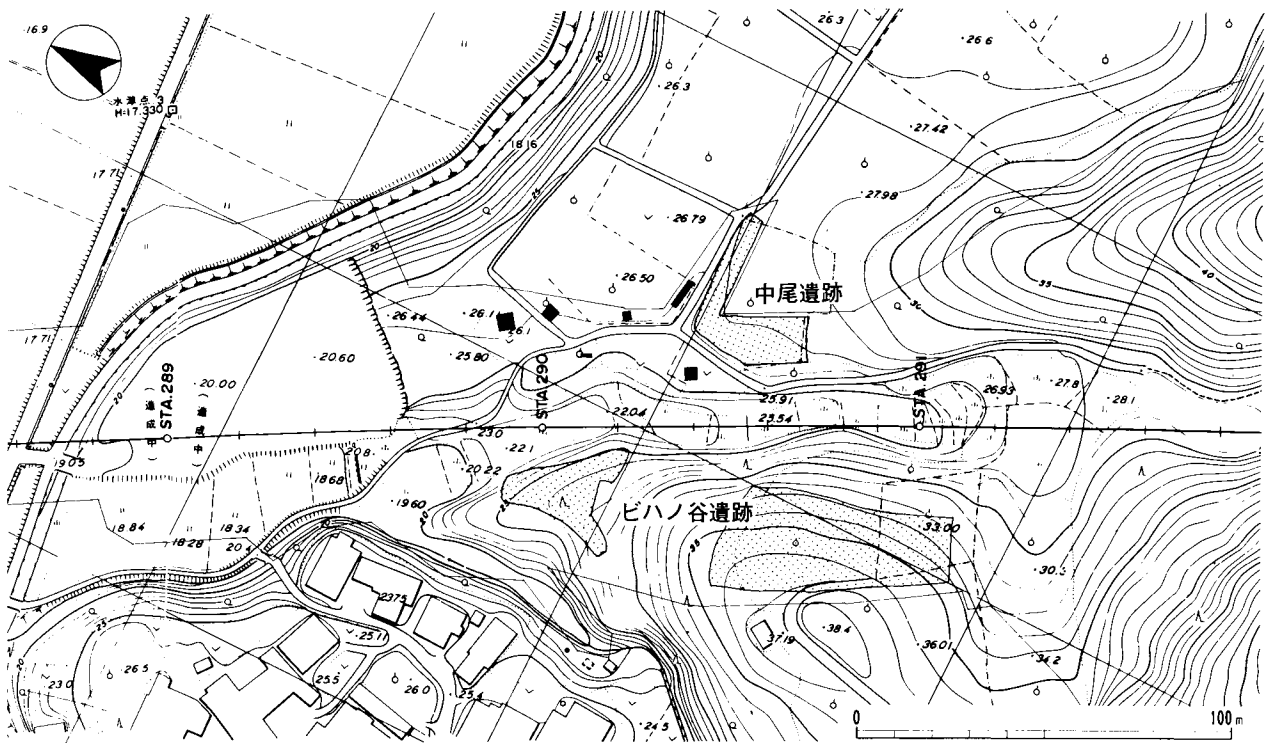
(1) 掘立柱建物

S B 1 3間以上×2間以上で、柱間寸法は桁行2.0m、梁行1.7m、棟方向はN6°Wである。柱掘形は50×60cm前後の長方形で、柱痕跡は検出されたもので径18~30cmである。

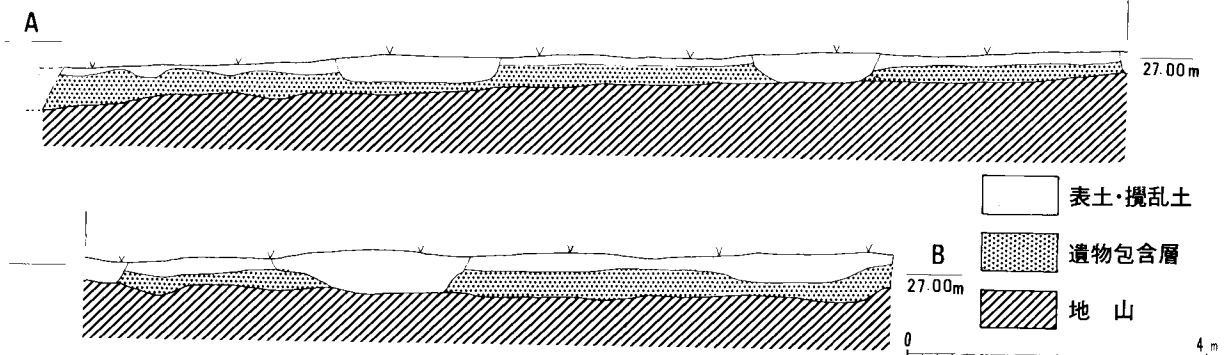
S B 2 2間×2間の総柱建物で、柱間寸法は桁

行1.5m+2.0m、梁行1.8m+1.2mで、棟方向はN89°Eである。柱掘形は30×50cm前後の長方形を基本としており、柱痕跡は検出されたもので径25cmである。北東隅の柱穴には25×40cm程の石を根石として据えている。

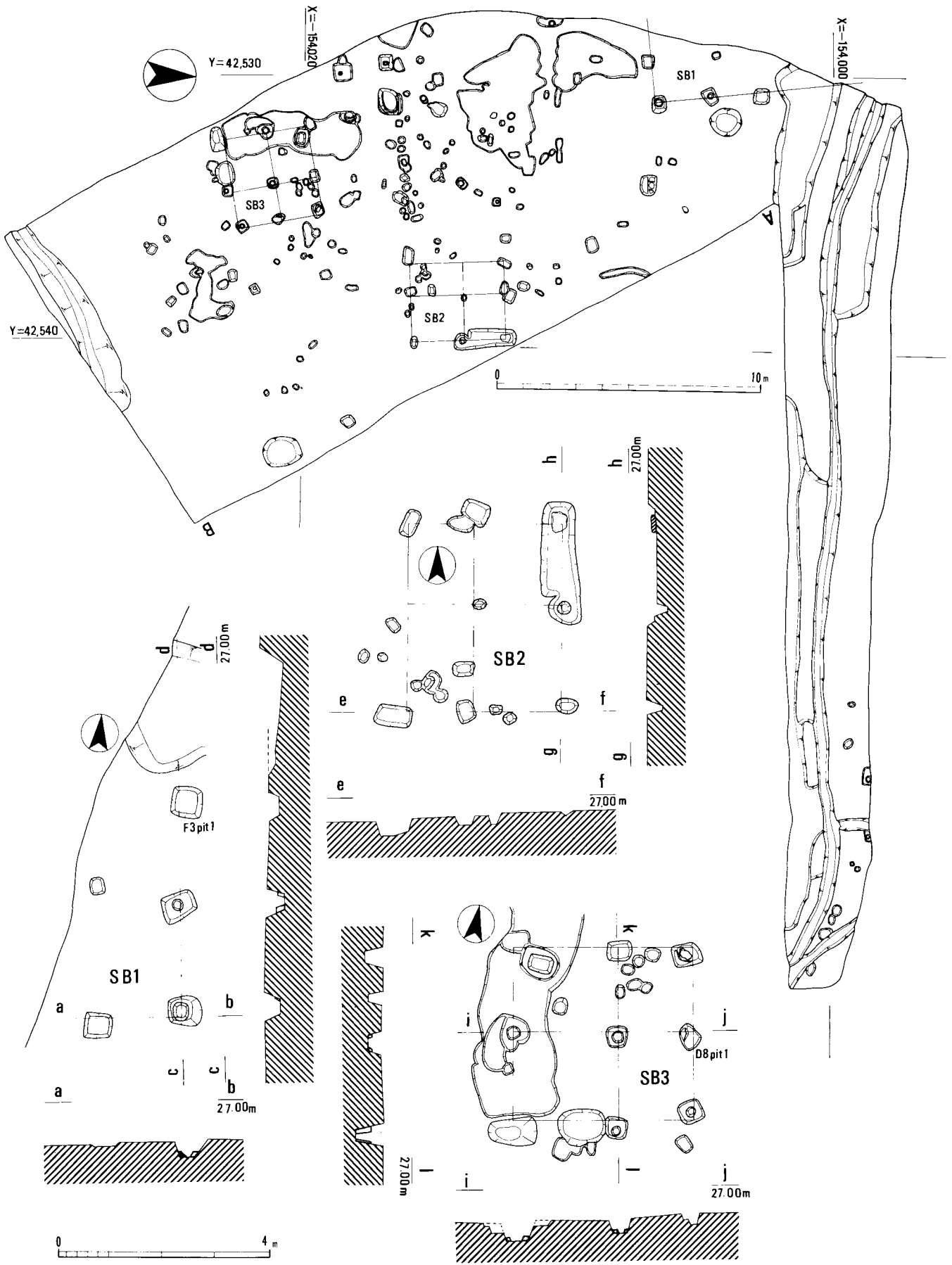
S B 3 2間×2間の総柱建物で、柱間寸法は桁行2.0m+1.4m、梁行1.6m+1.7mで、棟方向はN80°Eである。柱掘形は40×50cm前後の長方形を基本とし、柱痕跡は検出されたもので径18~25cmである。北東隅の柱穴には10×30cm程の根石を据えている。



第19図 発掘区位置図 (1:2,000)



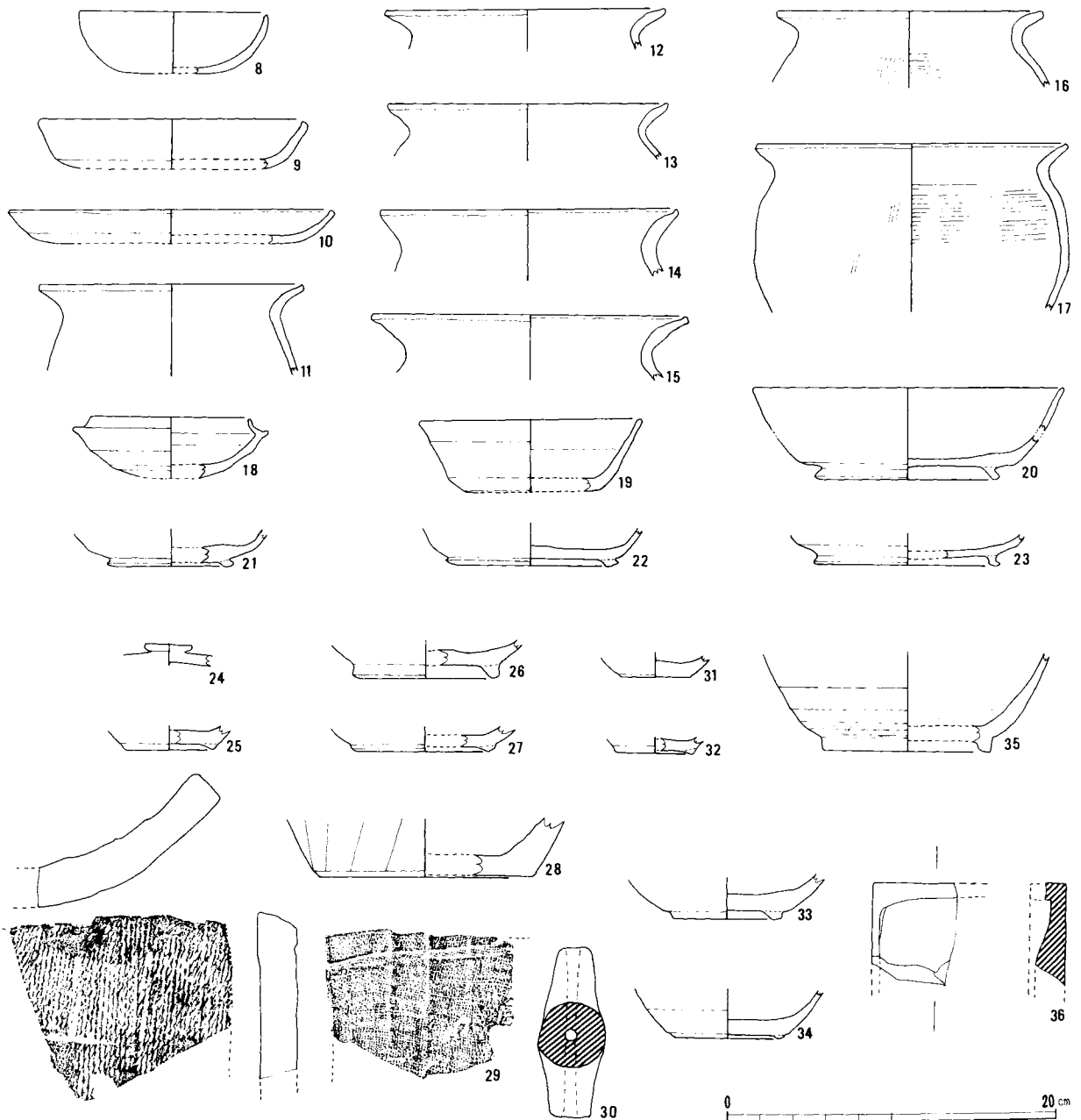
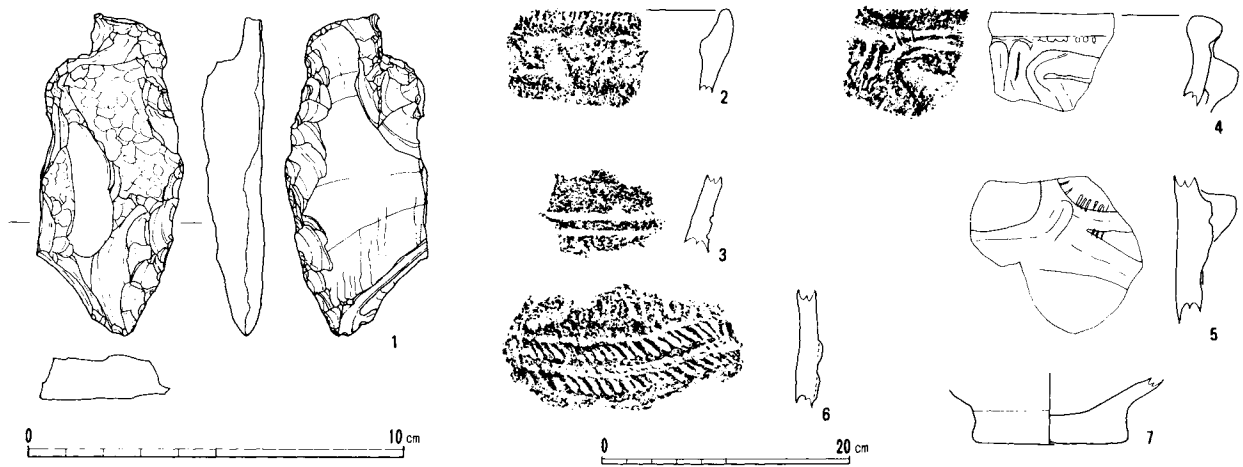
第20図 発掘区土層断面図 (1:100)



第21図 遺構平面図（1：200），掘立柱建物実測図（1：100）

遺物番号	登録番号	出土遺構位置	器種器形	口径 cm	器高 cm	底径 cm	遺存度	形態・技法の特徴	胎土(材質)	焼成	色調
1	0042	D 5 包含層	石器 削器	長さ 8.5	幅 3.8	厚さ 1.6	完形	銅片素材。片側縁の両面に荒い刃部加工	サスカイト		
2	0036	E 5 包含層	縄文土器	不明	不明	不明	口縁部 小片	外面口唇部爪形文	砂粒を多く含む	並	極暗赤褐10R2/3
3	0037	E 7 包含層	縄文土器	不明	不明	不明	小片	外面竹管文、刺穴文	砂粒・金雲母含む	並	暗赤褐5 Y R3/6
4	0039	試掘G 9 包含層	縄文土器	不明	不明	不明	口縁部 小片	外面、隆帯文、剣先文	細砂粒含む	並	にぶい赤褐2.5Y R4/4
5	0040	試掘G 9 包含層	縄文土器	不明	不明	不明	体部 小片	外面隆帯、隆帯の上・下を連続刺突	細砂粒含む	並	にぶい赤褐2.5Y R4/4
6	0038	E 5 包含層	縄文土器	不明	不明	不明	体部 小片	外面隆帯、隆帯とその間に刻み目	砂粒を多く含む	並	明黄褐10Y R6/6
7	0041	D 5 包含層	縄文土器	不明	不明	6.0	底部	ナデ	砂粒を多く含む	並	橙5 Y R6/8
8	0017	L 6 包含層	土師器 碗	(11)	(4)	-	1/2	磨減により調整不明	砂粒を含む	並	淡黄2.5Y R8/3
9	0007	D 9 包含層	土師器 杯	不明	不明	-	口縁部 小片	口縁部ヨコナデ	並	並	橙2.5 Y R6/8
10	0008	D 5 包含層	土師器 皿	不明	不明	-	口縁部 小片	口縁部ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ?	良	並	橙5 Y R6/8
11	0015	S B 1 (F 3 pit 1)	土師器 甕	不明	不明	-	口縁部 小片	口縁部ヨコナデ	並	並	橙5 Y R6/6
12	0016	表土	土師器 甕	不明	不明	-	口縁部 小片	口縁部ヨコナデ	並	並	橙5 Y R6/8
13	0013	試掘G 9 包含層	土師器 甕	(17)	不明	-	口縁部 1/4	口縁部ヨコナデ	並	並	明赤褐2.5 Y R5/8
14	0009	S B 3 (D 8 pit 1)	土師器 甕	不明	不明	-	口縁部 小片	口縁部ヨコナデ	並	並	黒褐10Y R3/1
15	0019	E 7 包含層	土師器 甕	(19)	不明	-	口縁部 1/6	口縁部ヨコナデ	並	並	明黄褐10Y R6/8
16	0014	C 7 包含層	土師器 甕	(16)	不明	-	口縁部 1/4	口縁部ヨコナデ、体部外面縦ハケメ・内面横ハケメ	並	並	黄橙10Y R7/8
17	0020	D 9 包含層	土師器 甕	(19)	不明	-	1/3	口縁部ヨコナデ、体部外面縦ハケメ・内面横ハケメ	並	並	黄橙10Y R8/6
18	0005	D 5 包含層	須恵器 杯	(10)	(4)	-	1/4	ロクロナデ、底部ロクロケズリ	良	良	青灰5 B G5/1
19	0006	L 6 攪乱土	須恵器 杯	(13)	(4)	(8)	体部 1/6	体部ロクロナデ、底部ロクロケズリ	砂粒を含む	並	青灰10 B G6/1
20	0001	試掘G 9 包含層	須恵器 杯	(19)	(5~6)	高台 10.8	底部完 口小片	ロクロナデ、底部ロクロケズリ、ロクロ回転時計廻り	砂粒を含む	並	黒褐10Y R2/2
21	0002	試掘G 9 包含層	須恵器 杯	不明	不明	高台 (8)	底部 1/6	ロクロナデ	砂粒を含む	並	白灰N7/
22	0003	D 8 包含層	須恵器 杯	不明	不明	高台 (9)	底部 3/4	ロクロナデ、底部内面仕上げナデ、底部外面未調整	良	並	白灰7.5 Y7/1
23	0004	D 8、D 9 包含層	須恵器 杯	不明	不明	高台 (11)	底部 1/3	ロクロナデ	良	並	青灰5 B G6/1
24	0010	C 9 包含層	須恵器 蓋	不明	不明	-	つまみ 部のみ	ロクロナデ、天井部内面仕上げナデ	良	並	白灰N 7/
25	0034	試掘G 5 包含層	陶器 山皿	不明	不明	高台 (5)	底部 1/2	高台はほとんど剥離、ロクロナデ、底部糸切り痕	砂粒を含む	並	白灰7.5 Y7/1
26	0022	M 6 包含層	陶器 山茶碗	不明	不明	高台 (8)	底部 1/2	ロクロナデ、底部糸切り痕	良	良	白灰7.5 Y7/8
27	0023	I 5 包含層	陶器 山茶碗	不明	不明	高台 (8)	底部 1/4	ロクロナデ、底部ナデ消し	良	良	灰7.5 Y6/1
28	0021	M 6 包含層	陶器 甕	不明	不明	(13)	底部 1/4	外面ヘラケズリ(ケズリ幅2.4cm)	細砂粒を含む	良 自然釉	白灰 7.5 Y7/8
29	0024	H 4 攪乱土	瓦 平瓦	全長 不明	幅 不明	厚さ 2.3	小片	凹面模骨痕・布目痕、凸面縄叩き痕、側面・端面ヘラケズリ	良	良	青灰5 B G5/1
30	0012	L 6 包含層	土製品 土鉢	全長 5.2	径 2.1	重量 16.6g	完形		並	並	黒褐10Y R3/1
31	0029	表面採集	陶器 山皿	不明	不明	4.2	底部ほ ぼ完形	ロクロナデ、底部糸切り痕	砂粒を含む	並	灰10Y7/1
32	0028	表面採集	陶器 山皿	不明	不明	高台 (4)	底部 1/2	ロクロナデ、底部糸切り痕、モミガラ痕	良	並 自然釉	白灰7.5 Y7/1
33	0027	表面採集	陶器 山茶碗	不明	不明	高台 6.6	底部 1/2	ロクロナデ、みこみ調整、底部糸切り後ナデ、モミガラ痕	砂粒を含む	並 自然釉	灰7.5 Y6/1
34	0026	表面採集	陶器 山茶碗	不明	不明	高台 (6)	底部 1/2	高台はほとんど剥離、ロクロナデ、底部糸切り痕	砂粒を含む	並 自然釉	灰白10Y8/1
35	0030	表面採集	陶器 鉢	不明	不明	高台 (10)	小片	片口鉢か?ケズリ出し高台、ロクロケズリ、内面全面と外面体部に施釉	良	並	淡黄5 Y8/3
36	0031	表面採集	石製品 硯	全長 不明	幅 不明	不明	小片	小型の長方硯	粘板岩		灰オリーブ5 Y6/2

第4表 出土遺物観察表



第22図 遺物実測図（1：4，ただし1・30・36は1：2，2～7は1：3）

3. 遺物

遺物は整理箱に約5箱出土したが、遺物包含層出土のものがほとんどで、遺構に伴うものは少量である。時代は、縄文時代、古墳時代、奈良時代、鎌倉時代である。

縄文時代の遺物は石器としては削器(1)が1点と縄文土器片(2~7)が遺物包含層から出土している。

古墳時代の遺物は、少量であるが、須恵器杯(18)が出土している。

奈良時代の遺物は土師器碗(8)・杯(9)・皿(10)高杯・甕(11~17)、須恵器杯(19~23)・蓋(24)などがある。いずれも残存度は悪く、口径は

推定復元である。

鎌倉時代の遺物は、少量であるが、土師器、山茶碗(26・27)、山皿(25)、陶器甕(28)等が出土している。

また時期は不明であるが、平瓦(29)、土錘(30)も出土している。

表面採集遺物として、土師器、須恵器杯・蓋、山茶碗(33・34)、山皿(31・32)、陶器鉢(35)、石硯(36)がある。陶器鉢(35)は18世紀後半の片口鉢と思われる^⑥。石硯(36)は小形の長方硯で、材質は粘板岩である^⑦。

4. 結語

今回の調査は、広大な面積を有する遺跡の西辺の約500㎡と言うごく限られた部分の調査であった為に当然の事ながら遺跡全体の性格を把握することはできなかった。以下に若干のまとめをしておきたい。

(1) 縄文土器について

縄文時代の遺構は検出されなかったが、土器は中期前葉^⑧と考えられる土器片(2~7)が出土した。(2~5)は五領ガ台式~勝坂式初頭の物と思われるが、(4)については北陸系の新保・新崎式の要

素がみられる。(6)は船元1~2式と思われる。

(2) 建物について

検出した主な遺構は掘立柱建物3棟(SB1~3)であるが、いずれも柱穴出土の遺物が少なく明確な時期決定は難しい。しかし包含層出土遺物は奈良時代のものが多くを占めており、掘立柱建物も奈良時代の遺構と考えるのが妥当であろう。

(河北秀実)

[註]

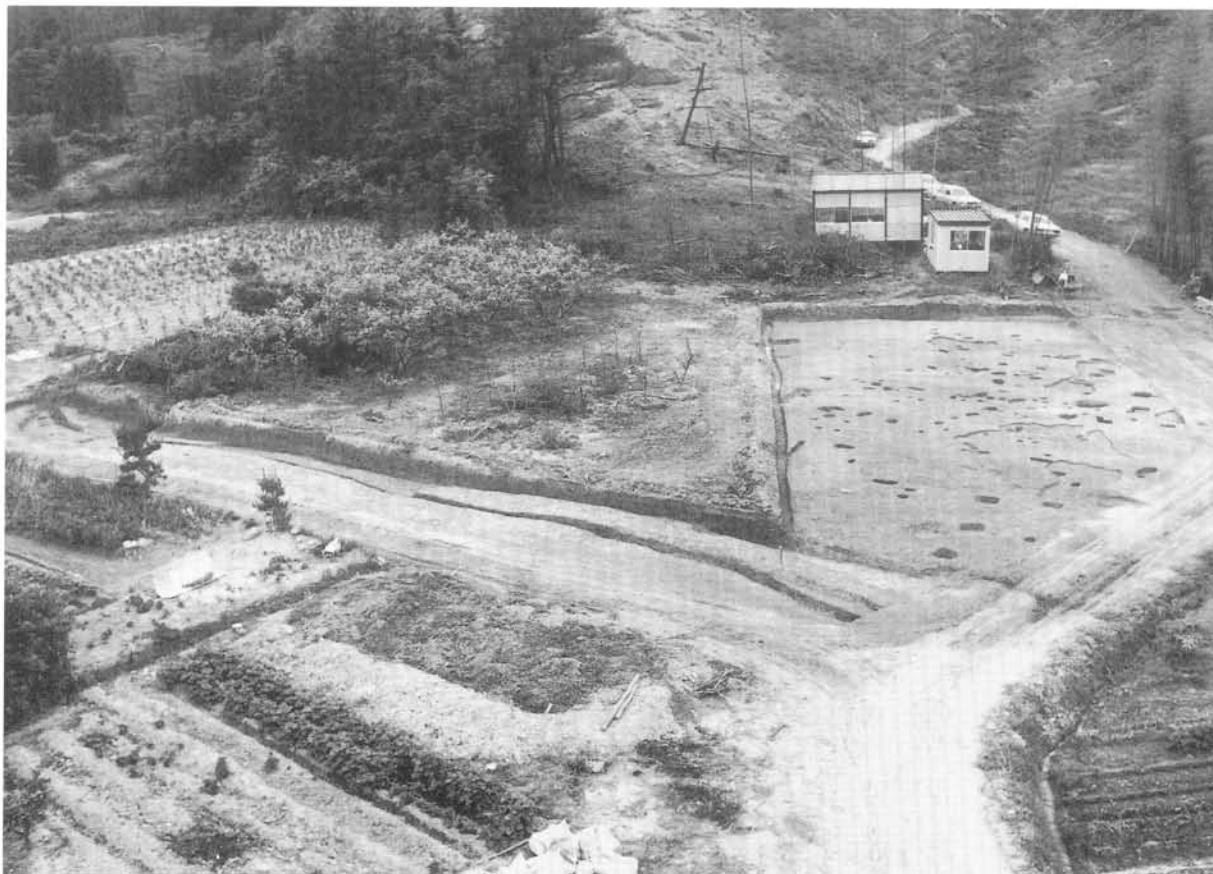
- ① 本書Ⅲで報告
- ② 『嬉野町埋蔵文化財調査概要 平成元年度』嬉野町教育委員会 1990
- ③ 註②に同じ
- ④ 『三重県嬉野町遺跡詳細分布地図』嬉野町教育委員会 1989
- ⑤ 土層の色調および遺物の色調については『新版標準土色帳 1988年版』を使用した。

- ⑥ 瀬戸市教育委員会藤澤良祐氏の御教示による
- ⑦ 三重県立津西高等学校教諭磯部克氏の御教示による。
- ⑧ a. 小林達雄編『縄文土器大観3 中期Ⅰ』小学館 1988
b. 小林達雄編『縄文土器大観3 中期Ⅱ』小学館 1988
・なお縄文土器の編年観については三重県立松阪高等学校教諭奥義次氏より多くの御教示を得た。

PL1



調査前風景（西から）



発掘区全景（北から）

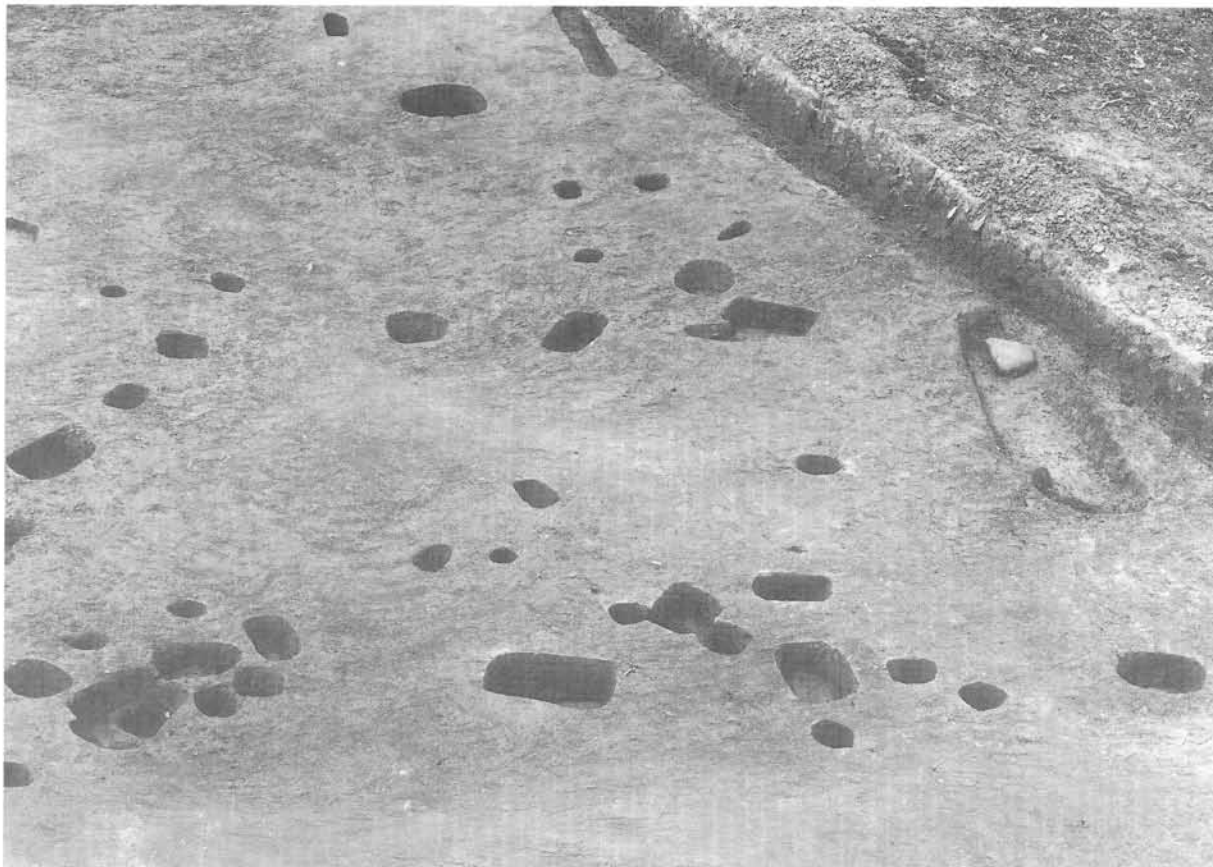


発掘区西半（北から）

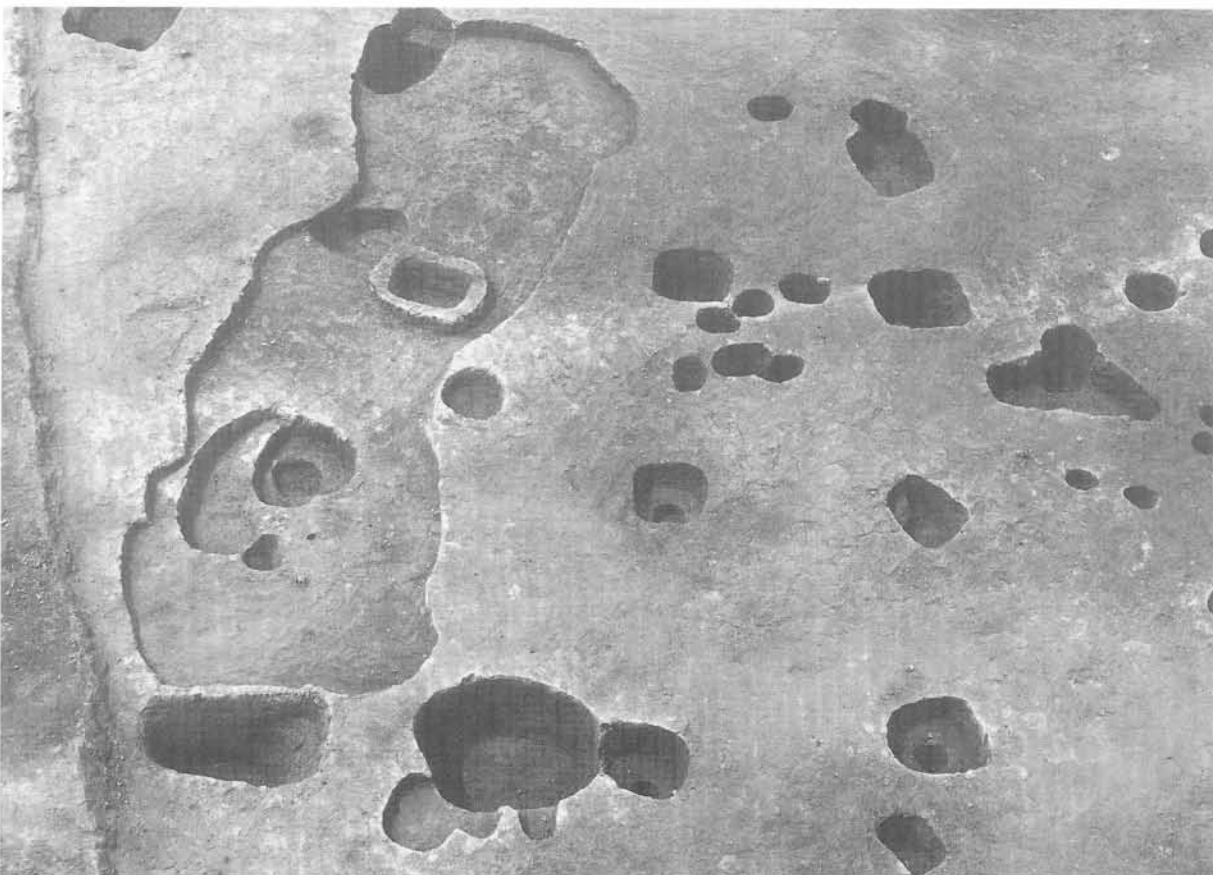


S B 1（南から）

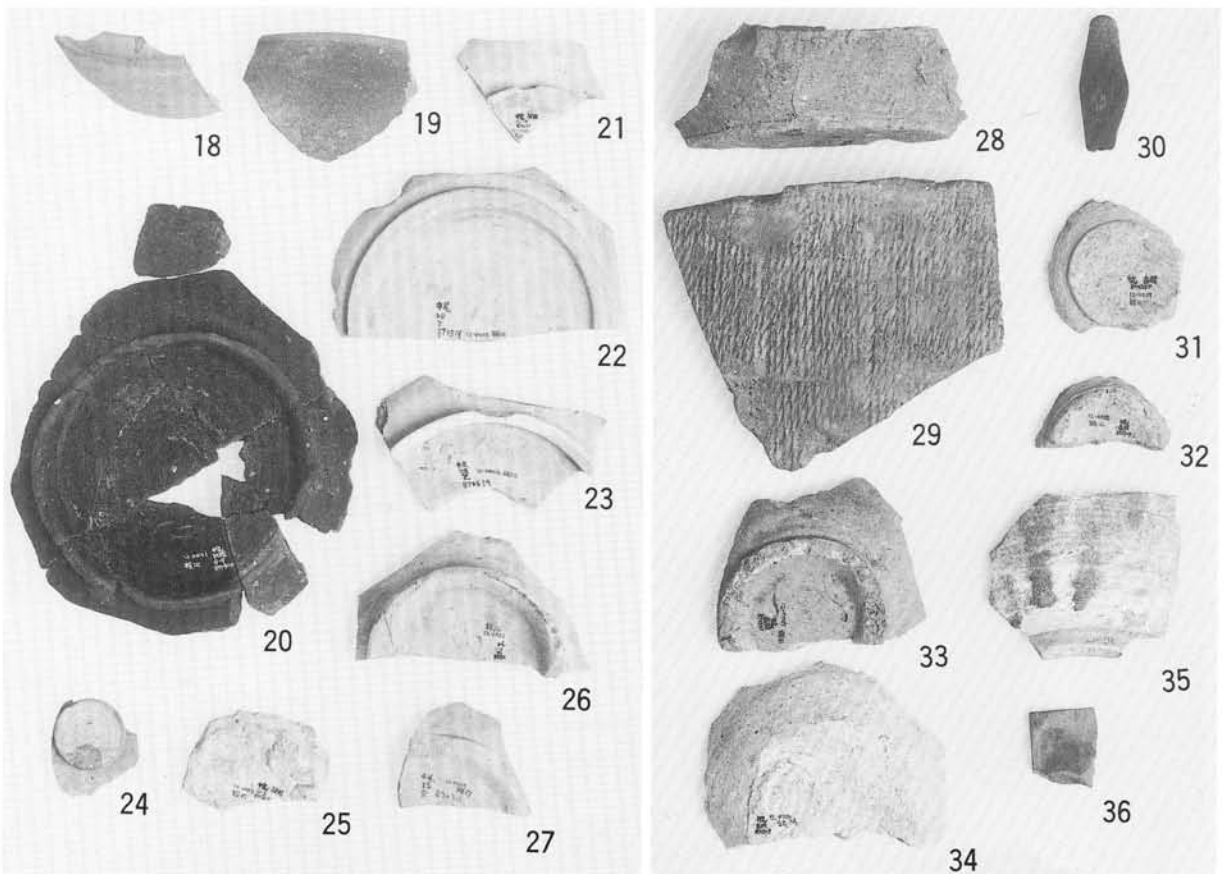
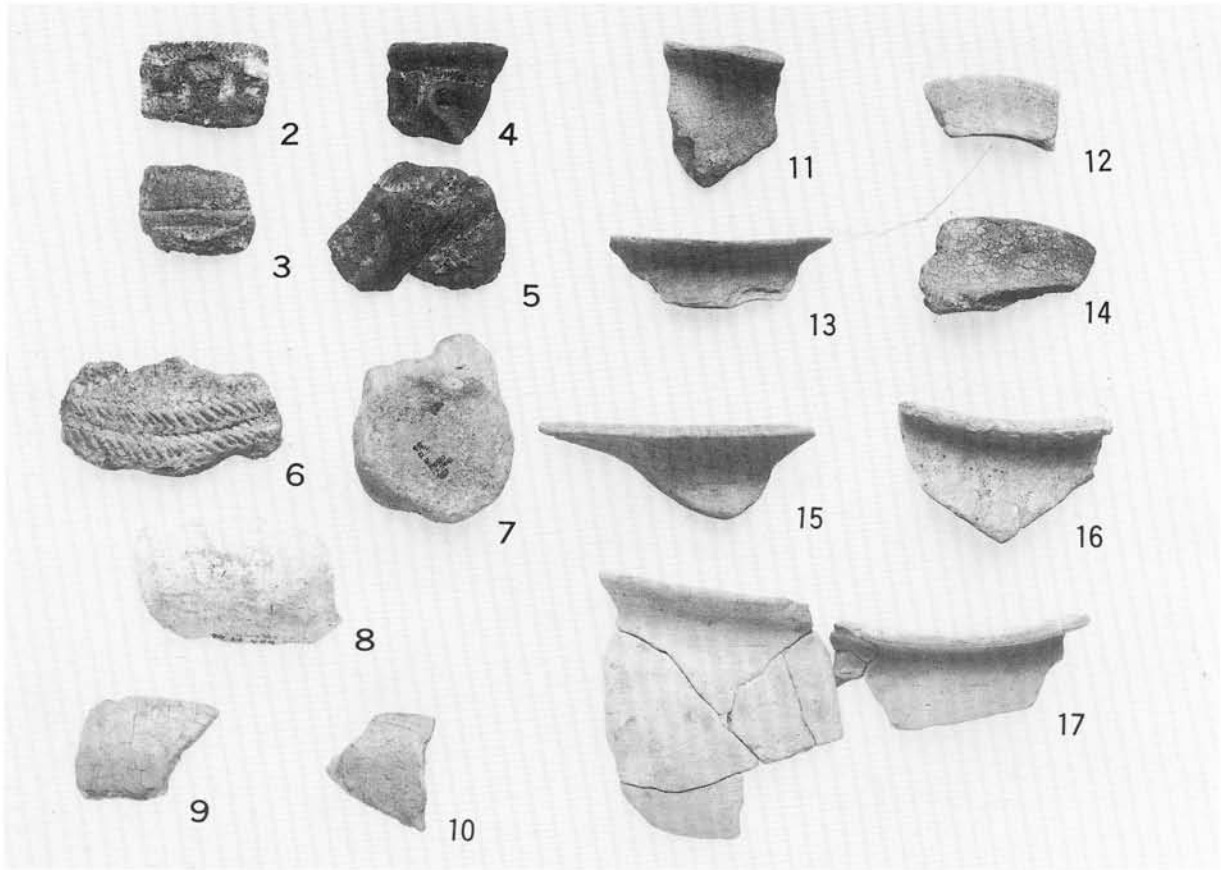
PL 3



SB 2 (南から)



SB 3 (南から)



出土遺物 (1 : 3)

1. はじめに

今回の発掘調査は、近畿自動車道本線およびパーキングエリアが建設されるため実施されたものであり、調査期間は、山林伐開と古墳分布範囲確認を兼ねた調査が昭和61（1986）年12月15日から翌年の3月30日まで、本調査が昭和62（1987）年5月7日から同年8月12日までである。

既に発表してきた概報・調査ニュース等では当調査区を「女牛谷・ビハノ谷古墳群」という遺跡名で呼んでいたが、後期古墳のみならず、弥生時代後期

末葉の埋葬施設や中世墓と思われる遺構も少なからず検出されているため、遺跡および遺構の名称を改めることにした。新しく遺跡名をつけるにあたっては、調査区内で最も広い面積を占める小字名の「東峡」として「東峡遺跡」とし、古墳時代の遺構に関してはすでに定着している「女牛谷古墳群」という名称を使用することにした。遺構名の改名は各遺構を時期や性格別に整理したうえでを行い、第5表に正式遺構名と旧遺構名とを対照させて掲載した。

本報告での遺構名	概報等で使用の旧名称	時 期	所 在 地	備 考
S X 1	(ビハノ谷支群SX1)	弥生時代後期末葉	一志郡嬉野町薬王寺字東峡	埋葬施設か？
S X 2	(ビハノ谷支群SX2)	〃	一志郡嬉野町薬王寺字東峡	埋葬施設か？
S X 3	(ビハノ谷支群SX3)	〃	一志郡嬉野町薬王寺字東峡	埋葬施設か？
S X 4	(女牛谷4号墳)	〃	一志郡嬉野町薬王寺字東峡・同町下之庄字向山、松阪市小野町字長山	方形台状墓。
S X 5	(副次的埋葬施設)	〃	松阪市小野町字長山	SX4に伴う？
S X 6	(副次的埋葬施設)	〃	松阪市小野町字長山	SX4に伴う？
S X 7	(副次的埋葬施設)	〃	松阪市小野町字長山	SX4に伴う？
S X 8	(戸 峡 1 号 墳)	〃	一志郡嬉野町薬王寺字東峡・同町下之庄字向山	方形台状墓。
S X 9	(戸 峡 3 号 墳)	〃	一志郡嬉野町薬王寺字東峡	土塚墓。
女牛谷1号墳	(女牛谷1号墳)	古墳時代後期	一志郡嬉野町下之庄字向山、松阪市小野町字女牛谷	調査区外のため未発掘。
女牛谷2号墳	(女牛谷2号墳)	〃	一志郡嬉野町下之庄字向山、松阪市小野町字女牛谷	調査区外のため未発掘。
女牛谷3号墳	(女牛谷3号墳)	〃	松阪市小野町字長山	調査区外のため未発掘。
女牛谷4号墳	(戸 峡 2 号 墳)	〃	一志郡嬉野町薬王寺字東峡・同町下之庄字向山、	主体部は検出されず。
女牛谷5号墳	(女牛谷5号墳)	〃	一志郡嬉野町薬王寺字東峡、松阪市小野町字長山	主体部は検出されず。
女牛谷6号墳	(女牛谷6号墳)	〃	一志郡嬉野町薬王寺字東峡、松阪市小野町字長山	主体部は検出されず。
女牛谷7号墳	(女牛谷7号墳)	〃	松阪市小野町字長山	木棺直葬の小円墳。
女牛谷8号墳	(女牛谷8号墳)	〃	一志郡嬉野町薬王寺字東峡・同町下之庄字向山、松阪市小野町字長山	主体部は検出されず。
女牛谷9号墳	(戸 峡 4 号 墳)	〃	一志郡嬉野町薬王寺字東峡・同町下之庄字向山、	主体部は検出されず。
女牛谷10号墳	(ビハノ谷1号墳)	〃	一志郡嬉野町薬王寺字東峡・字ビハノ谷	主体部は検出されず。
S X 10	(副次的埋葬施設)	〃	松阪市小野町字長山	7号墳に関係。
S X 11	(中世墓の痕跡？)	時期不明	松阪市小野町字長山	方形の石組み遺構。
S X 12	(中世墓の痕跡？)	〃	松阪市小野町字長山	方形の石組み遺構。
S D 13	(堀切状遺構)	〃	一志郡嬉野町薬王寺字東峡、松阪市小野町字長山	SX4に関係？
S R 14	(道路状遺構)	〃	松阪市小野町字長山	墓道か？
S R 15	(道路状遺構)	〃	松阪市小野町字長山	墓道か？

第5表 東峡遺跡・女牛谷古墳群の遺構一覧

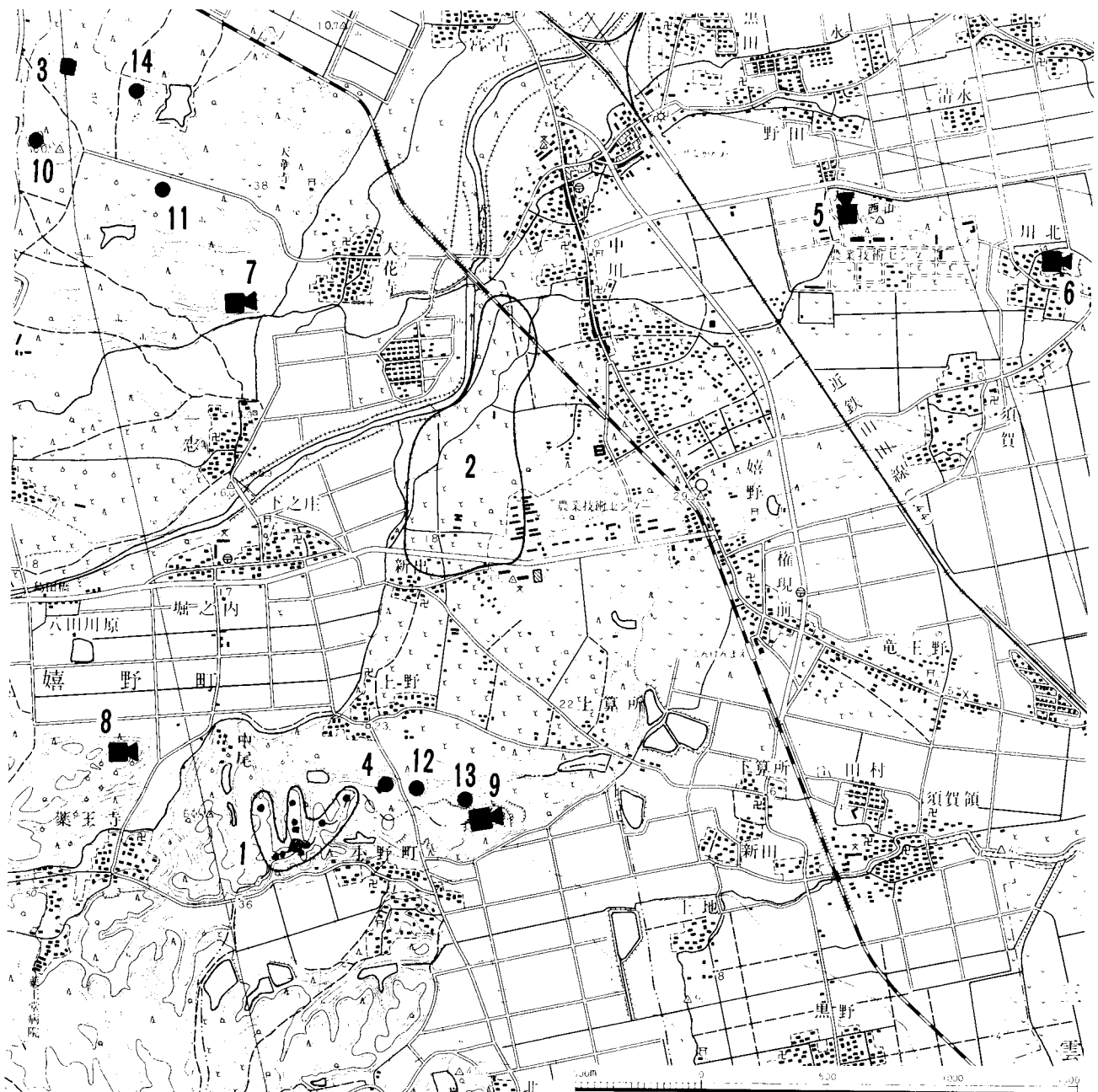
2. 位置と歴史的環境

三重県と奈良県との県境にある三峰山（標高1235 m）の山頂付近に源を發する一級河川雲出川は、伊勢国のほぼ中央を西から東へと横断し、伊勢湾に注ぐ。雲出川の支流である二級河川中村川は、一志郡嬉野町の南端にある高須ノ峰（標高798 m）に源を發し、嬉野町内を北東方向に流れて雲出川河口から約6 kmの所で雲出川と合流する。東峡遺跡・女牛谷古墳群は、この雲出川と中村川とが合流する地域

一帯を北に見下ろす丘陵尾根上に所在する。

雲出川下流から中村川地域にかけては、弥生時代・古墳時代において、県内で最も先進的な地域の一つであったと考えられている。

東峡遺跡（1）から東方へ約4 kmにある一志郡三雲町中ノ庄遺跡^①は県下最古の弥生遺跡であり、東峡遺跡から北方へ約1.5 kmにある嬉野町下之庄東方遺跡^②（2）とさらに北方へ約2.5 kmにある一志郡一



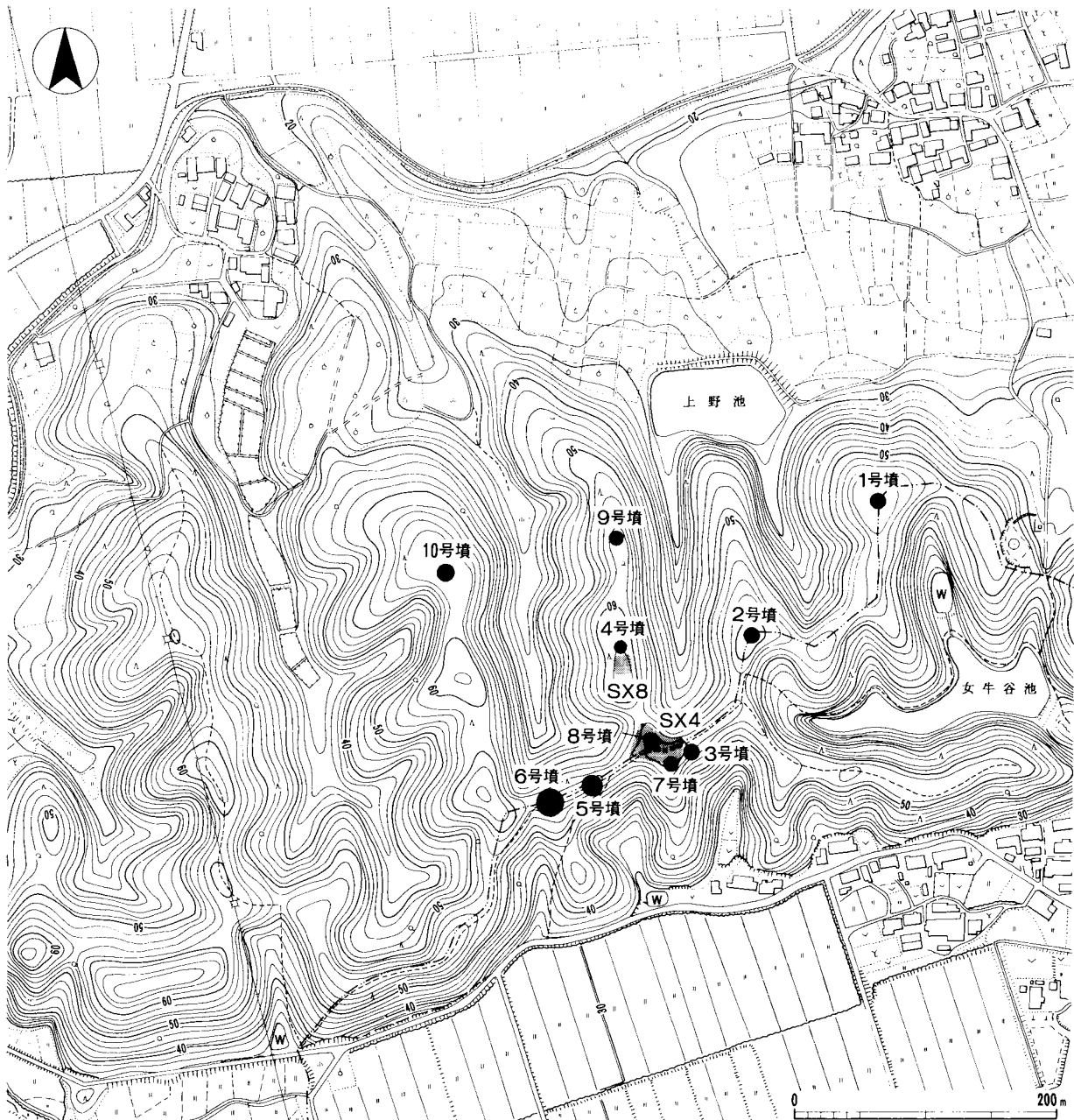
第23図 周囲の主な関連遺跡位置図（1：25,000）

志町片野遺跡^③からは、県下最古とされる弥生時代中期前葉の方形周溝墓が検出されている。下之庄東方遺跡では弥生時代後期後葉とされる方形周溝墓も検出されている。

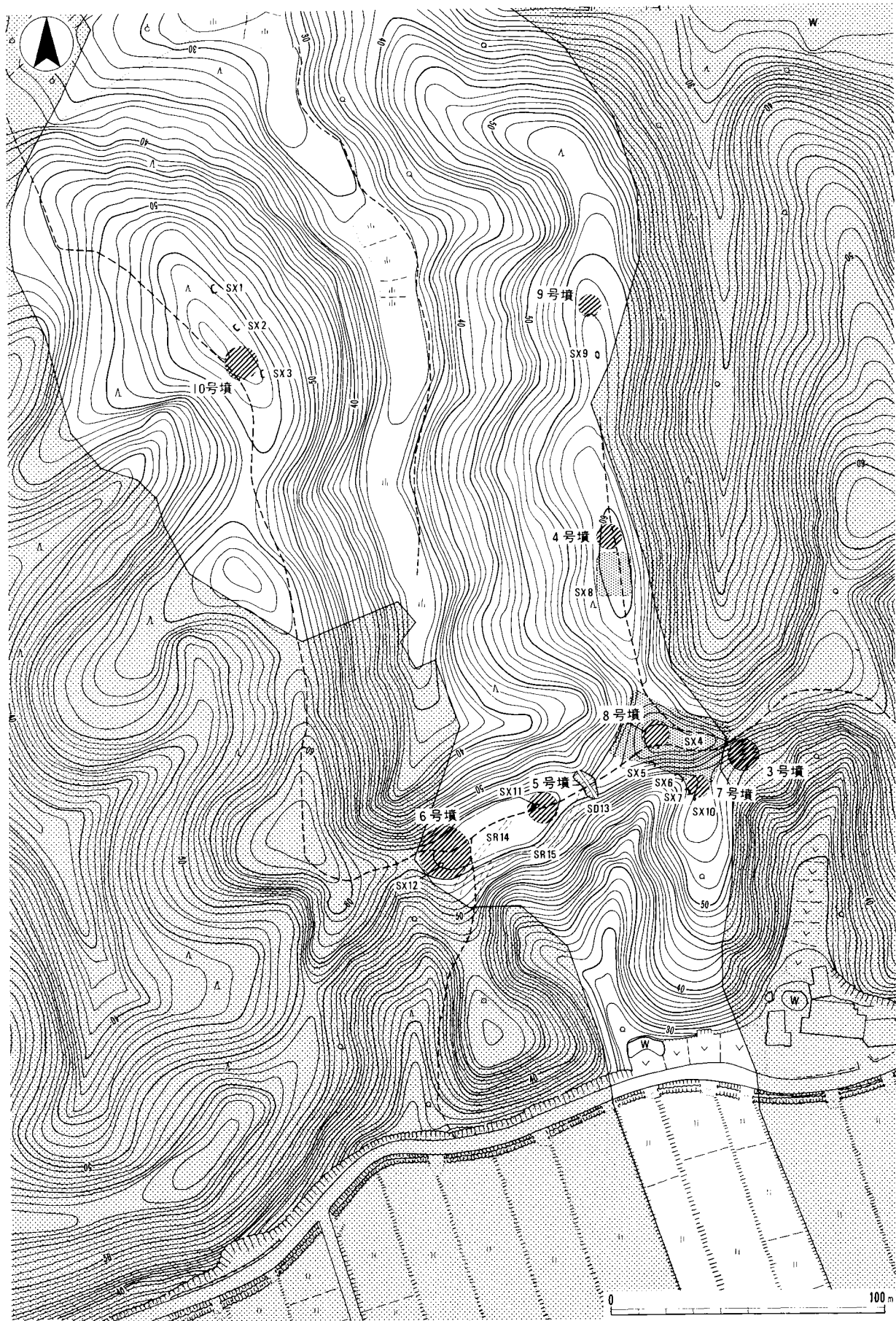
嬉野町の西野4号墓(3)と上野1号墳(4)は、東峡遺跡のSX4・SX8などとほぼ同時期の弥生時代後期後葉から古墳時代初頭のものと考えられている^④。西野4号墓は、その墳丘上に横穴式石室を主体部とする後期古墳が築かれているため不明な点が多いが、方形台状墓である可能性が高い。上野1号墳は、径18mの円墳状の墳丘と一箇所に陸橋がある

周溝をもつものである。

古墳時代前期後半になると、突如として前方後方墳が集中的に築かれるようになり、全国的にも特徴的な地域として知られている。現在確認されている前方後方墳は、嬉野町の西山1号墳(全長43.6m)(5)、庵ノ門1号墳(全長37m)(6)、筒野1号墳(全長39.5m)(7)、鏑山古墳(全長47m)(8)、嬉野町と松阪市との境にある向山古墳(全長71.4m)(9)の5基である^⑤。これらの古墳の他に、西野7号墳(径約15m)(10)、高取塚古墳(規模不明)(11)などの前期の円墳もみられる。また、向山古墳の近



第24図 遺跡地形図(1:5,000)



第25図 自動車道路線範囲と遺構配置 (1 : 2,000)

くにある原田山A-1号墳(径40m)(12)、原田山B-1号墳(径42m)(13)の2基の円墳も前期のものと考えられている^⑧。

中期前半には、女牛谷古墳群の南東方向にある松阪市の坂内川流域に、伊勢国で最大規模の前方後円墳である宝塚1号墳(全長95m)が築かれる。一方、前期後半に他の地域にみられない程多数の古墳が築かれた雲出川下流域から中村川流域にかけては、中期になると数が激減し、主な古墳としては中型の円墳である一志町片野池2号墳(径32m)(14)があ

られるのみとなる。この現象は、宝塚1号墳を築いた勢力がこの地域に強い影響力を及ぼすようになった結果と考えられている^⑨。中期後半になっても中期前半と同じ様な傾向がみられる。

後期には、女牛谷古墳群を挟んで、北側の中村川左岸では5世紀末頃から、南側の松阪市北西部の丘陵地帯では6世紀初め頃からの早い時期に横穴式石室を主体部とする小規模な円墳が築かれるようになる。その後、女牛谷古墳群周囲の後期古墳は群集形態をとって7世紀中頃まで築かれている。

4. 調査区の概要

調査区は標高50~60mの丘陵上にある。調査区内の尾根筋はコの字状に走り、その尾根上に遺構が点在している。土砂の流出が激しく、薄い腐植土の直下が岩である所がほとんどで、検出された遺構や出土した遺物の残りは非常に悪い。

検出された主な遺構には、弥生時代後期末葉のものと思われる埋葬施設3基(SX4・8・9)、同時期の埋葬施設の可能性が考えられる土坑6基(S

X1~3・5~7)、後期古墳7基(女牛谷4~10号墳)、7号墳に伴うと考えられる土坑1基(SX10)、中世墓の可能性が考えられる石組み遺構2基(SX11・12)、堀切状の遺構1条(SD13)、道路状の遺構2条(SR14・15)がある。遺物は、弥生時代後期末葉頃の土器を中心に整理箱で約20箱程度出土したが、そのほとんどは細片で、実測が不可能なものが多い。

5. 弥生時代後期末葉の遺構と遺物

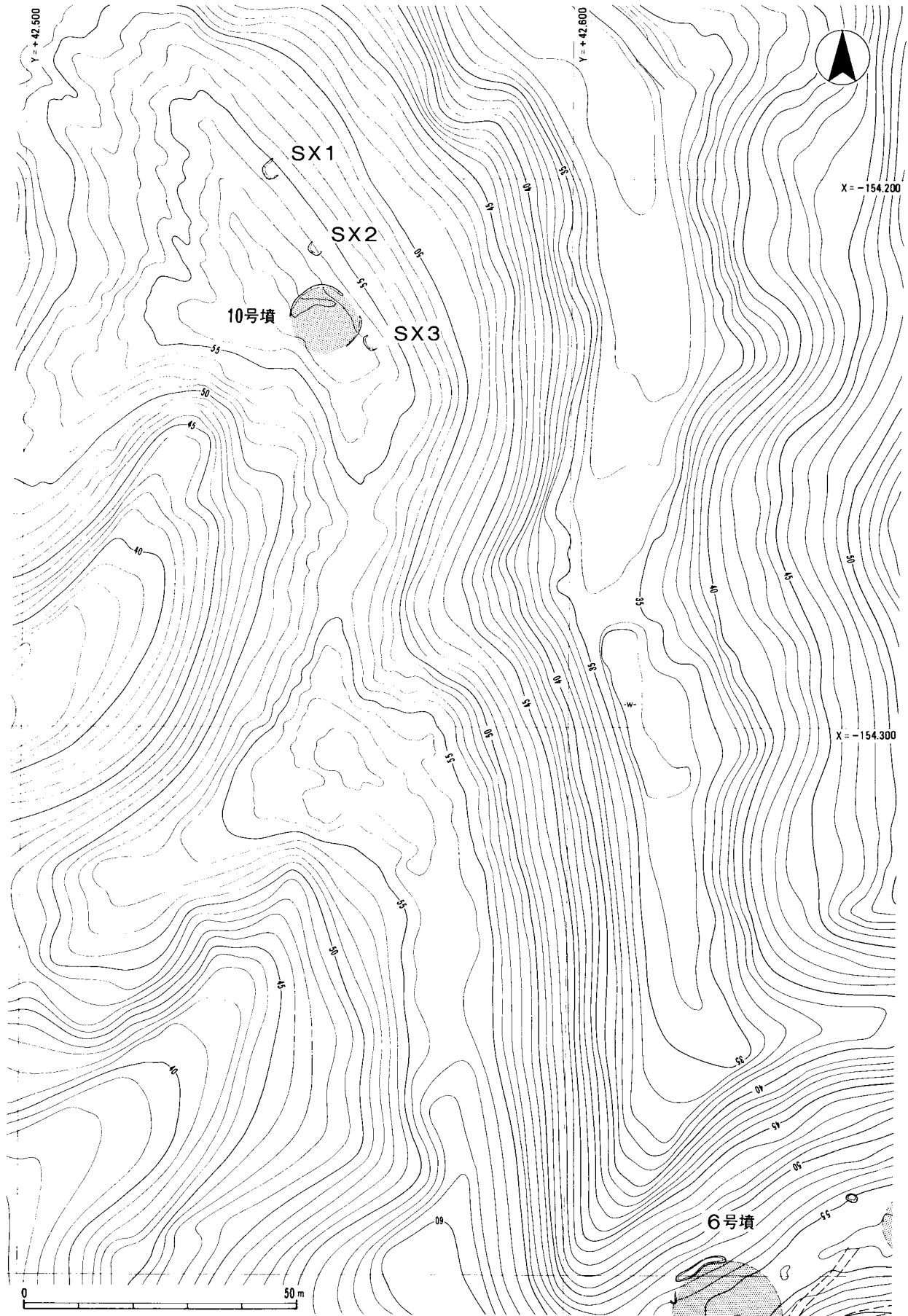
SX1 調査区内には南北に走る細い2本の尾根が谷を挟んで東側と西側にはほぼ並行してある。西側の尾根(概報でビハノ谷と呼んだ尾根筋)の西斜面はすでに地山の岩が露出しており、遺構は全く検出されなかったが、東斜面では平面が方形のテラス状の遺構がほぼ一列に並ぶようにして3基検出された。SX1はこの3基の遺構の中で最も北側に位置する。床面で測った規模は、等高線に沿った方向で2.5~2.0m、等高線に直交する方向では2.5~1.8mで、床面は斜面に沿って傾斜をもっている。深さは斜面上部の残りの良い所でも5cmほどである。遺構の谷方向の端部ははっきりしなかった。遺物は欠山式の高杯(1~3)、最も古いタイプのS字状口縁台付甕(4・5)が細かく割れた状態で出土した。

SX2 SX1の南東約16mに位置する。形態はSX1に類似しており、床面で測った規模は、等高線に沿った方向で2.0~1.8m、等高線に直交する方

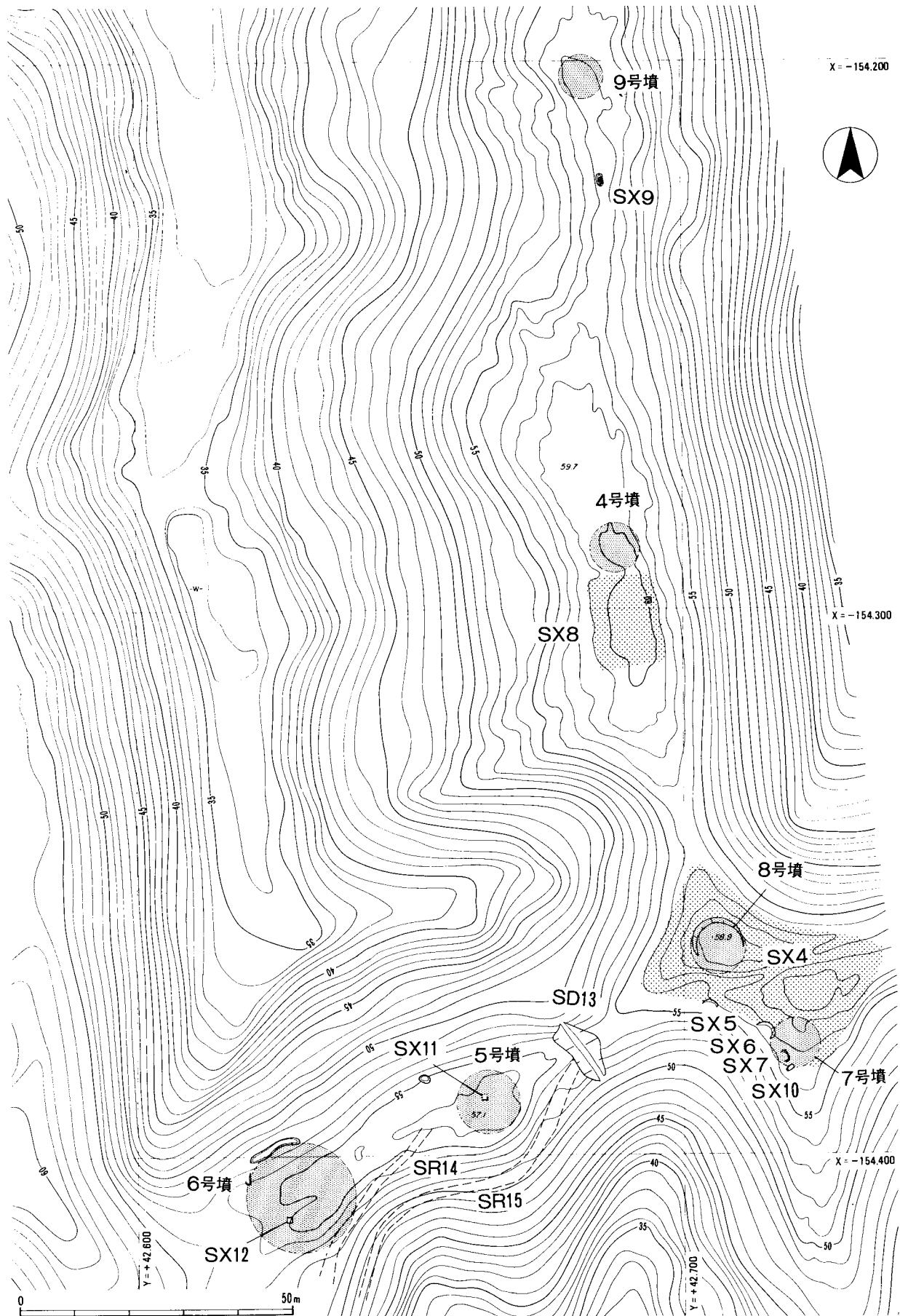
向では1.5~1.1mである。床面には、さらに10cmほど掘り込んだ長径1.7m、短径1.2mの楕円形の窪みがある。この楕円形の窪みの床面から、台付の瓢壺(6)、広口壺(7・8)、台付甕(9~14)などが破片となって出土した。台付甕のうち12以外は古いタイプのS字状口縁台付甕である。

SX3 SX2の南東約20mに位置する。形態はSX2に類似しており、床面で測った規模は、等高線に沿った方向で3.1~2.5m、等高線に直交する方向では、1.3mほどである。床面は平坦でSX2のような窪みは認められなかった。埋土から壺の口頸部片(15)が出土した。

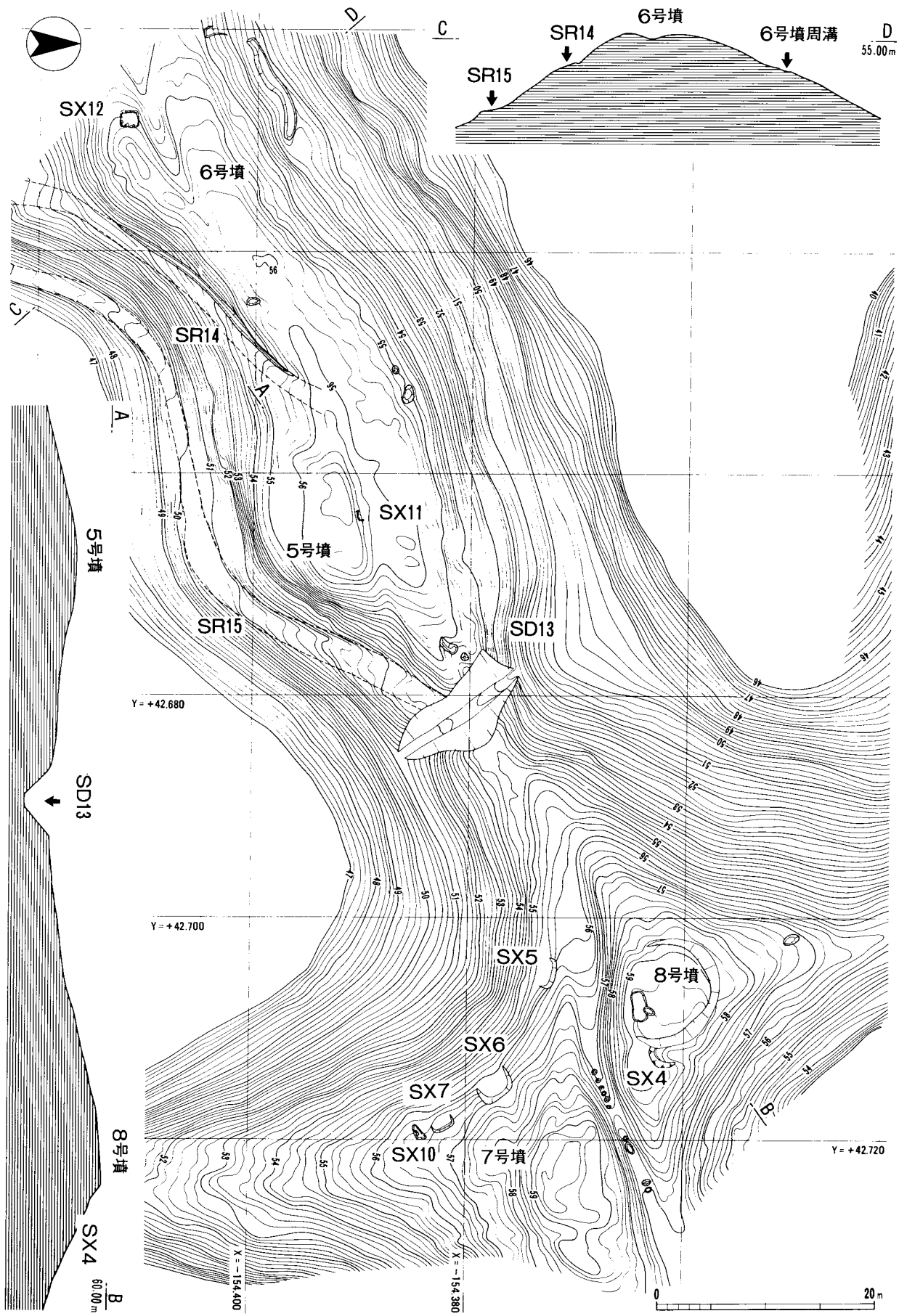
SX4 調査区の南端にある東西に細長くのびた尾根(概報で女牛谷と呼んだ尾根筋)から調査区東側の南北にのびる尾根(概報で戸峡と呼んだ尾根筋)が派生する基部に位置する。SX4は台状墓と考えられるが、土砂の流出が著しいうえに、墳丘と想定



第26図 調査区西尾根遺構配置図 (1 : 1,000)

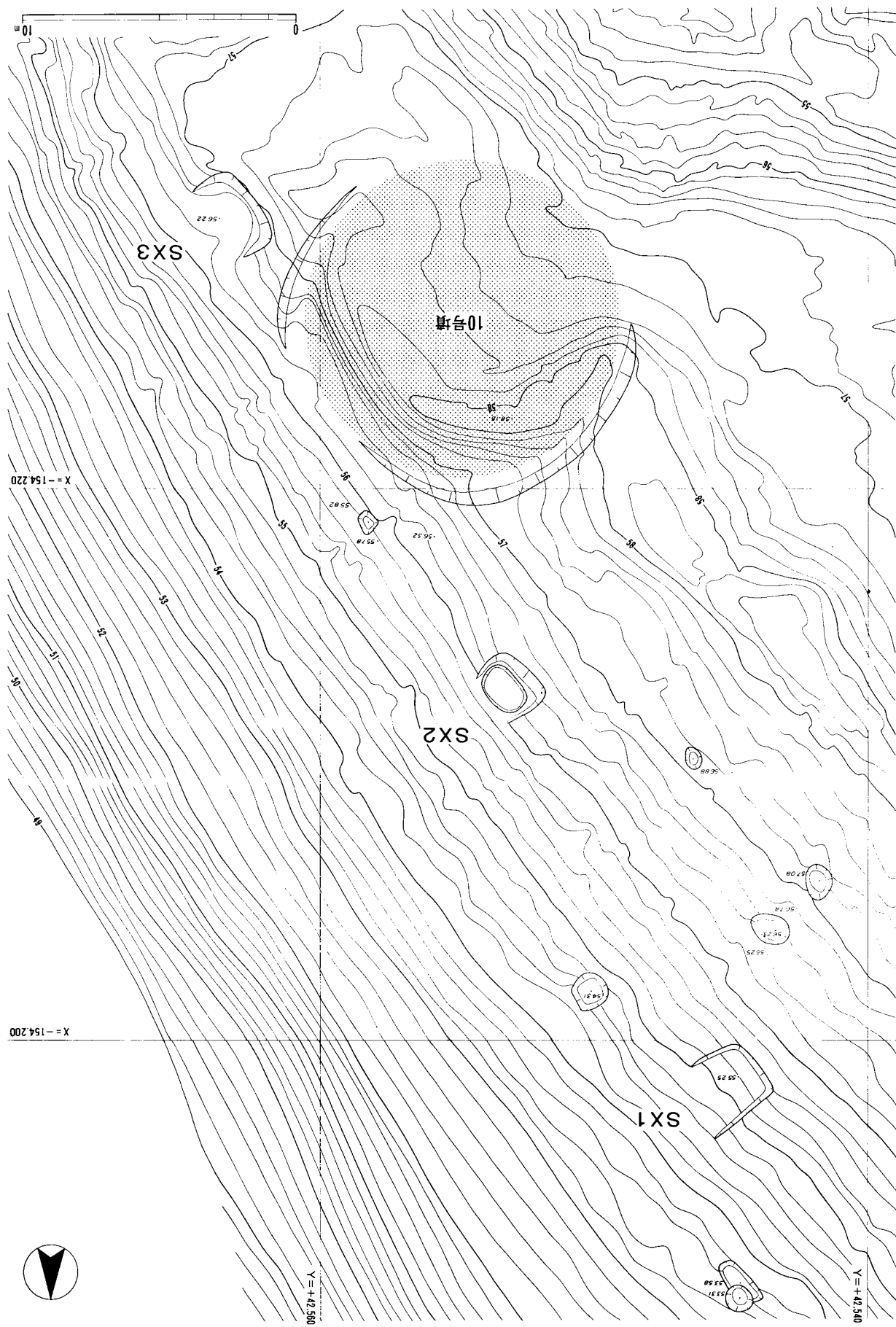


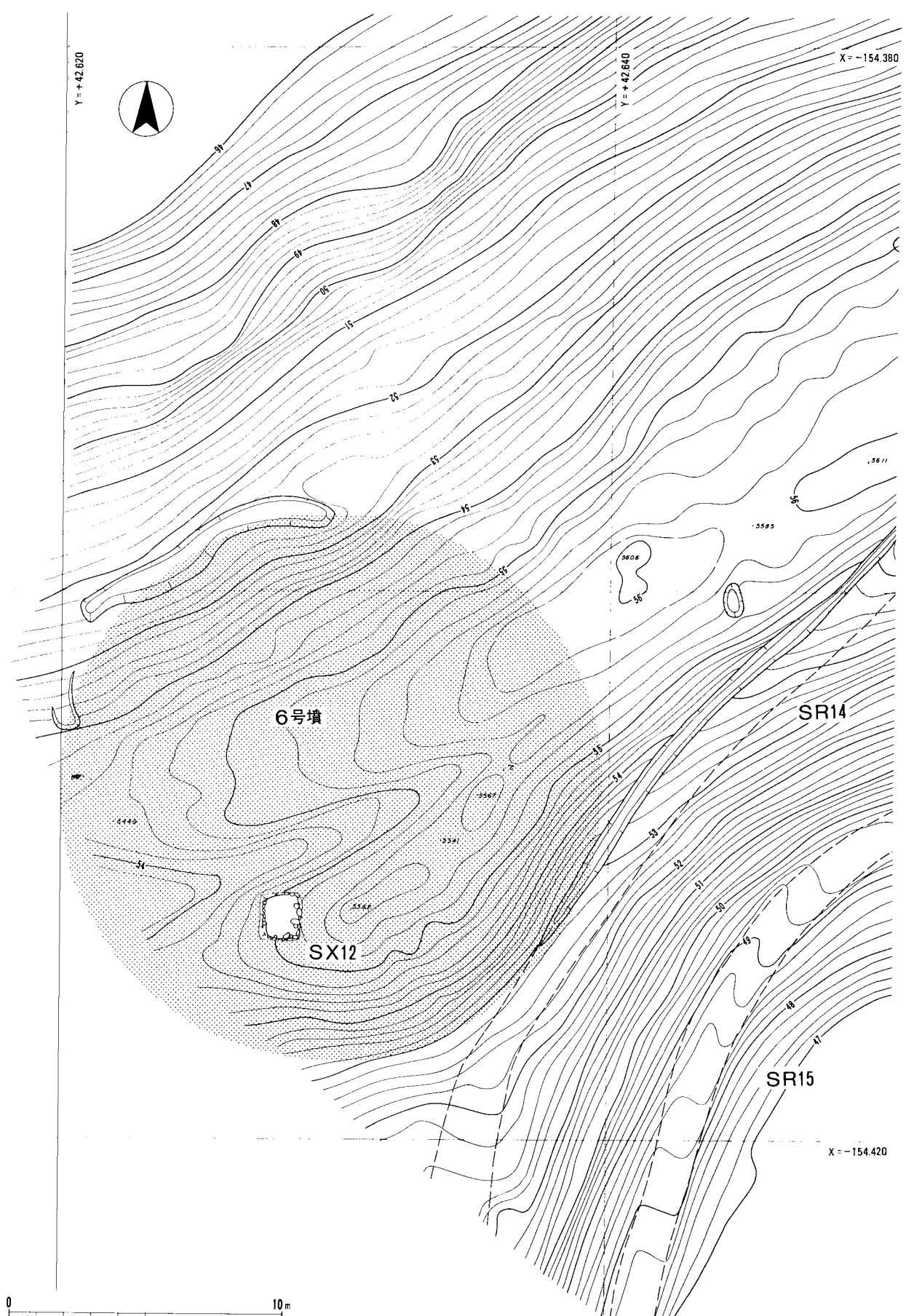
第27図 調査区東尾根・南尾根遺構配置図 (1 : 1,000)



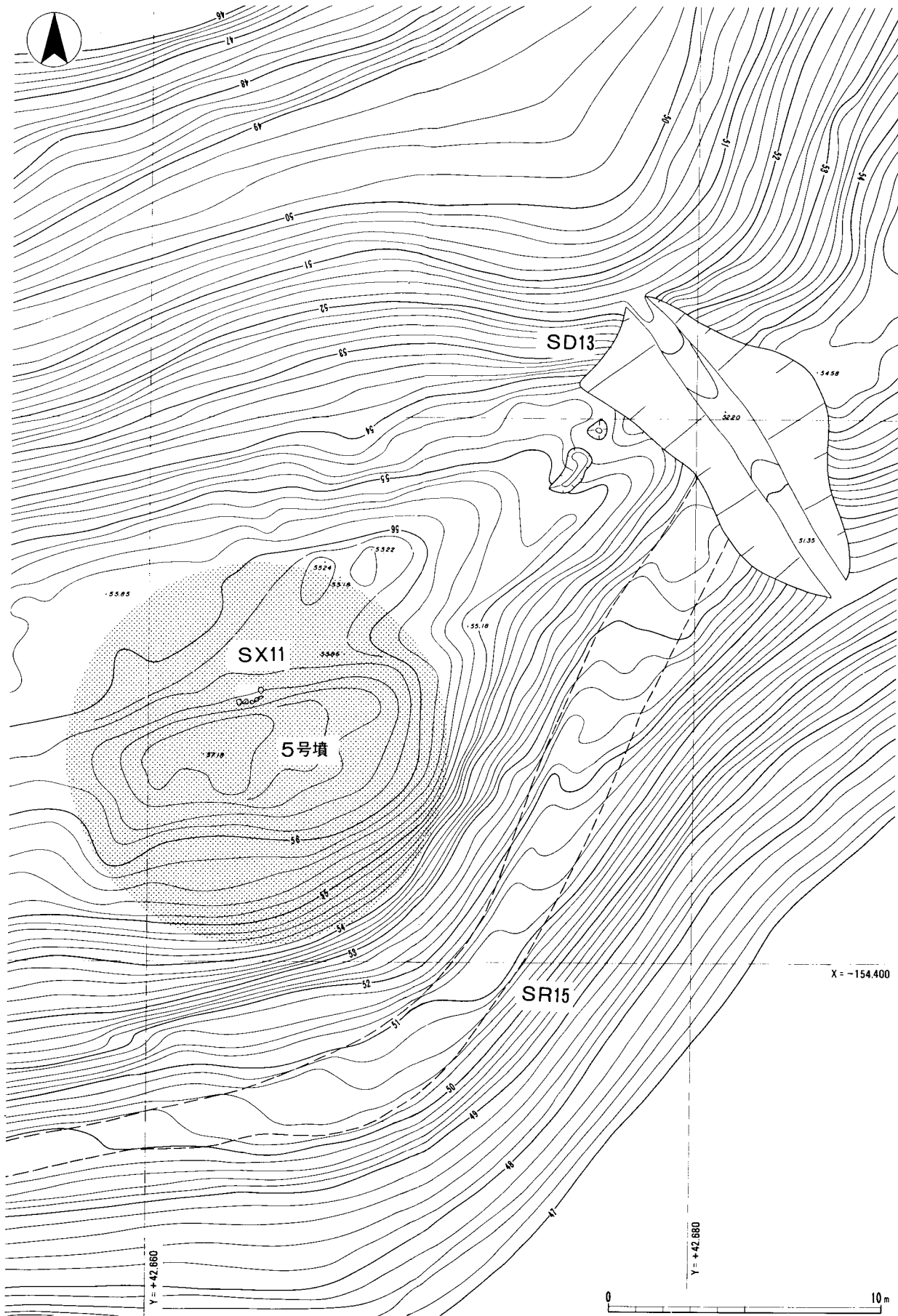
第28図 調査区南尾根遺構配置図 (1:500)

第29图 SX1~SX3·10号填湖基图(1:200)

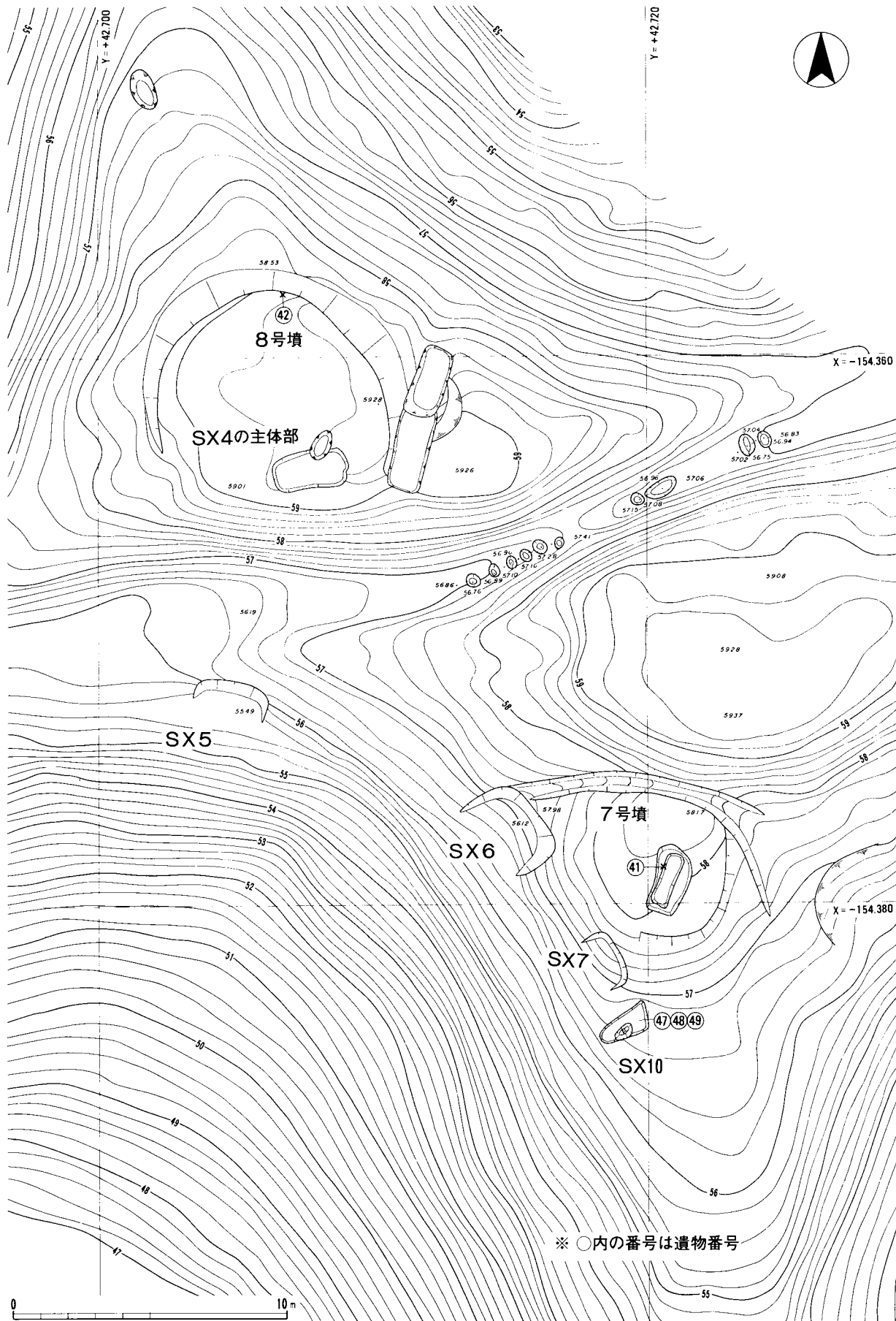




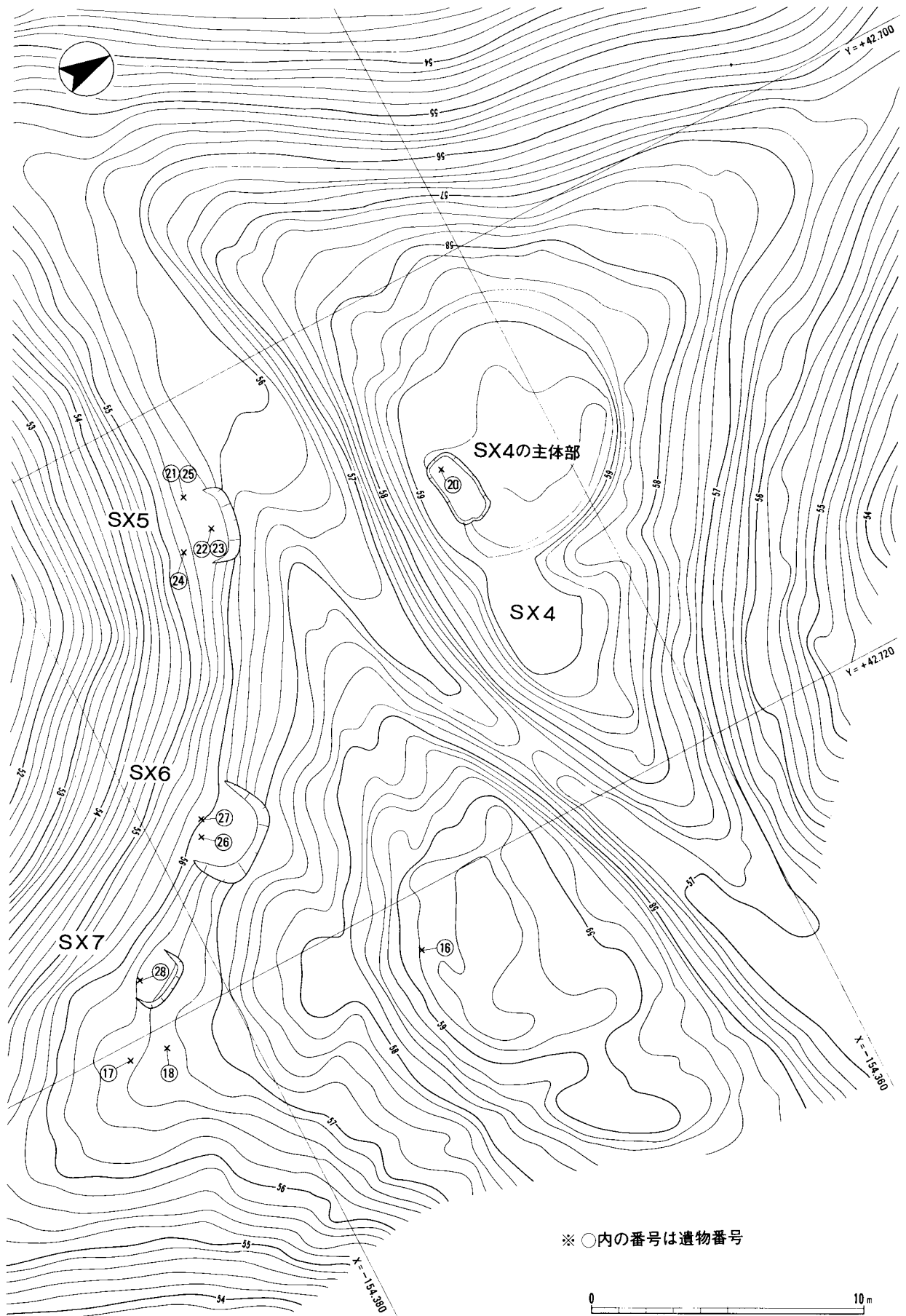
第30図 S X12・S R14・S R15・6号墳測量図 (1 : 200)



第31图 SX11·SD13·SR15·5号墳測量图 (1:200)



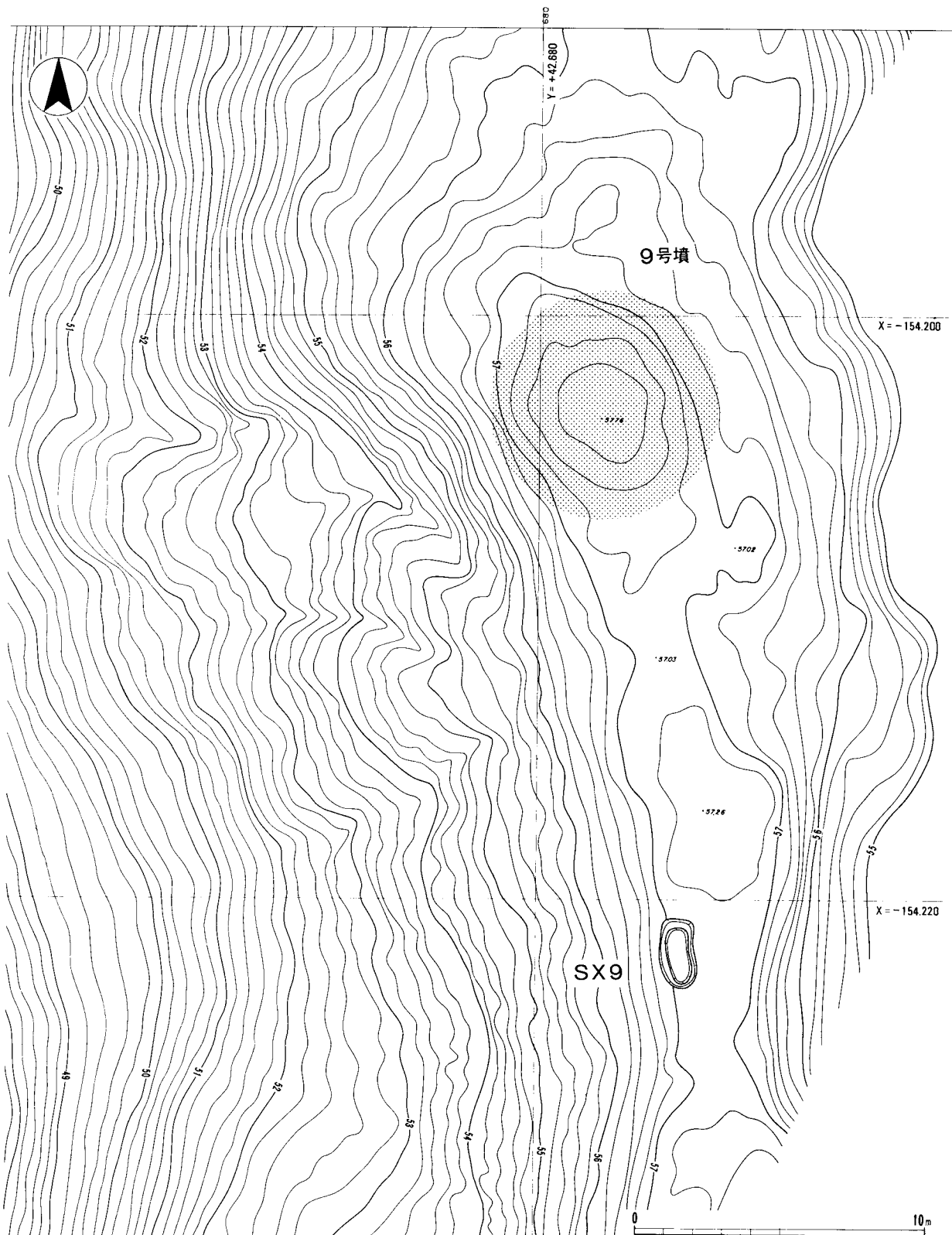
第32図 7号墳・8号墳・SX10測量図 (1:200)



第33図 SX4～SX7測量図(1:200)



第34图 SX8 · 4号墳測量图 (1 : 200)



第35図 SX9・9号墳測量図(1:200)

する範囲には地山を深く掘り込んでつくられた林道が走り、後期古墳も2基築かれており、その形態や範囲は判然としない。ただ、南・西・北部で墳丘のコーナーらしき地形が認められることから、長方形・前方後方形の可能性が考えられる。あるいは、方形

の台状墓が林道付近を境に2基並立していたのかもしれない。規模は、墳形を長方形とすれば、長軸約40m、短軸約25mとなる。人工的な盛土は調査時には明確には認められなかった。主体部の墓塚は後期古墳である8号墳の墳丘範囲内に位置する部分で検

出された。墓塚の平面形は隅丸の方形で、長軸2.7m、短軸1.3m、深さ約5cm、長軸方向はN 80° Eである。遺存状態は極めて悪く、木棺の痕跡等は認められなかった。また、8号墳の東裾部分で南北に長い平面長方形の土坑が検出されたが、極めて浅く、出土遺物も全くみられなかったため、攪乱によるものと判断した。遺物は、墓塚内から鉢(20)、墳頂部から器壁の薄い小型の壺(16)が、土砂とともに流出して墳丘裾部に溜まったような状態で壺(17)、高杯(18)、台付小型甕(19)、古いタイプのS字状口縁台付甕片などが出土した。なお、SX4の南西裾を画するかのような位置で、SX5・SX6・SX7の3基の遺構が検出された。これらの遺構はSX4に付属するものと思われる。

SX5 SX5～SX7の3基は、SX1～SX3と類似した形態のテラス状の遺構である。これらの遺構出土とした土器の中にはSX4の墳丘から土砂とともに流入した可能性が考えられるものもある。SX5は3基の遺構の中で最も北側に位置している。床面で測った規模は等高線に沿った方向で2.6～2.2m、等高線に直交する方向では1.0m程度である。出土遺物には甕(21)・鉢(22・23)、壺(24・25)がある。23は床面に密着して出土した。

SX6 SX5の東南東約10mに位置する。床面

で測った規模は、等高線に沿った方向で3.0～2.2m、等高線に直交する方向では1.5m程度である。出土遺物には台付甕の台部(26・27)がある。

SX7 SX6の南東約5mに位置する。床面で測った規模は、等高線に沿った方向で2.0～1.5m、等高線に直交する方向では1.0m程度である。出土遺物は壺の体部(28)のみである。

SX8 調査区の東側にある南北に細長くのびた尾根(概報で戸峽と呼んだ尾根筋)にあり、SX4から北へ約50mに位置する。腐植土を除去するとすぐに地山の岩が現れるという状況で、遺構の形態や性格は不明瞭であったが、尾根を横断するように走る2本の溝状の窪みで区画された方形台状墓と判断した。墳丘の規模は南北15～17m、東西12m程度で、主体部は検出されなかった。東側の谷への流出土から高杯の脚部片(29・30)、鉢底部片(31)、広口壺口頸部(32)などの破片が出土した。

SX9 SX8から尾根づたいに北へ約70m行った所で、埋土に木炭が多量に混じった楕円形の浅い土坑が検出された。規模は長軸2.3m、短軸1.2m、深さ約10cm、長軸方向N 0° Eで、墓塚と思われる。遺物は、棺痕跡と思われる範囲内から、高杯脚部(33)、小型の壺(34)、広口壺口頸部(35)などが出土した。

6. 古墳時代後期の遺構と遺物

女牛谷古墳は10基の後期古墳で構成されており、発掘調査が実施されたのは4号墳～10号墳の7基である。1号墳～3号墳については『松阪市史』に記載されているので、その記述を転載して紹介する。

1号墳 「南北径12.5m、東西10m。現高は、墳丘西裾で1m、北裾で1.5m。南、西、北の三方にかけては墳丘は認められるが、東側は崖状を呈している。また、墳頂部は円形状に掘られた形跡があって、大きく荒らされている。」

2号墳 「1号墳の南西約140mの尾根頂部にあって、墳丘南側は不明確。N 50° Wの径12m、高さ北裾で2m、西裾で1.5mを測る。墳頂部は深くN 30° W方向に掘られている。」

3号墳 「2号墳より西南100m、尾根頂部よりや

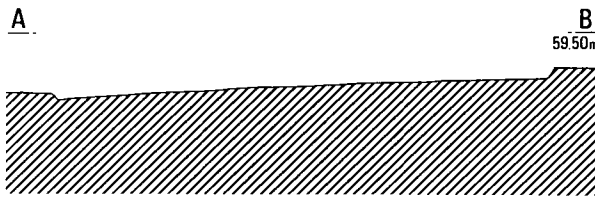
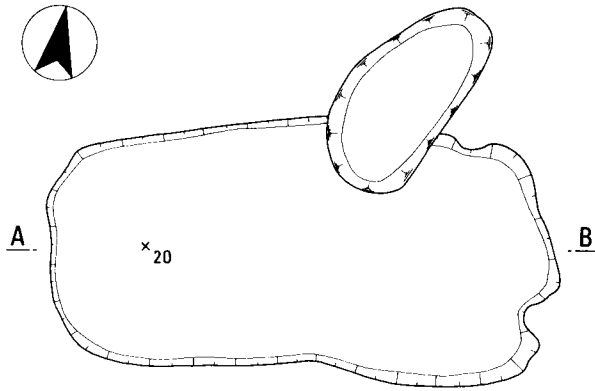
や東へ下った地点にあり、3基の中でもっとも墳丘が明確な古墳である。規模は直径11m、高さ約2m。墳丘基底線が北から南へわずかに傾斜し、墳頂部には浅く掘られた形跡がある。」

4号墳 SX8のすぐ北側に径9m、高さ0.8mほどの古墳状の高まりがみられる。出土遺物はなく、盛土も認められないが、円墳の痕跡と推定した。

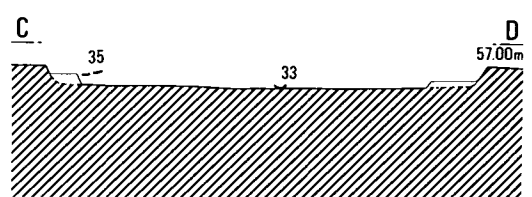
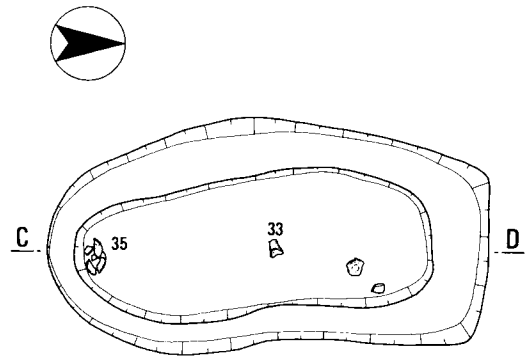
5号墳 SX4の南西約40mの尾根上に位置する。土砂の流出が著しく明瞭な墳丘や主体部は認められないが、墳丘の南裾と想定される位置から耳環(46)が出土したことから、径11～14m程度の円墳であったろうと推定した。なお、墳丘の推定範囲内から土師器甕(39)も出土している。

6号墳 5号墳の西南西約30mの尾根上に位置す

SX4主体部

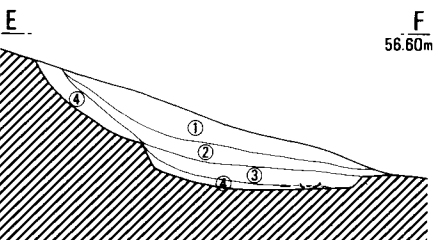
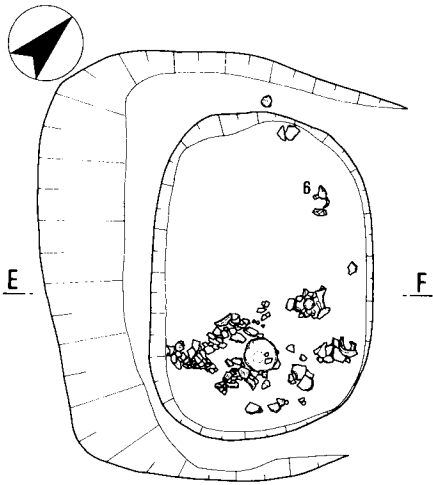


SX9

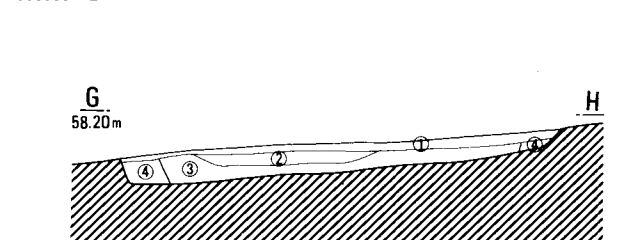
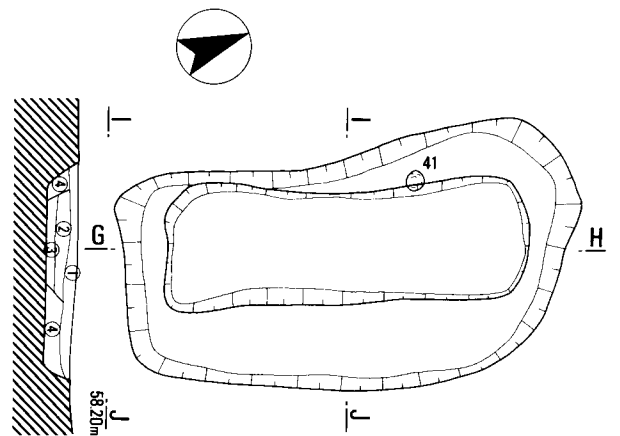


※図中の番号は遺物番号

SX2



7号墳主体部

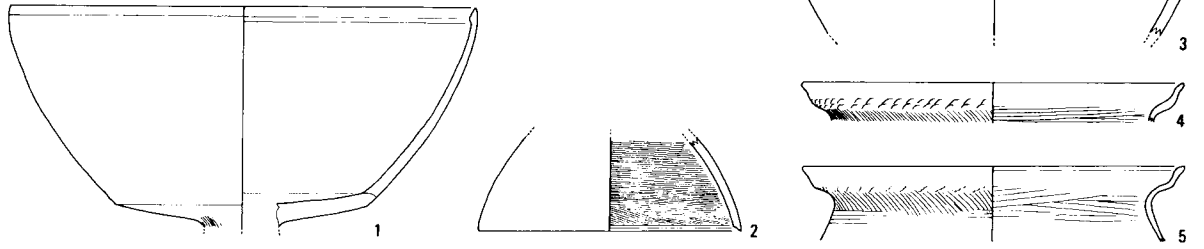


- ① 黒色土混じり淡黒褐色粘質土
- ② 淡黒褐色粘質土
- ③ 炭混じり黒色粘質土
- ④ 黄褐色粘質土

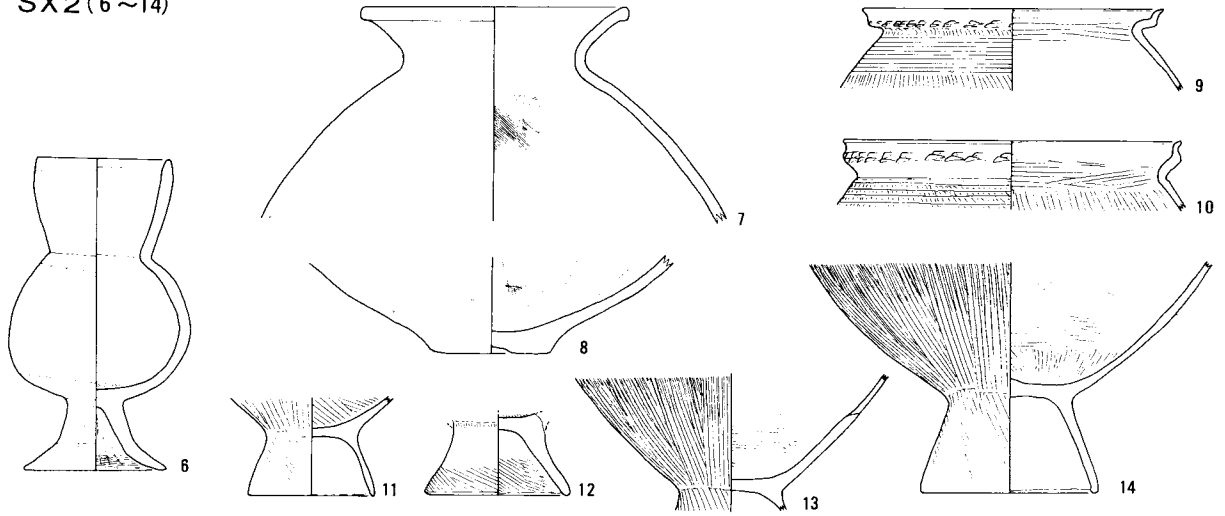
- ① 礫混じりにぶい黄橙色土
 - ② 礫混じり明褐色土
 - ③ 礫混じりにぶい橙色土
 - ④ 礫混じり黄褐色土
- } 木棺部分埋土
- } 墓坡埋土

第36図 SX2・SX9・SX4主体部・7号墳主体部実測図(1:40)

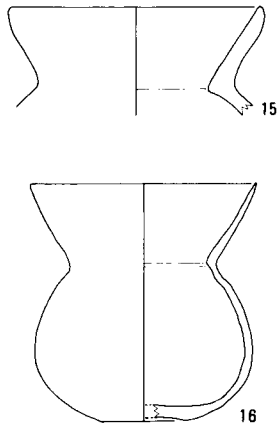
SX1 (1~5)



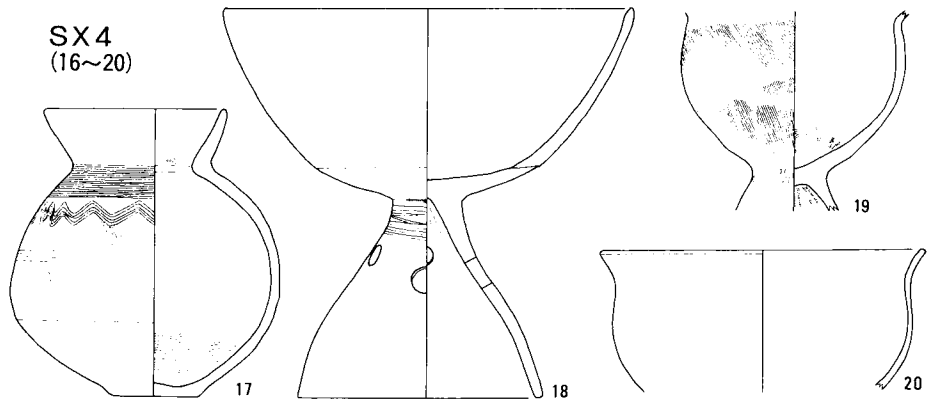
SX2 (6~14)



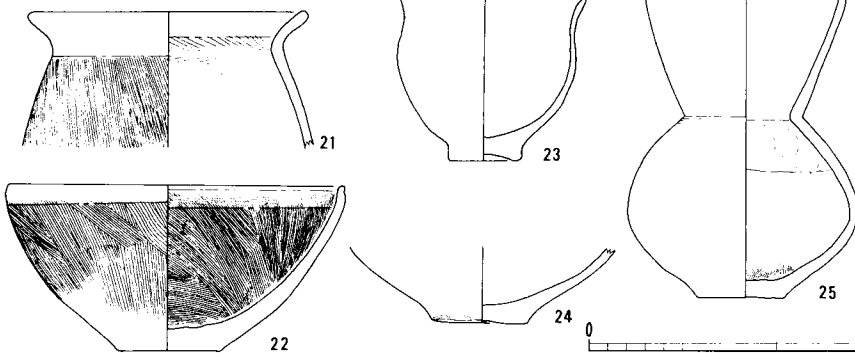
SX3 (15)



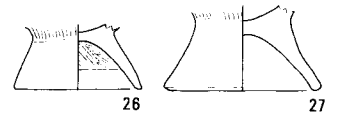
SX4
(16~20)



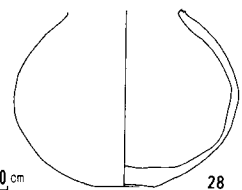
SX5 (21~25)



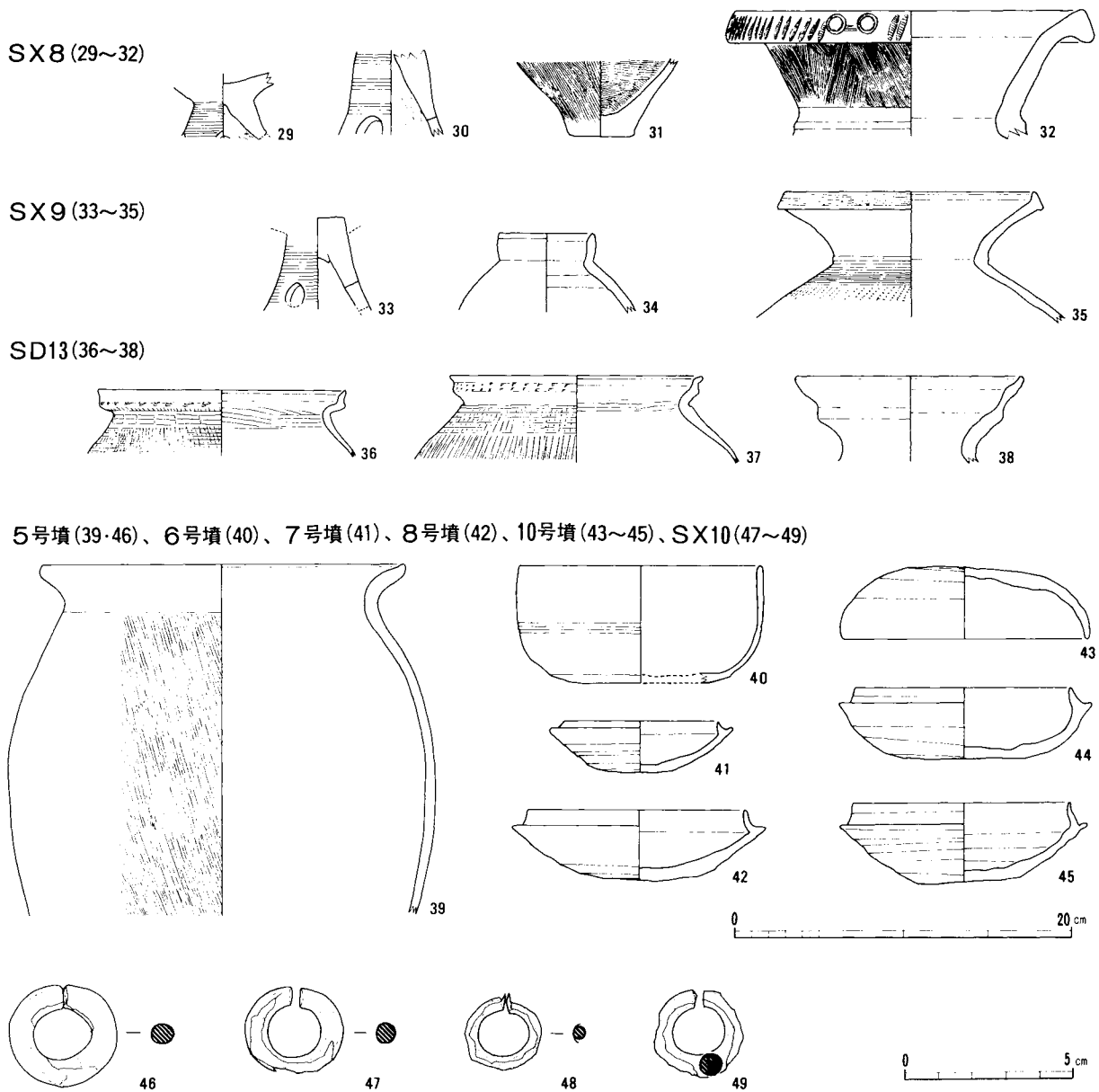
SX6 (26~27)



SX7 (28)



第37图 出土遺物実測図 (1 : 4)



第38図 出土遺物実測図 (29~45 = 1 : 4. 46~49 = 1 : 2)

る。5号墳と同じく明瞭な墳丘や主体部は認められなかったが、尾根の北側斜面に円墳の周溝状の遺構を検出した。これにより墳丘径を復元すると約20mの数値が得られる。墳丘の推定範囲内から須恵器碗(40)が出土している。

7号墳 SX4の墳丘の南隅部分を削り出して築造されている径約9mの円墳である。墳頂部で楕円形の平面形をもつ墓塚が検出された。墓塚の規模は長軸2.4m、短軸1.3m、深さ約15cmで、棺痕跡は長さ1.9m、幅1.6~1.7m、主軸方向N 20° Eである。棺外の墓塚埋土から須恵器杯身(41)が出土した。なお、耳環を出土したSX10は7号墳に関係する遺構と思われる。

8号墳 SX4の墳丘頂部西北部分を削り出して築造されている径約10mの円墳で、明瞭な盛土は残っておらず、主体部も検出されなかった。墳丘の南肩部分で須恵器杯身(42)が出土した。

9号墳 SX9から北へ約15mの尾根上に、径約8m、高さ約1mの地山の高まりが認められ、そのすぐ南側の尾根斜面から宝珠つまみのつく須恵器杯蓋が出土したことから、古墳の痕跡と推定した。

10号墳 SX3のすぐ近くの尾根上に築造されている。主体部をはじめ、墳丘もほとんど残っていなかったが、北側から東側にかけての裾部で周溝が検出されたことから、径約12mの円墳であったことが分かる。北東裾部で須恵器杯蓋(43)・杯身(44)

遺物番号	出土位置	器形	計測値 (cm)	調整・技法の特徴	色調・胎土	残存度	備考	整理番号
1	SX1	弥生土器 高杯	口径：25前後	内外面縦方向ヘラミガキか。口縁端部ヨコナデ。杯底部外面にハケ目残る。	赤褐色 砂粒含	口縁：1/8	2と同一個体か。	13-0001
2	SX1	弥生土器 高杯	裾径：14.0?	外面ヘラミガキか。内面細かいハケ目残る。裾端部ナデか。	赤褐色 砂粒含	裾部：1/6	1と同一個体か。	13-0002
3	SX1 明黄褐色土	弥生土器 高杯	口径：21.6?	内外面ヘラミガキか。	橙褐色 砂粒含	口縁：1/4	表面剝離進む。	13-0003
4	SX1	弥生土器 甕	口径：20前後	口縁部内外面ヨコナデのち外面に押し刺突文。頸部内外面粗いハケ目。	淡黄灰色 砂粒多含	口縁：1/4		13-0004
5	SX1	弥生土器 甕	口径：20.4?	口縁部内外面ヨコナデのち外面に刺突文。頸部内外面粗いハケ目。	淡黄灰色 砂粒多含	口縁：1/4	表面剝離進む。 外面に煤付着。	13-0005
6	SX2	弥生土器 壺	口径：7.3? 体径：9.6 裾径：7～8 器高：16.7	外面全体と口頸部内面ヘラミガキ。底部内面と裾部内面にハケ目残る。口縁部と肩部の外面に貝殻腹縁刺突文。	淡黄灰色 砂粒含	口縁：1/4 体部：3/4 裾部：1/12	表面剝離進む。	13-0006
7	SX2	弥生土器 壺	口径：14.0	肩部内面に細かいハケ目残る。	淡赤褐色 微砂粒含	口縁：4/5	表面剝離激しい。 8と同一個体。	13-0007
8	SX2	弥生土器 壺	底径：6.3	内外面に細かいハケ目残る。	淡赤褐色 微砂粒含	底面：完存	表面剝離激しい。 7と同一個体。	13-0008
9	SX2	弥生土器 甕	口径：15.8?	口縁部内外面ヨコナデのち外面に押し刺突文。肩部外面と頸部内外面粗いハケ目。	淡橙褐色 砂粒含	口縁：1/3	外面に煤付着。 13と同一個体か。	13-0009
10	SX2	弥生土器 甕	口径：17.8?	口縁部内外面ヨコナデのち外面に押し刺突文。肩部内外面と頸部内面粗いハケ目。	淡赤褐色 砂粒多含	口縁：1/2	14と同一個体か。	13-0010
11	SX2	弥生土器 甕	台径：6.6?	外面に不連続斜めハケ目。	淡赤褐色 砂粒多含	台部：1/4		13-0011
12	SX2	弥生土器 甕	台径：7.7	台端部内外面にハケ目残る。	暗赤褐色 砂粒含	台部：3/4		13-0012
13	SX2	弥生土器 甕		底部内外面粗いハケ目。	淡赤褐色 砂粒多含	底部：2/3	体部外面煤付着。 9と同一個体か。	13-0013
14	SX2	弥生土器 甕	台径：9.0	底部内外面粗いハケ目。台部外面に不連続斜めハケ目。	淡赤褐色 砂粒多含	台部：完存	体部外面煤付着。 10と同一個体か。	13-0014
15	SX3 淡黒褐色土	弥生土器 壺	口径：13.4	口頸部内外面ヘラミガキか。	淡褐色 砂粒多含	口縁：3/5	表面剝離激しい。	13-0015
16	SX4 東側頂部 黄褐色土	弥生土器 壺	口径：12前後 体径：11.6? 底径：4.5? 器高：12.5?	外面ヘラミガキか。	淡赤褐色 砂粒多含	口縁：1/4 体部：1/3	表面剝離激しい。	13-0016
17	SX4 南東裾部	弥生土器 壺	口径：9.7 体径：14.4 底径：4.8 器高：15.2	口頸部内外面ナデ。肩部外面に指描きの横線文と波状文。体部内面ヘラケズリか。底部内面にハケ目残る。	淡赤褐色 砂粒含	口縁：4/5 体部：4/5	表面剝離進む。	13-0017
18	SX4 南東裾部	弥生土器 高杯	口径：22前後 裾径：12.5 器高：20.6?	調整不明。脚部外面に横線文。透かしは円形を4方。	赤褐色 砂粒含	口縁：1/16 裾部：5/6	表面剝離激しい。	13-0018
19	SX4 南裾部流出土	弥生土器 甕	体径：12.0	外面と底部内面細かいハケ目。	淡赤褐色 細砂粒含	体部：3/5	外面に煤付着。	13-0019
20	SX4 主体部墓域内	弥生土器 鉢	口径：17.0?	調整不明。	暗赤褐色 砂粒含	口縁：1/4	表面剝離激しい。 外面に煤付着。	13-0020
21	SX5	弥生土器 甕	口径：14.4?	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ハケ目、内面ハケ目のちナデ。	暗赤褐色 細砂粒含	口縁：1/4	外面に煤付着。	13-0021
22	SX5? 流出土	弥生土器 鉢	口径：17.7? 底径：5.4 器高：8.8	内外面細かいハケ目。口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ナデ。	淡赤褐色 微砂粒含	口縁：1/10 底部：完存		13-0022
23	SX5 底 黒褐色土	弥生土器 鉢	口径：9.8? 体径：9.5 台径：3.8 器高：9.0?	調整不明。	淡黄褐色 細砂粒含	口縁：1/10 体部：7/8 台部：完存	表面剝離激しい。	13-0023

第6表 東峡遺跡・女牛谷古墳群出土遺物一覧(1)

遺物番号	出土位置	器形	計測値 (cm)	調整・技法の特徴	色調・胎土	残存度	備考	整理番号
24	SX5?	弥生土器壺	底径: 5.2	調整不明。	橙褐色細砂粒多含	底面: 完存	表面剝離激しい。	13-0024
25	SX5	弥生土器壺	口径: 10.8 体径: 12.4 底径: 4.6 器高: 16.5	口頸部内外面と体部外面へラミガキ。口縁部ヨコナデ。底部内面に細かいハケ目残る。	赤褐色細砂粒含	口縁: 完存 体部: 3/5	表面剝離進む。	13-0025
26	SX6 黒色土上面	弥生土器甕	台径: 6.6	台部外面ナデ、内面ハケ目。台端部ヨコナデ	淡褐色砂粒含	台部: 完存	表面剝離進む。	13-0026
27	SX6 黒色土上面	弥生土器甕	台径: 7.8?	台部内外面ナデ。	淡褐色砂粒少含	台部: 1/3		13-0027
28	SX7	弥生土器壺	体径: 12.0 底径: 3.2	調整不明。	黄橙色砂粒多含	体部: 4/5	表面剝離激しい。	13-0028
29	SX8 東斜面	弥生土器高杯		脚部外面に櫛描横線文。透かしは4方か。	赤褐色砂粒含			13-0029
30	SX8 東斜面	弥生土器高杯		脚部外面に櫛描横線文。透かしは3方か。	暗赤褐色砂粒多含		表面剝離進む。	13-0030
31	SX8 東斜面	弥生土器鉢	底径: 3.8	内外面ハケ目。底面ナデ。	暗赤褐色微砂粒含	底面: 完存		13-0031
32	SX8 東斜面	弥生土器壺	口径: 20.7	外面細かいハケ目、内面ナデ。口縁部外面に歯齒刺突文と竹管文。	橙褐色砂粒多含	体部: 9/10	表面剝離激しい。	13-0032
33	SX9 墓竈内	弥生土器高杯		脚部外面に櫛描横線文。透かしは3方か。	赤褐色砂粒含		表面剝離激しい。	13-0033
34	SX9 墓竈内	弥生土器壺	口径: 5.5	口縁部内外面と肩部外面へラミガキ。体部内面ナデか。	暗赤褐色微砂粒含	口縁: 7/8	表面剝離進む。	13-0034
35	SX9 墓竈内	弥生土器壺	口径: 14.8	口縁部外面竹管文と横線文か。肩部外面刺突文。	暗赤褐色砂粒含	口縁: 7/8	表面剝離激しい。	13-0035
36	SD13 黄褐色粘質土	弥生土器甕	口径: 14.8?	口縁部内外面ヨコナデのち外面に押し刺突文。肩部外面と頸部内外面粗いハケ目。	淡橙褐色細砂粒含	口縁: 1/4		13-0036
37	SD13 黄褐色粘質土	弥生土器甕	口径: 14.9	口縁部内外面ヨコナデのち外面に押し刺突文。肩部内外面と頸部内面粗いハケ目。	淡橙褐色砂粒含	口縁: 2/3		13-0037
38	SD13 黄褐色粘質土	弥生土器壺	口径: 13.2	調整不明。	淡橙褐色砂粒少含	口縁: 3/4	表面剝離激しい。	13-0038
39	5号墳	土師器甕	口径: 20.7 体径: 25.5?	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ハケ目、内面ナデか。	淡黄灰色砂粒少含	口縁: 4/5 体部: 1/3	表面剝離激しい。	14-0039
40	6号墳	須恵器碗	口径: 14.4 器高: 6.9?	内外面ロクロナデ。底部外面ロクロヘラケズリ。	淡灰色砂粒含	口縁: 2/5		14-0040
41	7号墳 主体部墓竈内	須恵器杯身	口径: 9前後 器高: 3.0	内外面ロクロナデ。底部外面へラ切り痕、一部ロクロヘラケズリか。	淡灰色微砂粒含	完存	口縁部近く自然袖付着。	14-0041
42	8号墳	須恵器杯身	口径: 12.6 器高: 4.2	内外面ロクロナデ。底部外面ロクロヘラケズリ。ロクロ右回転。	灰色砂粒含	完存		14-0042
43	10号墳 北東裾部	須恵器杯蓋	口径: 14.5 器高: 4.3	内外面ロクロナデ。天井部外面ロクロヘラケズリ。ロクロ右回転。	青灰色砂粒含	口縁: 4/5 体部: 完存		14-0043
44	10号墳 北東裾部	須恵器杯身	口径: 12.8 器高: 4.2	内外面ロクロナデ。底部外面ロクロヘラケズリ。ロクロ右回転。	淡灰色細砂粒含	口縁: 4/5 体部: 完存		14-0044
45	10号墳? 墳丘北方	須恵器杯身	口径: 12.8? 器高: 4.8	内外面ロクロナデ。底部外面ロクロヘラケズリ。ロクロ右回転。	青灰色細砂粒含	口縁: 1/10 体部: 完存		14-0045
46	5号墳南裾部	耳環	径3.2×3.0cm、断面径0.7×0.6cm、重さ20.7g。	銅芯銀張裂か。				14-0046
47	SX10	耳環	径2.8×? cm、断面径0.6×0.6cm、重さ10.8g。	銅芯銀張裂。				14-0047
48	SX10	耳環	復元径2.4cm、重さ4.5g。	銅芯銀張裂。				14-0048
49	SX10	耳環	径2.6×? cm、断面径0.6×0.6cm、重さ7.8g。	銅芯銀張裂。				14-0049

第7表 東峡遺跡・女牛谷古墳群出土遺物一覧(2)

が出土した。45の須恵器杯身はSX1近くの屋根上から出土したものである。

SX10 7号墳の南裾部分で検出されたきわめて浅い土坑で、埋土の黒色土上面から耳環が3点(47

～49)出土した。埋葬施設や古墳の付属施設としては遺構の輪郭が不明瞭なため、7号墳の主体部にあった耳環が偶然に裾部の窪みに流入したとも考えられる。

7. 時期不明の遺構と遺物

SX11・SX12 SX11は5号墳の、SX12は6号墳の墳丘上で検出された。SX12は人頭大の石を並べ置いて方形の区画をしたもので、規模は南北が約1.6m、東西が約1.2mである。SX11は残りがきわめて悪いが、SX12と同じような形態をもっていたと思われる。いずれも中世墓の痕跡と思われるが蔵骨器等の遺物は認められなかった。

SD13 SX4と5号墳との間にあり、尾根を断

面V字状、深さ約2.3mに掘り込んで築かれた堀切状の遺構である。埋土中よりS字状口縁台付甕(36・37)、二重口縁壺(38)が出土した。S字状口縁台付甕は体部から台部にかけての破片もほぼ2個体分出土している。SD13の築造時期はS字状口縁台付甕(36・37)の時期である可能性が高い。

SR14・SR15 いずれも幅約2mの道路で、時期は全く不明である。

8. まとめ

弥生時代後期末葉とした遺構から出土した土器はいずれも欠山式土器の範疇に入るものである。この時期の土器の中で時期細分の基準となっているS字状口縁台付甕を赤塚次郎氏の編年でみると、SX1出土の4と5は明らかにO類に相当し、SX2の9・10はA類の古段階に相当するものと思われる。また、時期不明としたSD13出土のS字状口縁台付甕(36・37)もO類あるいはA類の古段階に相当するものである。

S字状口縁台付甕の最も古いタイプとされるO類・A類古段階の時期については、古墳時代の開始時期の議論ともかかわって、弥生時代のものとする考え

方と最古の土師器とする考え方^⑬とが並立している。本報告の執筆者にはその議論に参加するだけの知識がないため深くは立ち入らないことにする。

いずれにしても方形台状墓としたSX4・SX8は弥生時代の墓制の延長上にあるもので、前期古墳とははっきり区別されるべきものと考えている。しかし、SX4は推定とはいえ長軸40mもの大きな規模をもち、県下の弥生時代の埋葬施設としては群を抜いている。このことは古墳時代前期後半に5基の大型の前方後方墳を集中して築いたこの地域の卓越性を予感させるものとして注目すべきであろう。

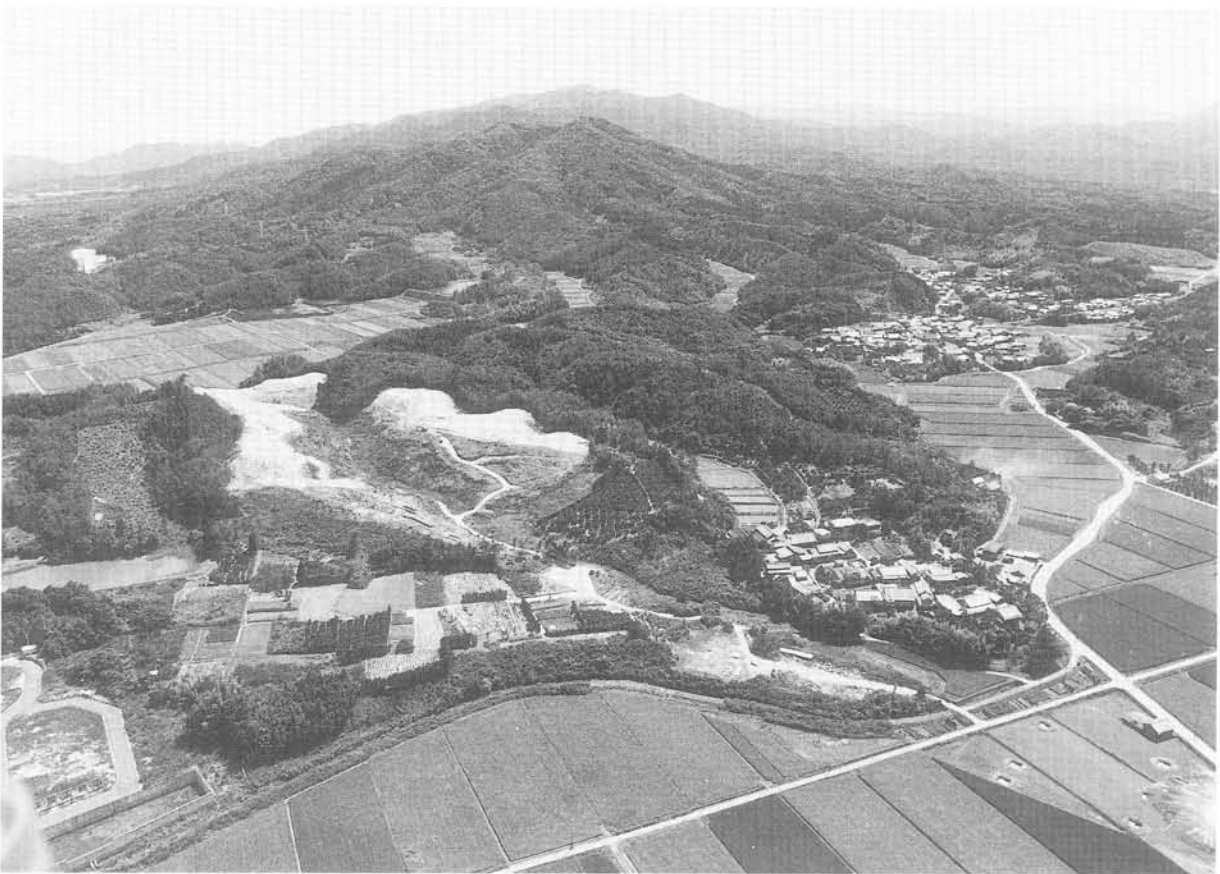
(前川嘉宏・野田修久)

〔註・参考文献〕

- ① 谷本鋭次『中ノ庄遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会1972
- ② 『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要Ⅰ 下之庄東方遺跡(高畑地区)』三重県教育委員会 1987
『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要Ⅱ 下之庄東方遺跡(小野・四反畑・夜ノ堀地区)』三重県教育委員会 1988
- ③ 河瀬信幸『片野遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1985
- ④ 伊藤裕偉『西野4号墓』『上野1号墳』『第24回埋蔵文化財研究集会 定型化する古墳以前の墓制 第Ⅱ分冊 近畿、中部以東篇』埋蔵文化財研究会 1988
- ⑤ 伊勢野久好『三重県の前方後方墳』『古代』第86号 早稲田大学考古学会 1988
伊勢野氏は雲出川下流左岸に存在していた大塚山古墳(久居市)も前方後方墳であったと推定している。
- ⑥ 山崎恒哉・稲本賢治『西野7号墳』『近畿自動車道(久居～勢

和)埋蔵文化財発掘調査報告』第3分冊4 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991

- ⑦ 粘土槌を主体部としていたとされ、碧玉製車輪石が出土しているが、現在は消滅しており詳細は不明である。
- ⑧ 下村登良男『八重田古墳群発掘調査報告書』松阪市教育委員会 1981
- ⑨ ⑧と同じ。
- ⑩ 『松阪市史 第2巻 資料編 考古』松阪市 1987
女牛谷1号墳～3号墳の記述を引用するにあたっては、縦書きの原文を横書きにしたため、記述方法を変えた部分もある。
- ⑪ 赤塚次郎『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1990
- ⑫ 加納俊介『4東海』『古墳時代の研究 第6巻 土師器と須恵器』雄山閣出版 1991
- ⑬ ⑪と同じ。



調査区遠景（北東上空から）



調査区全景（北上空から）



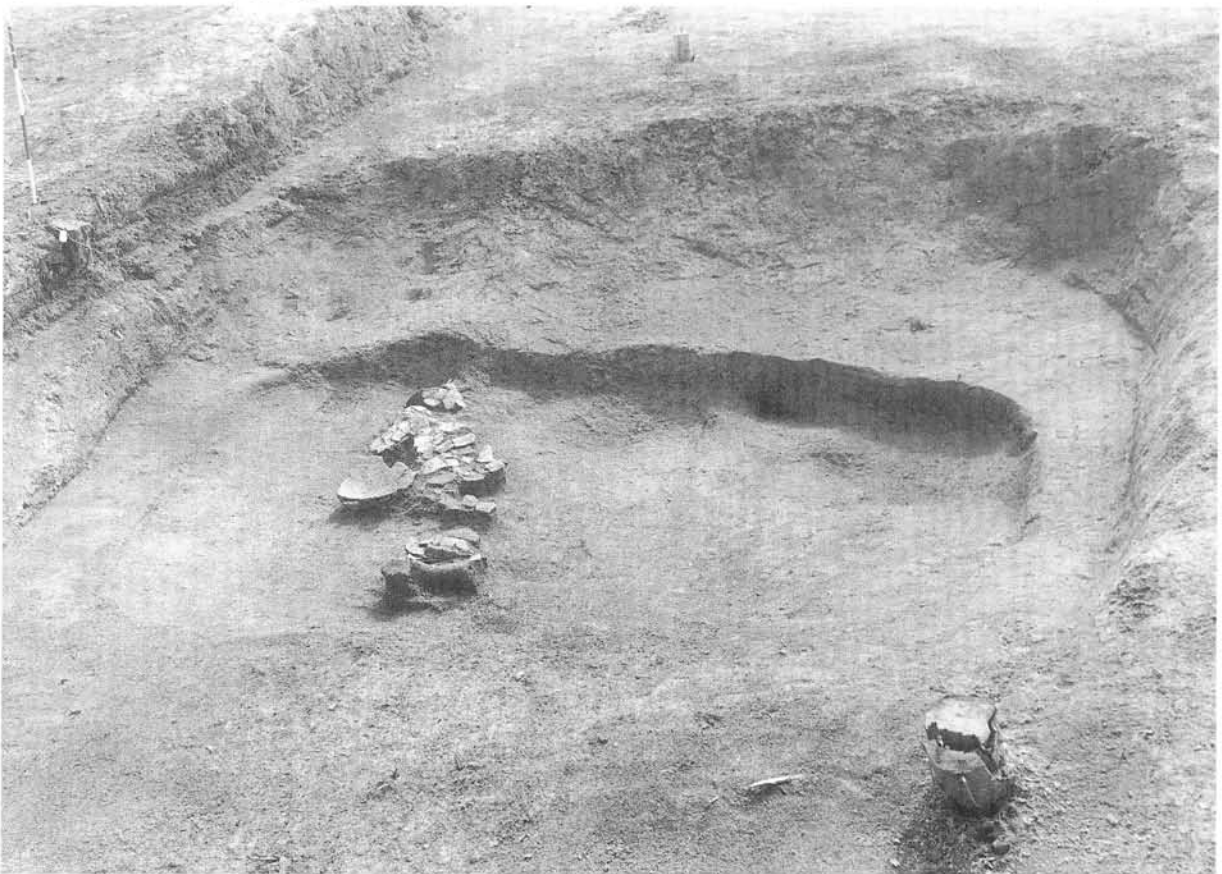
調査区西尾根 遺構全景（上空から・北は右）



調査区西尾根（南から）

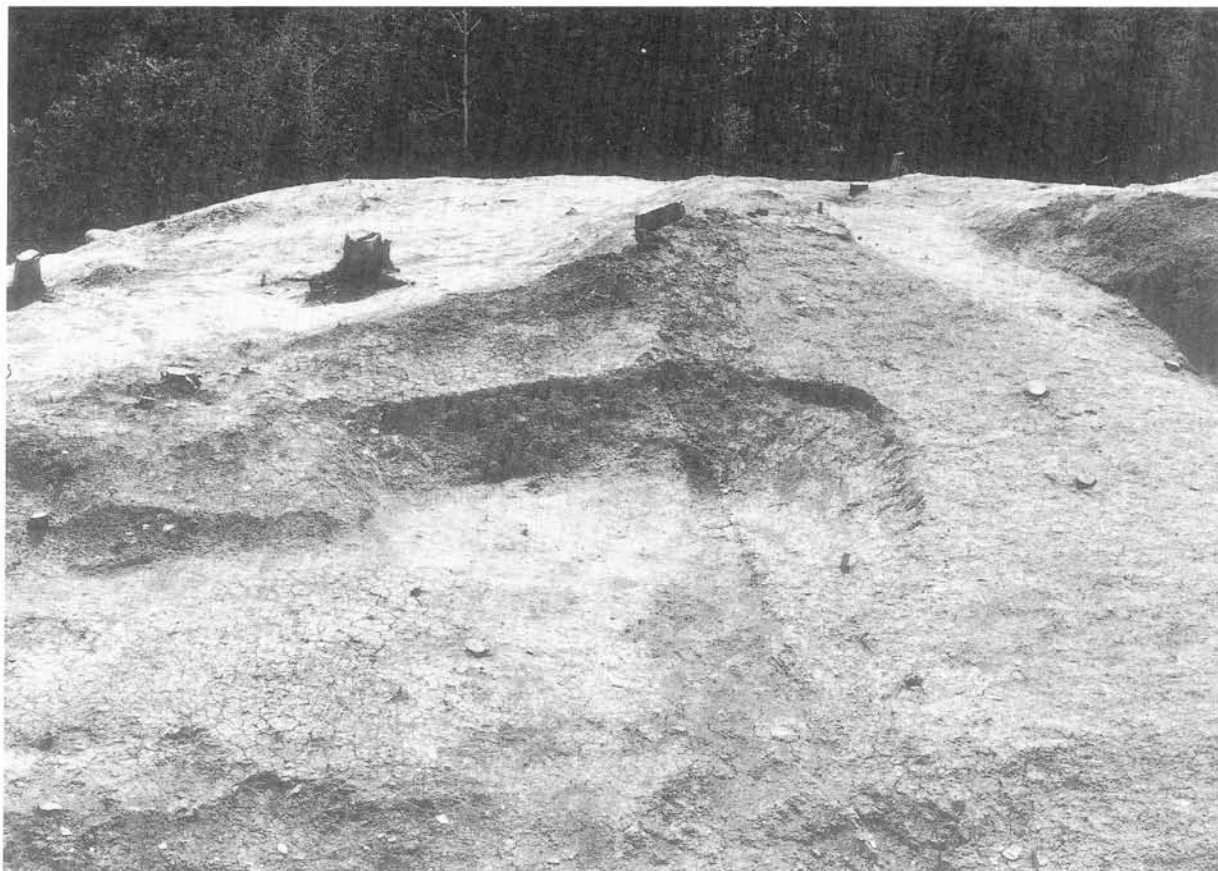


SX 1・SX 2・10号墳（北から）



SX 2（東北から）

PL 4



S X 3 (東北から)



10号墳 (東から)



調査区南尾根（上空から・北は右）

P L 6



調査区南尾根 遠景（北から）



S X 4（北から）



5号墳・SX4 (南西から)



5号墳・6号墳 (北から)



5号墳・6号墳・SD13・SR14・SR15 (東から)



6号墳・SR14 (東から)

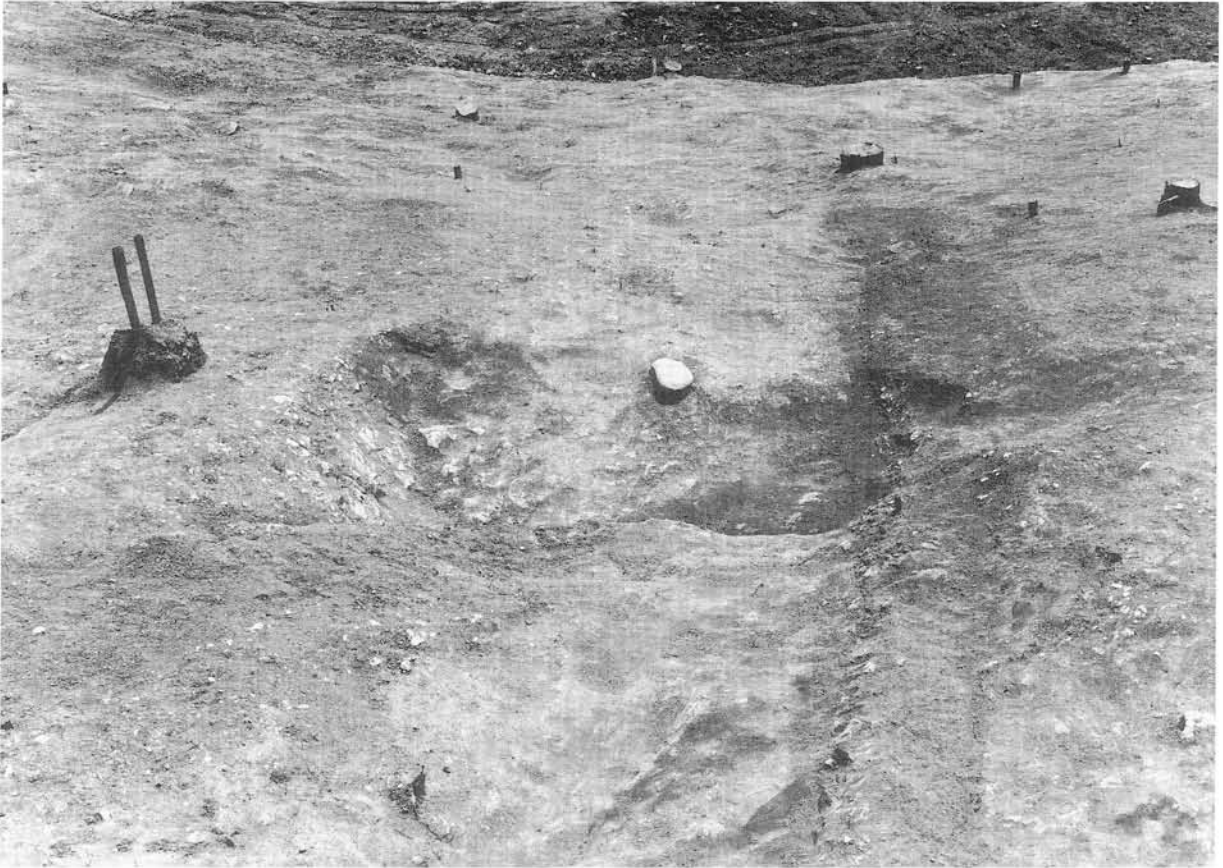


S X 12 (北から)



S X 5 (北東から)

P L 10



S X 6 (北東から)



7号墳周囲 (西から)

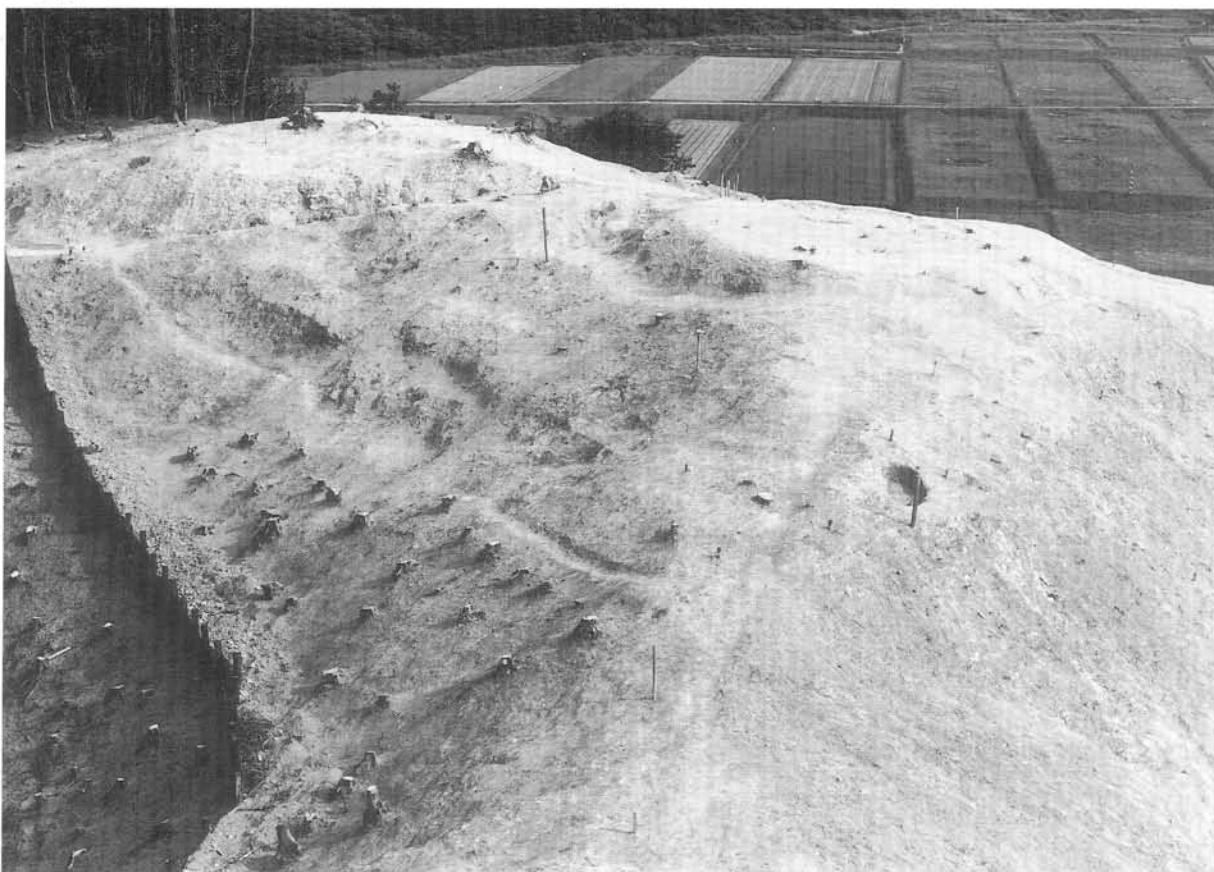


7号墳（北から）



S X 4 主体部・8号墳（南東から）

P L12

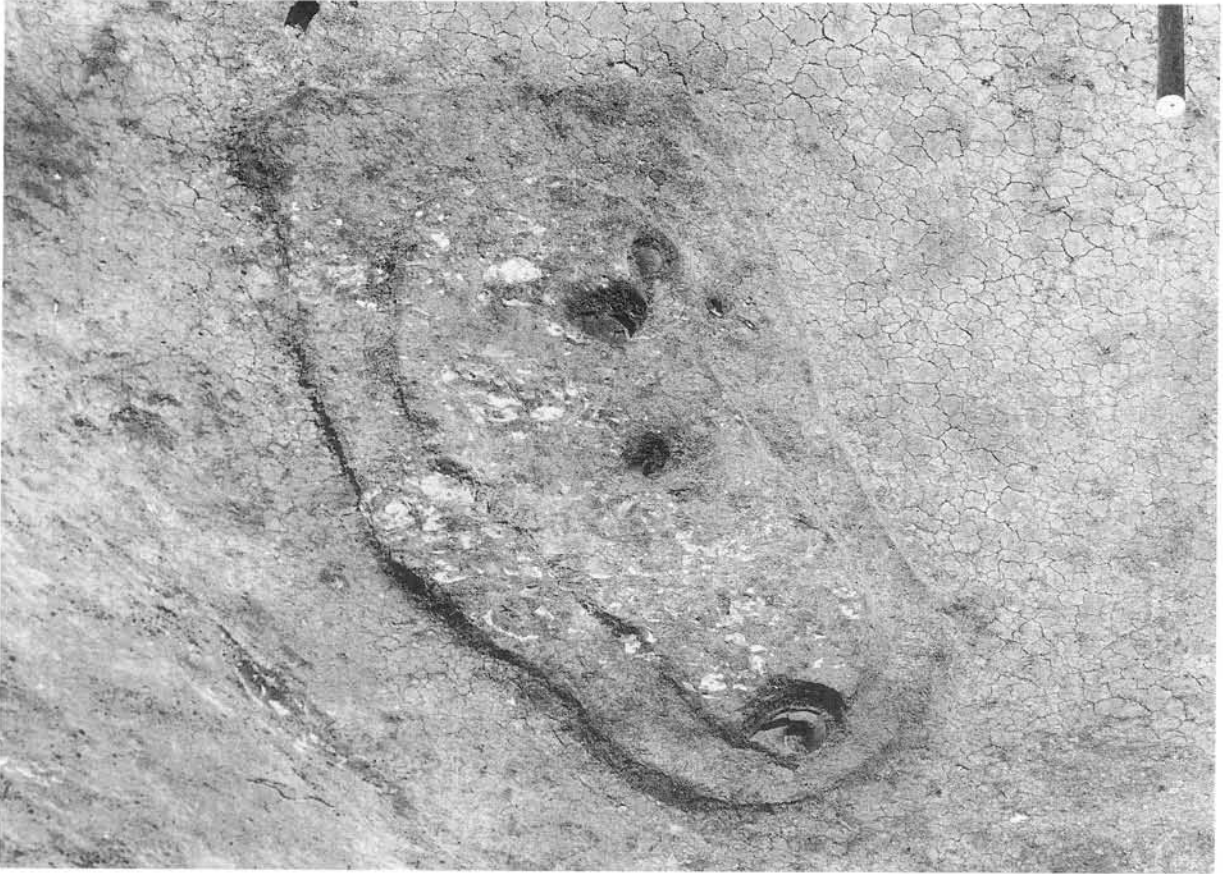


SX 4・8号墳（北から）

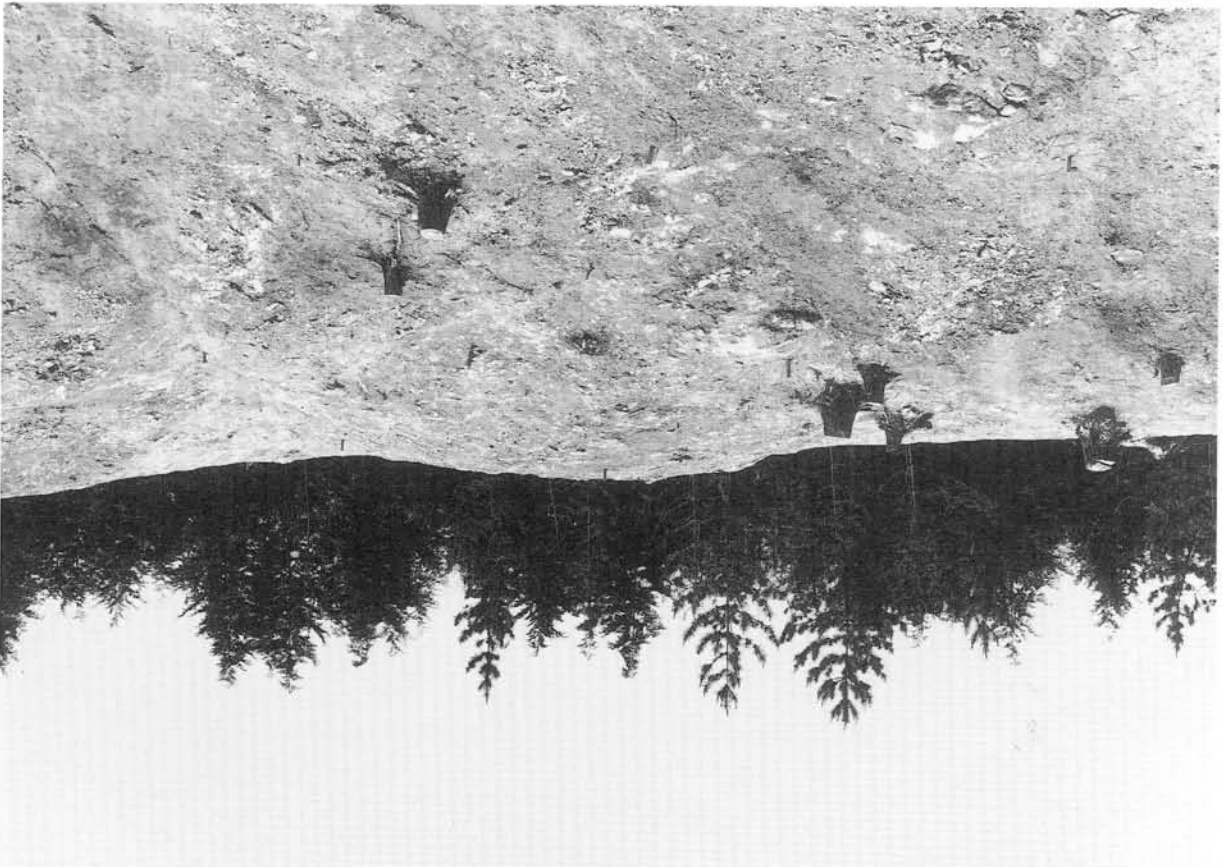


SX 4・SX 8（北から）

S X 9 (北北東から)



4号墳 (西から)



P L 13

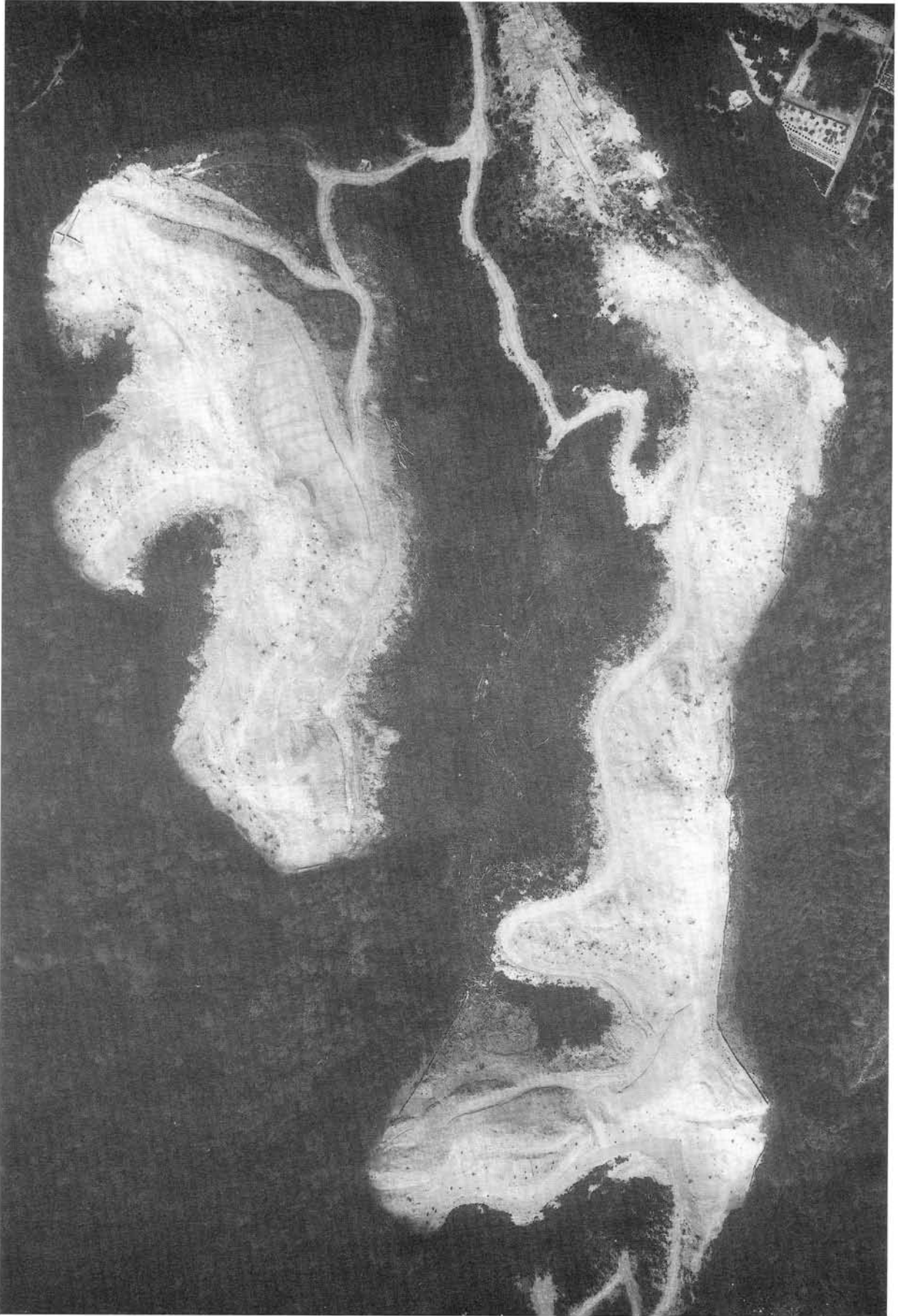
PL14



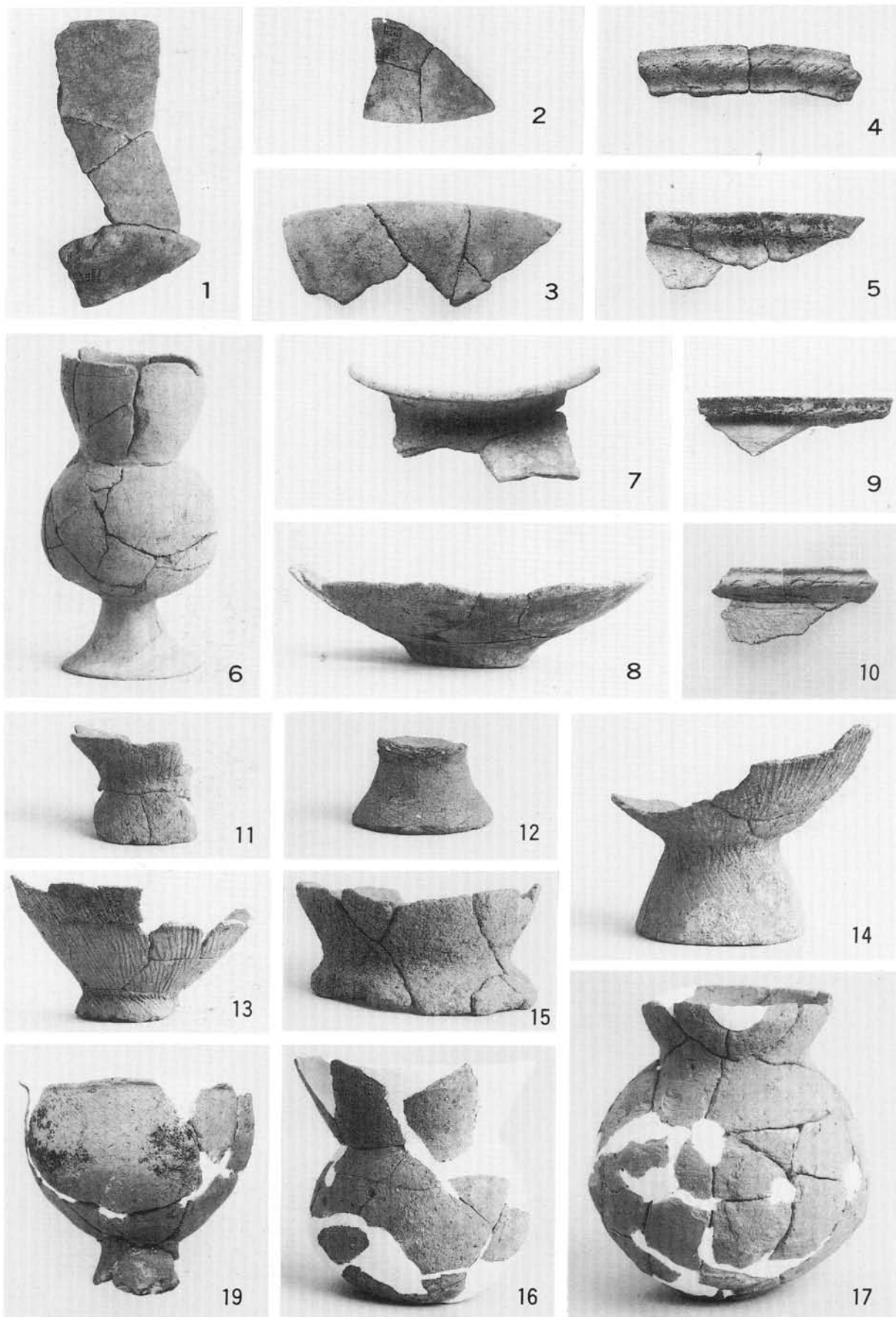
9号墳・SX9 (北から)



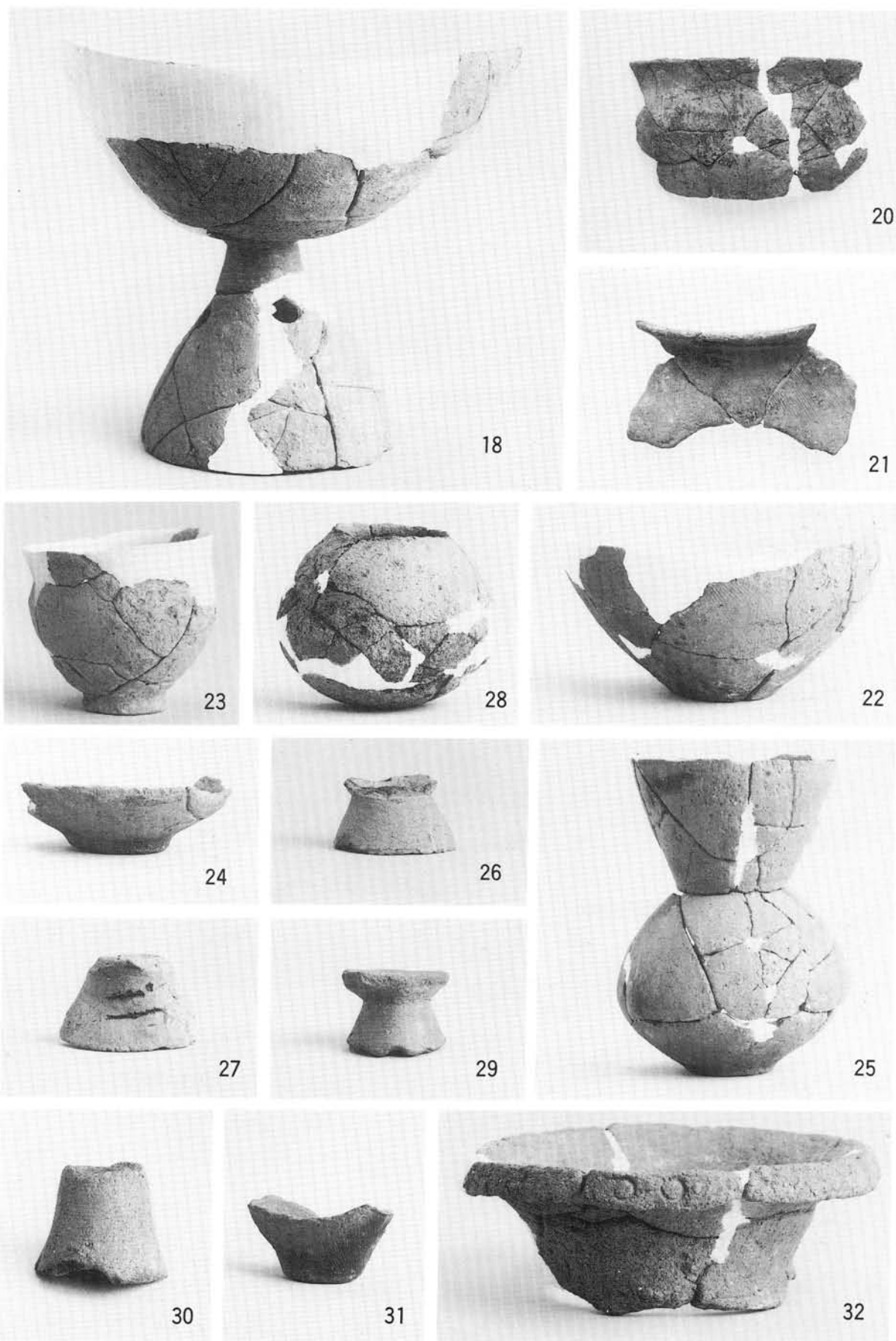
9号墳 (南西から)



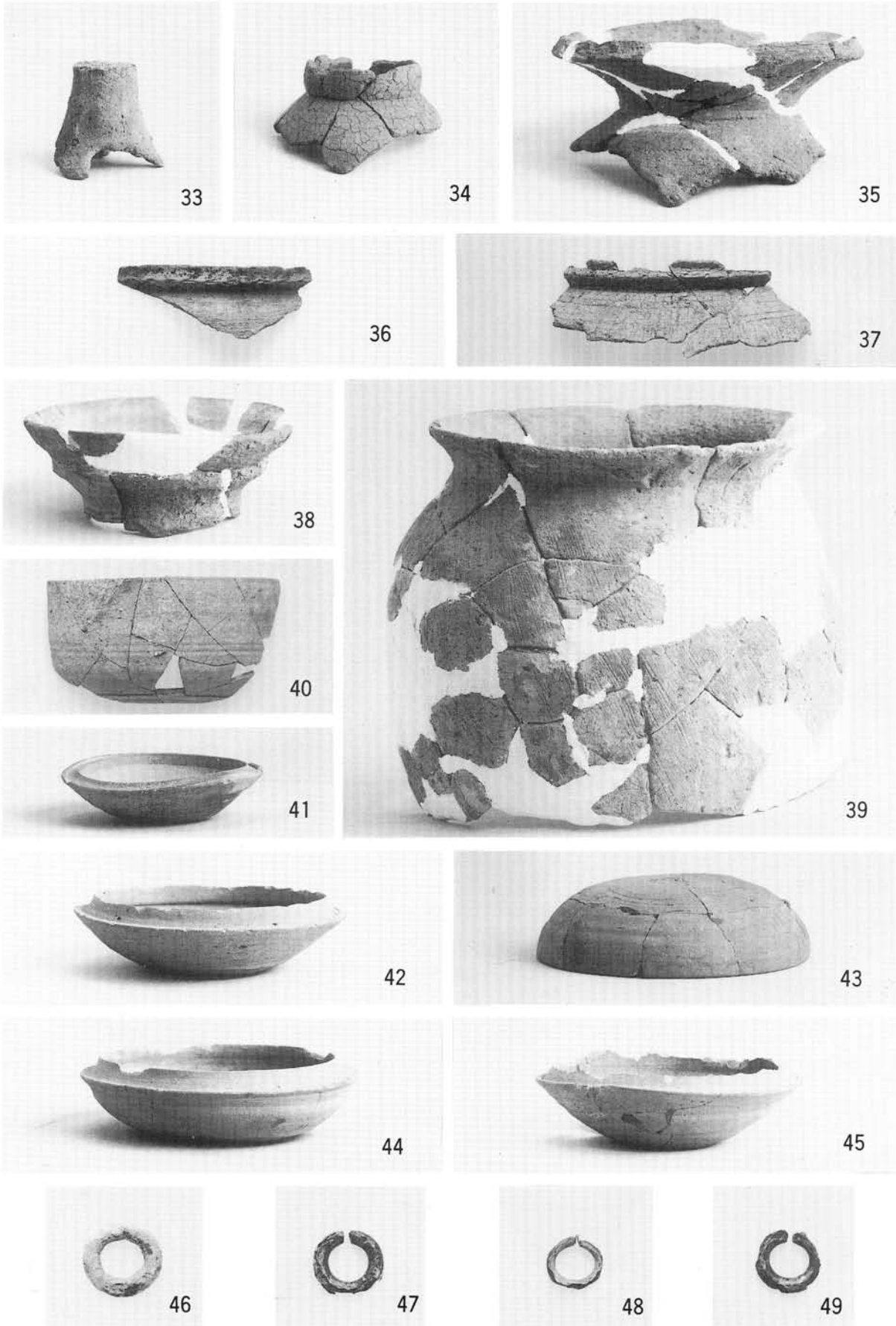
調査区全景（上空から・北は上）



出土遺物 (1 : 3)



出土遺物 (1 : 3)



出土遺物 (33~45=1:3、46~49=1:2)

平成3(1991)年3月に刊行されたものをもとに
平成18(2006)年1月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告87-7

近畿自動車道（久居～勢和）

埋蔵文化財発掘調査報告

— 第3分冊1 —

1991（平成3）年3月31日

編集 三重県教育委員会
発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 東海印刷株式会社
